新富町文化財調査報告書　第 49 集

春日遺跡8次

―個人農地土壌改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００７．12

宮崎県 新富町教育委員会

新富町文化財調査報告書　第 49 集

春日遺跡8次

―個人農地土壌改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００７．12

宮崎県 新富町教育委員会

１．春日遺跡８次（北から）

巻頭図版２

１．春日遺跡８次（真上から）

序　　文

新富町は太平洋に面し、九州山地から流れる一ツ瀬川が形成した平野を有しています。この平野から台地上には、旧石器時代から連綿と続く埋蔵文化財があり、春日遺跡もその一つです。

春日遺跡では最近、一般農道整備事業や県道拡幅に伴う発掘調査が相次ぎ、旧石器時代から中世に至る遺跡の存在が明らかになっています。また、遺跡内には国指定史跡新田原古墳群が分布することから、古墳時代に関係する遺構が特に多いようです。

今回の調査区は春日遺跡の南端部に位置し、隣接する農道の調査では集石遺構や縄文後・晩期の遺物、古墳時代中期の住居址が確認されています。８次調査ではこれらの遺構がさらに広がることが確認されました。特に古墳時代の住居址は計16軒確認されたことになり、かなりの規模の集落が存在したものと推定できます。同時期に存在する新田原古墳群と合わせて貴重な資料であることが判明しました。

町ではこれらの資料を、学術研究はもとより広く生涯学習の素材として活用していく考えです。

最後になりましたが、調査に際してお世話になった関係各機関の方々に深く感謝を申し上げます。

平成19年12月

新富町教育委員会
教育長　　米　良　郁　子

例　　言

1．本書は平成15年に宮崎県新富町教育委員会が行った農地改良事業に伴う春日遺跡８次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査及び報告書作成は、国庫補助を適用して行った。

3．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ平板実測にて作成した250分の１測量図を基に作図した。

5．本書で使用する方位は座標北（座標第Ⅱ系）であり、レベルは海抜絶対高である。

6．遺構の土層図と土器等の色調は『新版標準土色帖』に拠った。

7．遺構実測は樋渡将太郎、鈴木資子が行った。

8．遺構・遺物の写真は樋渡が行った。

9．整理作業は樋渡、杉尾、甲斐、清で行い。遺物実測及びトレースは樋渡、甲斐、塩冶、大園が行った。

10. 本書の編集は樋渡が行った。

11. 春日遺跡は平成15年度の概要報告書作成時では、国指定史跡新田原古墳群の分布域の一部として捉えられていた。しかし、平成18年度に行った第２次遺跡詳細分布調査において、遺跡の範囲が古墳分布以外にも広く及ぶことが判明したため、それぞれ別の周知の埋蔵文化財包蔵地として認定するに至った。そのため概要報告書では遺跡番号1001となっているが今回は1004に変更されている。

12. 本書で使用する遺構略称はそれぞれ、SA＝竪穴住居、SC＝土坑、SE＝溝状遺構、SH＝掘立柱建物、SI＝集石で示している。また、同一台地上にある祇園原遺跡と区別するために略称のあとに春日遺跡＝K、祇園原遺跡＝Gを付すことにしている。調査略称のあとの２桁数字は「調査次」を、そのあとの２桁数字は遺構番号を示す。

例）「SAK0801」の場合、春日遺跡８次調査で検出した１号竪穴住居址の略称となる。

13. 基準点及び水準点測量は有限会社服部測量に委託した。

14. 航空写真の撮影は株式会社スカイサーベイに委託した。

15. 出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会生涯学習課に保管してある。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査経過 …… 1
第３節　調査組織 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第１節　遺跡の位置と立地 …… 3
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の概要
第１節　調査の概要 …… 8
第２節　遺跡の層位 …… 8

第Ⅳ章　調査の記録
第１節　縄文時代早期の調査 …… 11
１．検出遺構 …… 11
２．出土遺物 …… 11
第２節　縄文時代晩期の調査 …… 13
１．調査の概要 …… 13
２．出土土器の分類 …… 13
３．遺構と遺物 …… 14
第３節　古墳時代の調査 …… 24
１．調査の概要 …… 24
２．遺構と遺物 …… 24
第４節　中世および時期不明の遺構の調査 …… 35
１．中世の遺構と遺物 …… 35
２．掘立柱建物群 …… 38
３．焼土遺構 …… 43

第Ⅴ章　考察とまとめ
第１節　縄文時代晩期の土器 …… 50
第２節　古墳時代の住居と遺物 …… 50
第３節　まとめ …… 51

挿　図　目　次

図版１　調査した遺跡と周辺遺跡の位置 …… 4
図版２　春日・祇園原地区における既往の調査 …… 5
図版３　春日遺跡８次遺構配置図 …… 9
図版４　縄文時代早期の集石遺構 ……12
図版５　縄文時代早期の遺物 ……13
図版６　SCK0801とSCK0802 ……15
図版７　SCK0801出土遺物① ……15
図版８　SCK0802出土遺物② ……16
図版９　縄文時代晩期土器溜り出土遺物① ……17
図版10　縄文時代晩期土器溜り出土遺物② ……18
図版11　縄文時代晩期土器溜り出土遺物③ ……19
図版12　縄文時代晩期包含層出土土器① ……21
図版13　縄文時代晩期包含層出土土器② ……22
図版14　縄文時代晩期出土石器 ……23
図版15　SAK0801・SAK0802 ……25
図版16　SAK0801出土遺物① ……26
図版17　SAK0801①・SAK0802出土遺物 ……27
図版18　SAK0803・SAK0804・SAK0807 ……28
図版19　SAK0803出土遺物 ……29
図版20　SAK0804出土遺物① ……30
図版21　SAK0804出土遺物② ……31
図版22　SAK0805・SAK0806 ……32
図版23　SAK0805・SAK0806出土遺物① ……33
図版24　SAK0806出土遺物② ……34
図版25　SEK0801出土遺物 ……35
図版26　SEK0801 ……36
図版27　掘立柱建物群配置図 ……38
図版28　SHK0801・SHK0802 ……39
図版29　SHK0803・SHK0804 ……40
図版30　SHK0805・SHK0806 ……41
図版31　SHK0807 ……42

表　目　次

表１　新富町域の台地上における基本土層 ……10
表２　掘立柱建物計測表 ……43
表３　春日８次縄文土器観察表 ……44
表４　春日８次石器計測表 ……46
表５　春日８次土師器・須恵器観察表 ……47

図　版　目　次

巻頭図版１　１．春日遺跡８次（北から）
巻頭図版２　１．春日遺跡８次（真上から）
図版１　１．春日遺跡８次（北から）
　２．春日遺跡８次（真上から）
図版２　１．SIK0801
　２．SIK0802
　３．SIK0803
図版３　１．SCK0802
　２．SCK0801
　３．縄文晩期土器溜り
図版４　１．SAK0801遺物出土状況
　２．SAK0801土層断面
　３．SAK0801
図版５　１．SAK0802
　２．SAK0803・0804・0807
　３．SAK0805
図版６　１．SAK0806土層断面
　２．SAK0806
　３．掘立柱建物群
図版７　１．SHK0807
　２．SEK0801土層断面①
　３．SEK0801土層断面②
図版８　１．縄文時代早期の遺物
　２．SCK0801出土遺物①
　３．SCK0801出土遺物②
　４．SCK0801出土遺物③
　５．SCK0801出土粘土塊
図版９　１．縄文晩期土器溜り出土遺物①
　２．縄文晩期土器溜り出土遺物②
　３．縄文晩期土器溜り出土遺物③
　４．縄文晩期土器溜り出土遺物④
　５．縄文晩期土器溜り出土遺物⑤
　６．縄文晩期土器溜り出土遺物⑥
　７．縄文晩期土器溜り出土遺物⑦
図版10　１．縄文晩期包含層出土土器①
　２．縄文晩期包含層出土土器②
　３．縄文晩期包含層出土土器③
　４．縄文晩期包含層出土土器④
　５．縄文晩期包含層出土土器⑤
　６．縄文晩期包含層出土土器⑥
図版11　１．縄文晩期出土石器①
　２．縄文晩期出土石器②
図版12　１．SAK0801出土遺物①
　２．SAK0801出土遺物②
　３．SAK0801出土遺物③
　４．SAK0801出土遺物④
　５．SAK0801出土遺物⑤
　６．SAK0801出土遺物⑥
　７．SAK0801出土遺物⑦
　８．SAK0801出土遺物⑧
図版13　１．SAK0801出土遺物⑨
　２．SAK0801出土遺物⑩
　３．SAK0801出土遺物⑪
　４．SAK0802出土遺物
　５．SAK0803出土遺物①
　６．SAK0803出土遺物②
図版14　１．SAK0803出土遺物③
　２．SAK0803出土遺物④
　３．SAK0803出土遺物⑤
　４．SAK0803出土遺物⑥
　５．SAK0804出土遺物①
　６．SAK0804出土遺物②
　７．SAK0804出土遺物③
図版15　１．SAK0804出土遺物④
　２．SAK0804出土遺物⑤
　３．SAK0804出土遺物⑥
　４．SAK0805出土遺物①
　５．SAK0805出土遺物②
　６．SAK0805出土遺物③
　７．SAK0806出土遺物①
図版16　１．SAK0806出土遺物②
　２．SAK0806出土遺物③
　３．SAK0806出土遺物④
　４．SAK0806出土遺物⑤
　５．SAK0806出土遺物⑥
　７．SAK0806出土遺物⑦
　８．SAK0806出土遺物⑧
図版17　１．SAK0806出土遺物⑨
　２．SAK0806出土遺物⑩
　３．SEK0801出土遺物①
　４．SEK0801出土遺物②

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

新富町は宮崎県児湯郡にあり、日向灘に面する人口約18,500人の田園都市である。町域は南北約７km、東西約９km、面積61km²で、北は高鍋町、南は宮崎市、西は西都市と接している。主幹産業は酪農や園芸などの農業で、町中央部には航空自衛隊新田原基地があることから「やさいと基地のまち」というイメージが強い。

新富町は北部に洪積台地が、南部は九州山地を水源とする一ツ瀬川が広がっており、春日地区は町の北西部に広がる新田原台地と呼ばれる洪積台地上の南部に位置し、酪農を中心とした畑地帯となっている。

春日地区一帯では戦前から開拓の手が入り、昭和43年にほ場整備が行われた。そして、平成９年度から平成15年度にかけて、県営一般農道整備事業祇園原工区に伴う工事が行われ、農業環境の整備が行われている。

平成15年９月中旬頃、地元の地権者から畑地の土壌改良を行いたいとの連絡があった。町教育委員会では、土壌改良の対象地が、平成13年度に一般農道整備事業に伴って行われた、春日遺跡２次調査区の西側にあたり、さらなる遺跡の広がりが想定されること、現地踏査の結果、今回の対象地でも多数の遺物が表採できることから、地権者と協議を行い、4638m²を全面調査することになった。

発掘調査は国庫補助事業「町内遺跡発掘調査等」を適用して平成15年９月25日から行い、平成16年１月31日に終了した。そして年度内に概要報告書を作成したが、本報告書を作成するには至らなかった。しかし、埋蔵文化財は発掘調査終了後、速やかに本報告書を作成する必要がある。このため、県文化財課や文化庁と協議を行い、平成19年度から21年度の３ヵ年間にかけて、国庫補助を適用して調査を行った遺跡の本報告書を作成することになり、平成19年度は春日遺跡８次の報告書を刊行することになった。

第２節　調査経過

春日遺跡２次調査の結果および現地踏査の結果から、工事対象地が遺跡であることは確実であった。このため、調査に先立ってバックホーによる表土剥ぎを行った。調査区は古くから牧草や柑橘類を植樹していたらしく、それに伴う攪乱の影響で、アカホヤ上面の包含層はほとんど残存していなかった。このためアカホヤ火山灰層を基準として精査を行い遺構検出に努めた。ただし、調査区の北西側では、攪乱が深くまでおよびアカホヤ火山灰層下位の黒褐色ローム層での検出となった。そして精査の結果、遺構および遺物の分布が調査区の全面におよぶことが判明した。このため、実測作業を円滑に進めるために10m×10mのグリッドを設定し実測の際の基準とした。そして測量会社に委託し国土座標の移殖を行った。遺構実測は１／20を基本とし、集石や土坑など小規模遺構に関しては１／10で行った。すべての調査終了後、１／250で調査区全体の遺構配置図の作成を平板実測で行い、最後に周辺地形および遺構配置を把握するための航空写真撮影を行い現地での調査を終了した。

出土遺物の整理は、洗浄および注記、一部の復元作業を平成15年度中に行い。本格的な復元作業と実測図作成は平成19年度に集中して行った。

第３節　調査の組織

発掘調査および整理作業の調査体制は以下のとおりである。

【平成15年度　発掘調査】

調査主体者　新富町教育委員会

総　　括　下村　喜秋（新富町教育委員会　教育長）
　　比江島年見（同　社会教育課　課長）
　　松浦　新一（同　社会教育課　課長補佐兼社会教育係長）

庶　　務　松本美奈子（同　社会教育課　主事：庶務担当）

調査担当者　有馬　義人（同　社会教育課　主任主事：文化財担当）
　　樋渡将太郎（同　社会教育課　主事：文化財担当）
　　鈴木　資子（同　社会教育課　文化財嘱託員）

参加学生　塩冶　琢磨　大園　幸輝（宮崎大学）　本部　裕美（神戸女子大学）

作　業　員　杉尾美千子　甲斐　晴子　甲斐　直美　野尻　富子　滝口　則雄　滝口恵美子
　　日野　君代　岩下ヨシ子　坂本　貞夫　本部　裕美　満尾　智美　清　美貴子
　　上原　咲子　守部まき子

【平成19年度　報告書作成】

調査主体者　新富町教育委員会

総　　括　下村　喜秋（新富町教育委員会　教育長）～６月
　　米良　郁子（新富町教育委員会　教育長）７月～
　　馬渡　和規（同　生涯学習課　課長）
　　福原　広一（同　生涯学習課　課長補佐兼社会体育係長）

整理担当者　樋渡将太郎（同　生涯学習課　主任主事：文化財担当）

調査補助　有馬　義人（同　生涯学習課　主査：文化財担当）

作　業　員　杉尾美千子　甲斐　直美　清　美貴子　坂本　貞夫　溝口　敦子

※平成19年６月に下村教育長が離任、米良教育長が着任した。

※役場内の機構改革に伴い平成19年度より社会教育課から生涯学習課へと名称が変更となった。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と立地

新富町は宮崎平野部の中央よりの日向灘沿岸部に位置し、宮崎市の中心部から約20km北になる。宮崎平野の台地は高度の異なる複数の段丘面で構成され、本町では北部に洪積台地が拡がり、それぞれ北から茶臼原面（標高約100～120m）、三財原面（標高約80～90m）、新田原面（標高約70m)で構成されている。また、鬼付女川や日置川などの小河川が洪積台地の間を流れ、河岸段丘や谷底平野を形成し、南部は九州山地を水源とする一ツ瀬川によって形成された沖積地が拡がる。

春日遺跡は一ツ瀬川左岸の新田原台地の南西部に位置し、西側は西都市と境を接している。一帯は戦前から開拓の手が入り、現在では酪農を中心とした畑地帯が拡がっている。また遺跡の北部では、国指定史跡新田原古墳群のなかの一群である祇園原古墳群の分布域と重なっており、早くから歴史的に注目される地域であった。近年では、県道拡幅や一般農道整備事業といった各種開発行為が行われ、それに伴う埋蔵文化財の調査が急増し、これまで７次わたる調査が行われてきた。その結果、旧石器時代から中世にいたる遺跡の存在が明らかとなり、春日地区のほぼ全域に遺跡が拡がることが判明した。

今回調査を行った８次調査区は、遺跡の南東端部に位置し、平成13年度に行われた一般農道整備に伴う２次調査区の隣接地である。東側は河川によって谷が形成され、眼下には南西から南側にかけて一ツ瀬川が蛇行しつつ東進している。現在の海岸線まで約７kmで、満潮時にはこの付近まで潮が遡ってくるようだ。また、古墳群までは300m程離れている。

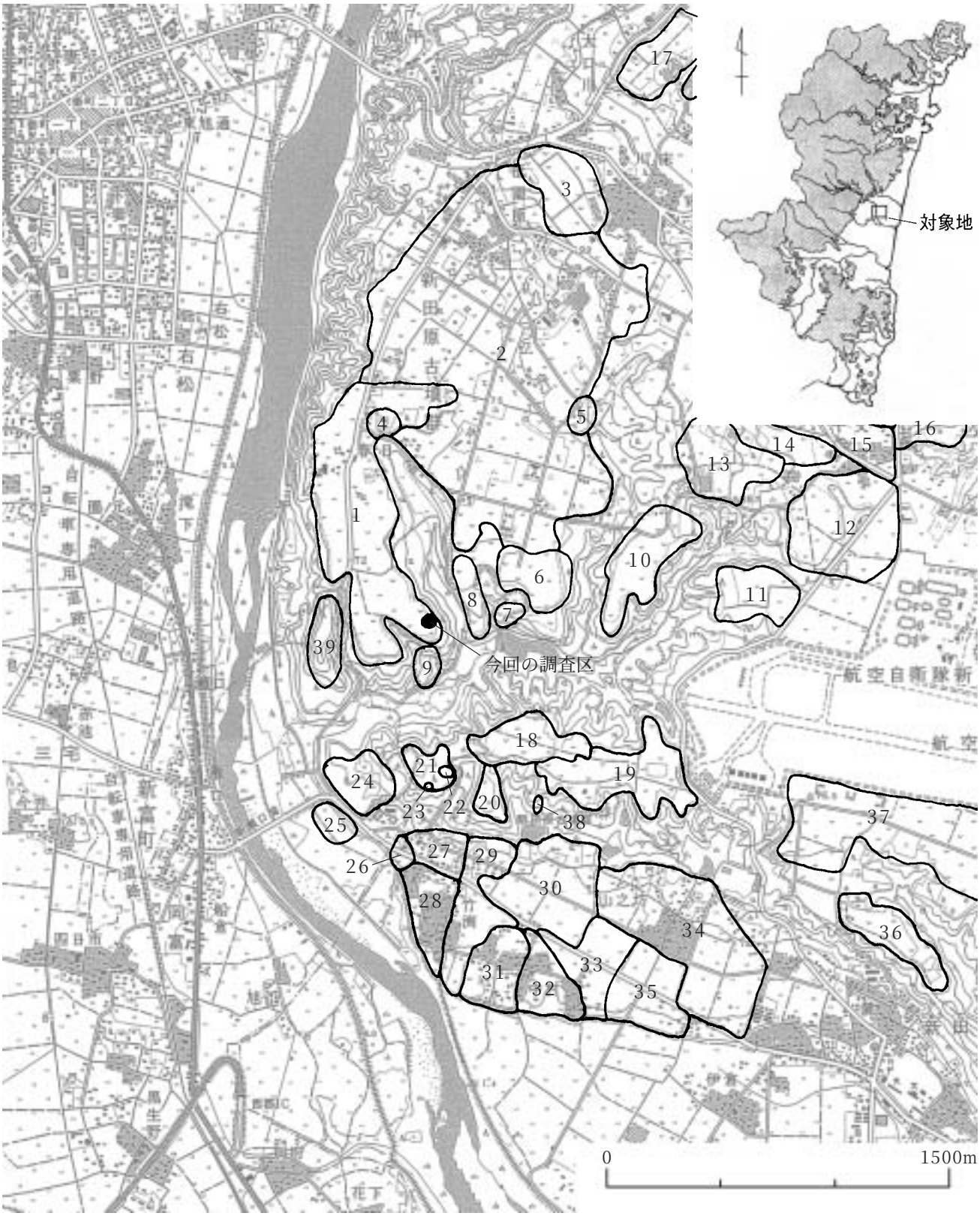
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

春日遺跡が位置する一ツ瀬川下流域は、県内で最大の古墳密集地帯である。右岸西都市域には、全国的に有名な西都原古墳群があり、九州で１位、２位の規模を誇る女狭穂塚、男狭穂塚が存在する。古代には、日向国の国府と国分寺が建立され、この地が古くから政治の中心地であったことが伺える。左岸の新富町域でも、新田原古墳群をはじめ多くの古墳が存在する。また、最近では各種開発行為に伴う発掘調査が相次ぎ、新たに多くの遺跡が発見されるに至った。町教育委員会では、平成16年度から18年度にかけてこれまでの調査成果をまとめた遺跡詳細分布調査を行い、184ヶ所もの周知の埋蔵文化財包蔵地を確認している[(1)]。

本町の人類の歴史は後期旧石器時代に遡る。平成12年度から17年度にかけて行われた東九州縦貫自動車道建設に伴う調査では、多くの遺跡でAT下位層から石器が出土し、３万年以上前の人類の足跡が明らかとなった。春日遺跡周辺では、AT下位層からの遺物の出土はないものの、春日遺跡３次[(2)]、瀬戸口遺跡[(3)]、祇園原遺跡[(4)]でナイフ型石器や細石刃、細石核が出土している。

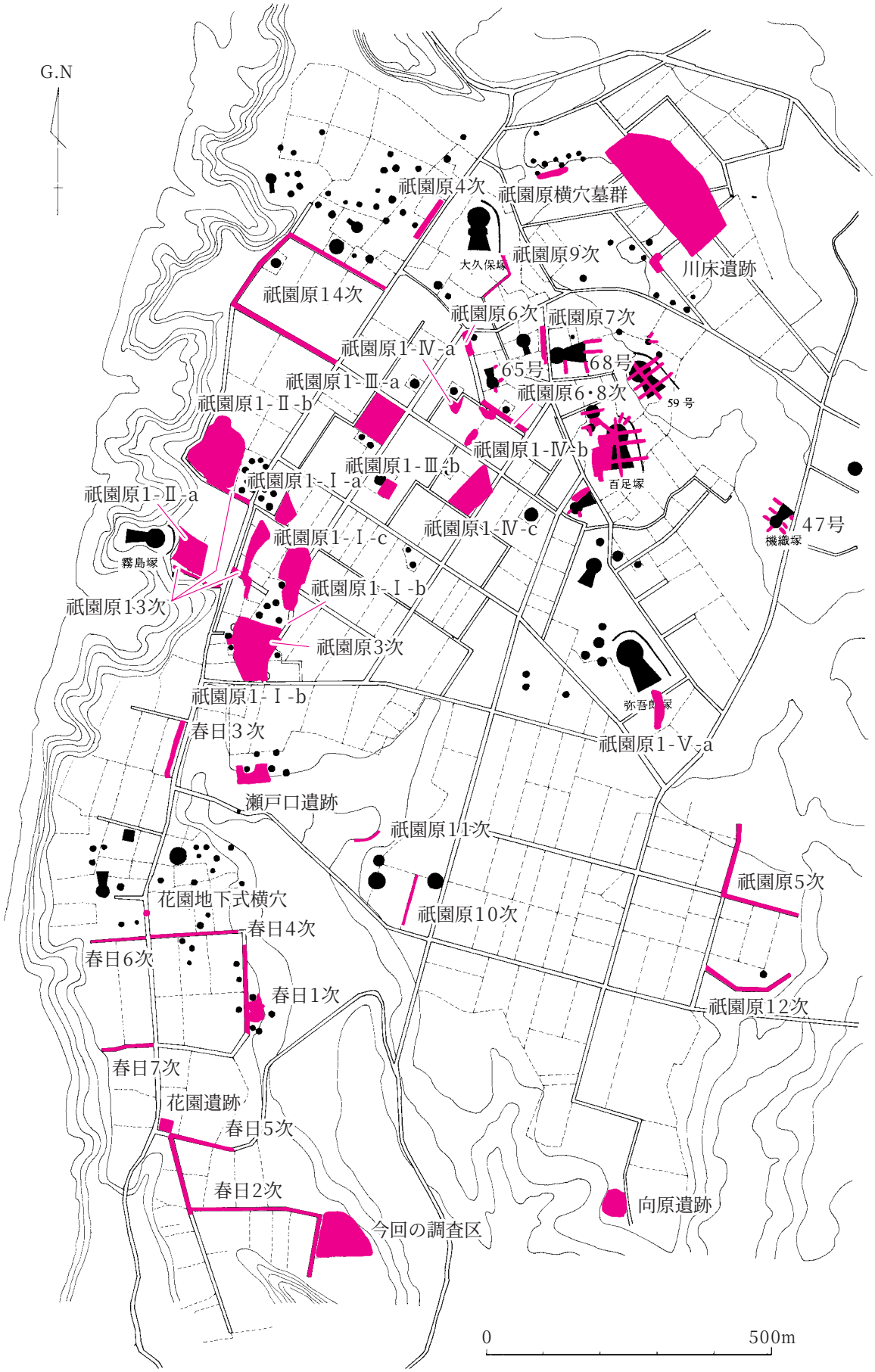
縄文時代になると洪積台地上を中心に遺跡数は多くなる。早期、後期、晩期がとくに多く、春日遺跡周辺では、台地縁辺部の傾斜地を中心に早期の集石遺構が多数検出され、貝殻円筒形土器や押型文土器が出土している。後期から晩期になると、断絶期はあるものの、広範囲にわたって、遺構・遺物が確認されるようになる。後期は三万田式から鳥井原式期、晩期は黒川式から刻目突帯文期に集中している。

弥生時代は前期の遺跡が極端に少なく、町内全域を見渡しても海岸の砂丘上に立地する今別府第２遺



（1）春日遺跡　（2）祇園原遺跡　（3）川床遺跡　（4）瀬戸口遺跡　（5）茶碗山窯跡
（6）向原第１遺跡　（7）向原第２遺跡　（8）藤山第１遺跡　（9）藤山第２遺跡　（10）尾小原遺跡
（11）新田原第１遺跡　（12）新田原第２遺跡　（13）永牟田第２遺跡　（14）永牟田第１遺跡　（15）勘大寺遺跡
（16）鍋山遺跡　（17）有高遺跡　（18）八幡上第２遺跡　（19）七又木遺跡　（20）銀代ヶ迫遺跡
（21）八幡上第１遺跡　（22）本蓮寺跡　（23）竹淵経筒　（24）宮ノ東遺跡　（25）宮ノ前遺跡
（26）竹淵Ｂ遺跡　（27）竹淵Ａ遺跡　（28）竹淵Ｃ遺跡　（29）椨神遺跡　（30）西掘田遺跡
（31）西中村遺跡　（32）中村遺跡　（33）開元遺跡　（34）山之坊遺跡　（35）野中田遺跡
（36）牧神遺跡　（37）新田原第３遺跡　（38）銀代ヶ迫横穴墓群　（39）有峰城跡

図版１　調査した遺跡と周辺遺跡の位置（１／25000）



図版２　春日・祇園原地区における既往の調査（１／10000）

跡[5]ほか数箇所で遺物の散布が確認されているのにすぎない。春日遺跡内では中期中頃以降になって台地縁辺部に小規模な集落が点在するようになる。周辺では新田原遺跡[6]、祇園原遺跡、向原第１遺跡[7]、八幡上第２遺跡[8]で数軒から十数軒規模の集落が確認されている。後期になっても同じような状況が続くが、祇園原古墳群の北に位置する川床遺跡では、後期後半から古墳時代前期に相当する周溝墓を含む木棺墓や土抗墓など195基が検出され、鉄鏃や剣など多くの鉄製品が副葬されていた[9]。向原第１遺跡の住居内からも多数の鉄製品が出土しており、この集団が豊富な鉄製品を保有していたことを物語る。また、墓制の推移を検討するうえでも重要な遺跡となっている。

古墳時代になると春日・祇園原遺跡内では祇園原古墳群の形成が始まり、墓域として利用されるようになる。前期古墳については判然としないが、古墳群の北西部には、低平な前方部をもつ前方後円墳があり、前期のうちから古墳群の形成が始まっていた可能性がある[10]。中期になると、女狭穂塚古墳に近似する墳形と川西編年Ⅲ期の埴輪をもつ大久保塚古墳が築造され、これ以降後期にかけて前方後円墳が継続して築かれるようになる[11]。春日遺跡内では北部に古墳群が形成される。内訳は前方後円墳１、方墳１、円墳27基で、前方後円墳（138号）は前方部が発達した後期古墳の様相を呈している。円墳はその多くが径10～15m程で、近年の調査の結果、いずれも後期に築造された群集墳であり、出土した須恵器を検討するとTK10型式併行期に始まり、ピークはMT85型式併行期で、隼上りⅡ型式まで継続することが分かった[12]。また、古墳周辺では地下式横穴や木棺墓、土壙墓が確認されたほか、多数の馬の埋葬土壙が確認されており、常時馬を保有していた集団の存在が想定される。

古墳が築造されると、古墳分布域内には生活痕跡が全く認められなくなり、墓域と生活空間が明確に区別されていたようだ。住居址は春日遺跡２次調査、５次調査[13]、そして今回の８次調査で中期中頃から後半にかけて比較的短期間に営まれた集落が確認できる。これらはいずれも春日遺跡の南部に位置し、古墳群とは300m程離れている。後期の集落は台地上ではなく、一ツ瀬川の河岸段丘上の標高11mに位置する竹洲C遺跡で確認できる[14]。

古代以降になると、祇園原遺跡内で、２軒の竪穴住居址と多数の土坑が検出され、うち１基から須恵器の蔵骨器が出土している[15]。春日遺跡内では溝状遺構やピット群が確認されているにすぎない。大規模な集落は台地下の、河岸段丘上を中心に営まれていた可能性が高い。

近世では、茶碗山窯で４基の窯跡が現存し、甕片などが散乱している[16]。また、寛永四年（1627年）に、佐土原藩が軍用馬飼育のために新田牧を開いたことが記録に残っており、当時の牧土手の跡が、春日神社付近に残っている[17]。

【註】

（１）樋渡将太郎「新富町の埋蔵文化財（改訂版）」『新富町遺跡詳細分布調査報告書」２　新富町教育委員会 2007

（２）柳田宏一・加藤学「祇園原遺跡・春日遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第73集　宮崎県埋蔵文化財センター　2003

（３）石川悦雄・日高孝治・北郷泰道「新田原遺跡・瀬戸口遺跡・蔵園地下式横穴墓」『新富町文化財調査報告書』第４集　新富町教育委員会　1986

（４）発掘調査ではなく分布調査によって確認した。

（５）新富町『新富町史』通史編　新富町　1992ほか

（６）（３）に同じ

（７）戌亥浩志・金丸琴路・長津宗重「向原第１遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第119集　宮崎県埋蔵文化財センター

（８）近藤協「七又木地区遺跡（八幡上・七又木・銀代ヶ迫）」『新富町文化財調査報告書』第13集　新富町教育委員会　1992

（９）有田辰美「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第５集　新富町教育委員会

（10）有馬義人「新田原古墳群」『宮崎県史叢書宮崎県前方後円墳集成』　宮崎県　1997

（11）有馬義人編「宮崎平野の古墳と古墳群」『第29回九州古墳時代研究会（宮崎県大会）資料集」　第29回九州古墳時代研究会実行委員会　2003

（12）藤本貴仁「宮崎平野の群集墳」『宮崎考古』第16号　宮崎考古学会　1998

（13）有馬義人・樋渡将太郎「祇園原遺跡・春日遺跡（本文編）」『新富町文化財調査報告書』第39集　新富町教育委員会　2004

（14）杉田康之「竹淵C遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第96集　宮崎県埋蔵文化財センター 2005

（15）飯田博之編「祇園原地区遺跡」『県営農村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県教育委員会　1996

（16）（１）に同じ。

（17）（５）に同じ。

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の概要

調査区は、南西から北東に向って緩やかに傾斜している。検出した遺構および遺物は縄文時代早期、晩期、古墳時代が中心である。

縄文時代早期は、調査区中央と南側で３基の集石を検出した。また、調査区北西側で大量の熱を帯びた礫を確認したが、集石としてのまとまりは認められなかった。遺物は貝殻円筒系、押型文、塞ノ神系の土器を少量検出している。

縄文時代晩期は、調査区南西側で土器溜りを検出し、黒川式後半から突帯文土器期に該当する土器や石器が出土した。南東側では土器や粘土塊を含む土坑（SCK0801）を検出した。土器は松添式と呼ばれる口縁部に粘土を貼り付け肥厚されるものであった。粘土塊は熱を帯び赤化しており、竹篭と思われるの圧痕が認められるものもあった。また、南西端でも土坑（SCK0802）を確認したが、形状から落し穴の可能性がある。埋土から土器小片を確認したが、時期の特定には至らなかった。喜界アカホヤ層を掘りこんでいることや、周辺の状況から、後期から晩期構築の可能性が高い。このほかクロボク残存部分から土器、石器を確認した。

古墳時代では、７軒の竪穴住居址を確認した。これらは調査区中央から東寄りに位置しておりSAK0803、SAK0804、SAK0807のみが切り合っていた。出土遺物からいずれも中期中～後半頃の構築と考えられ、SAK0803から出土した須恵器坏身はTK23型式に相当する。２次調査および５次調査で確認されたものとほぼ同時期である。

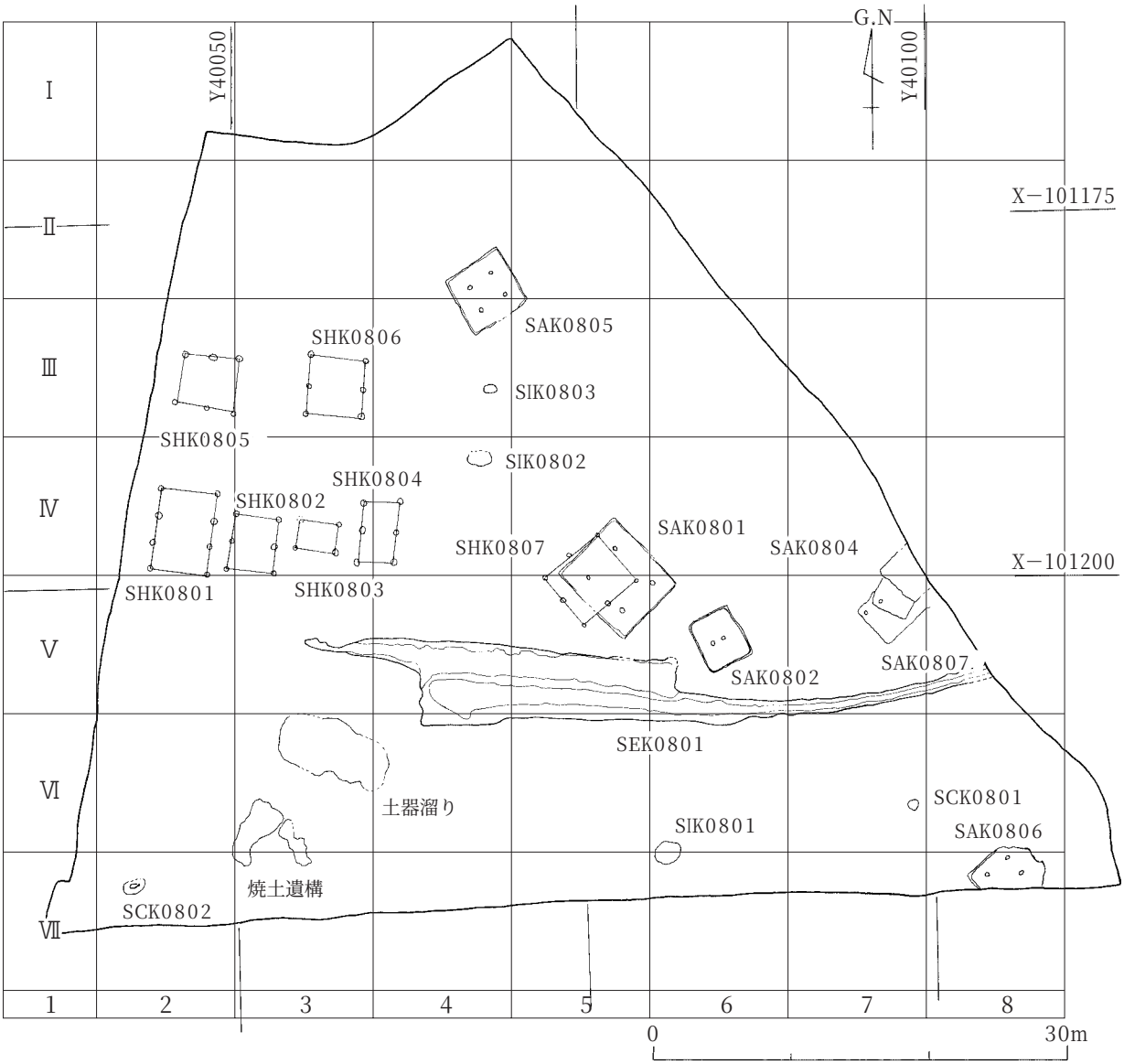
このほか、掘立柱建物７棟、溝状遺構１、焼土遺構１を検出。いずれも帰属する遺物が少なく時期の特定は困難だが、溝状遺構からは中世の遺物がわずかに含まれている。掘立柱建物は６棟が調査区北西側に規則的に並んでおり、同時期に構築された可能性が高い。

第２節　遺跡の層位

新富町では宮崎層群の妻相を基盤に、台地上では、複数のテフラやローム層あるいは南九州に特徴的な黒色土層が堆積している。

近年行われた東九州自動車道建設に伴う調査で、新田原面の基本層序が各所で観察され、表１のように整理されている。

今回の調査区では、南側では№４のクロボク層まで掘削が及んでおり、喜界アカホヤを基準として遺構検出を行った。ただし、窪地などには部分的にクロボク層が認められ、縄文時代晩期の遺物を含む場合がある。また、SAK0806の埋土中から確認されたオレンジパミスは、13世紀代に降灰したと考えられている高原スコリアの可能性がある。北側では喜界アカホヤまで掘削が及んでおり、下層の黒褐色ロームから暗褐色ローム層を遺構検出面とした。また、事前の地権者との協議で、今回の土壌改良の規模が、現地表面から50cm程度であることを確認していたため、桜島薩摩層以下については本調査対象外とし、部分的な試堀のみにとどめた。



図版３　春日遺跡８次遺構配置図

表１　新富町域台地面の基本土層

No.	略　称	層　名	年　代	特　　徴
1		表土		
2	クロボク	黒色土		
3	Kr-Th	高原スコリヤ	AD1235	本地域が分布北限に近く、低湿地のクロボク中や古墳周溝埋土などに認められる
4	クロボク			
5	K－Ah	喜界アカホヤ	6.5ka	二次堆積の場合は、暗橙色の場合がある。低湿地では白い
6	MBO	黒褐色ローム		縄文時代早期中葉～末の遺物包含層
7	ML１	暗褐色ローム		上部には縄文時代早期前葉から草創期、下部に縄文時代草創期から後期旧石器時代末の遺物を含む
8		桜島薩摩	11ka	パミスは細かく、シャーベット状のブロックになっている。通常は明褐色で低湿地ではピンクがかることが多い。低湿地などの保存状態のよいところでみられる。
9		褐色ローム		
10	Kr-Kb	小林軽石を含む層	15ka	本地域では、明確な層をなしていない。小丸川以北では識別が困難になる。
				深年Ⅱ段丘堆積物
11	MB1			
12				
13	AT	姶良Ｔｎ	24.5ka	一次堆積層では最下部に大隅降下軽石（姶良大隅：A-Os）が見られる。
14	MB２	暗褐色ローム		AT直下のブラックバンドと呼ばれる部分で、固くクラックを生じることが多い。MB３では白色鉱物が少ない。中部にパミス（A-Fm，A-OT）が密な部分が見られることがある。
15	A-Fm	姶良深港	26.5ka	
16	A-OT	姶良大塚	30ka	
17	MB３	暗褐色ローム		
18	ML３	褐色ローム		
19		赤褐色ローム		
20	Kr－Aw	アワオコシ	41ka	赤褐色。スコリヤ、ラピリ。固結。イワオコシより細粒。降下スコリヤを主体とする。
21	ML４			
22	Kr－Iw	イワオコシ	50ka	赤褐色。アワオコシに比べ粗粒。黄褐色パミスを含む。降下軽石を主体とする。 雷野段丘堆積物
23		明黄褐色ローム		
24		キンキラローム		黄～淡黄色の粘り気のあるローム。高温石英を含みきらきら光る。姶良岩戸（A－Iw）の風化層
25	A－Iw	姶良岩戸	60ka	粗粒砂大～径３mmの黄色軽石層。黄色いザラメのように見える。高温石英が非常に多い。ATより粗粒
				岡冨段丘堆積物
26		阿蘇４	86-90ka	本来は阿蘇４火砕流噴出の際の灰白色ガラス質降下火山灰もしくは火砕流堆積物であるが、風化が激しい場合が多い。その場合、褐色・橙色・ピンク等に変色。褐色角閃石を特徴的に含む。

※　本表は宮崎県埋蔵文化財センター発行の「東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ」2004を参考にした。
※　略称のMLはローム層、MBは黒色土帯を意味する。
※　メッシュ部分は火山灰層であることを示している。
※　年代は奥野充・福島大輔・小林哲夫「南九州のテフロクロノジー」『人類史研究』12　2000による。未較正

第Ⅳ章　調査の記録

第１節　縄文時代早期の調査

１．検出遺構

調査区中央で２基（SIK0802　SIK0803)、南側で１基（SIK0801）の集石を検出した。また、調査区北西側では、熱を帯びて赤化した散礫が認められたが、上面が大きく掘削されていたため、集石としてのまとまりを認めることはできなかった。

①　SIK0801

調査区南側で検出された。喜界アカホヤ層を人力で剥がして検出したため、攪乱は全く受けていない。小児拳大の砂岩角礫を中心に1500個以上の礫で構成されているが、熱を受けて破砕しているものが多い。近接する礫同士の接合もなく、平面プランも不定形で掘り込みも確認されていない。廃棄箇所であった可能性が高い。

②　SIK0802

調査区中央で検出された。新しい溝によって北側の一部を掘削されている。砂岩拳大の角礫を中心に500個以上の礫で構成されている。いずれも熱を帯びて破砕しているものが多い。径１m、検出面からの深さ約30cmの掘り込みがあり、埋土中には炭化物が確認されている。

③　SIK0803

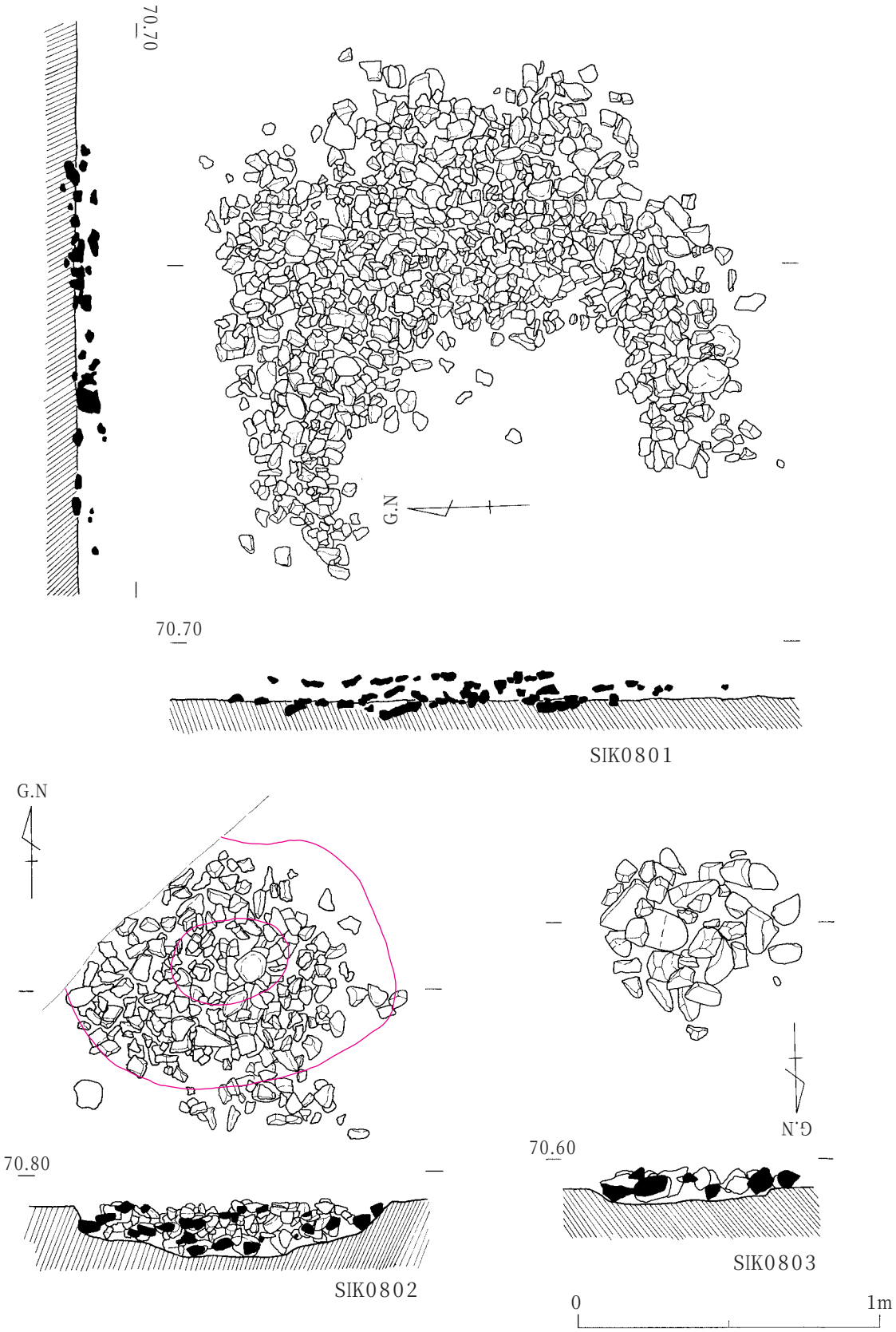
SIK0802の北側で検出された。径約60～70cmの範囲に拳大の礫が集中する。砂岩が中心だがわずかに尾鈴酸性岩製の円礫も含めれている。いずれも熱を受けて赤化し破砕しているものが多い。上面が大きく掘削されているために、掘り込みがあったかどうか判然としない。

２．出土遺物

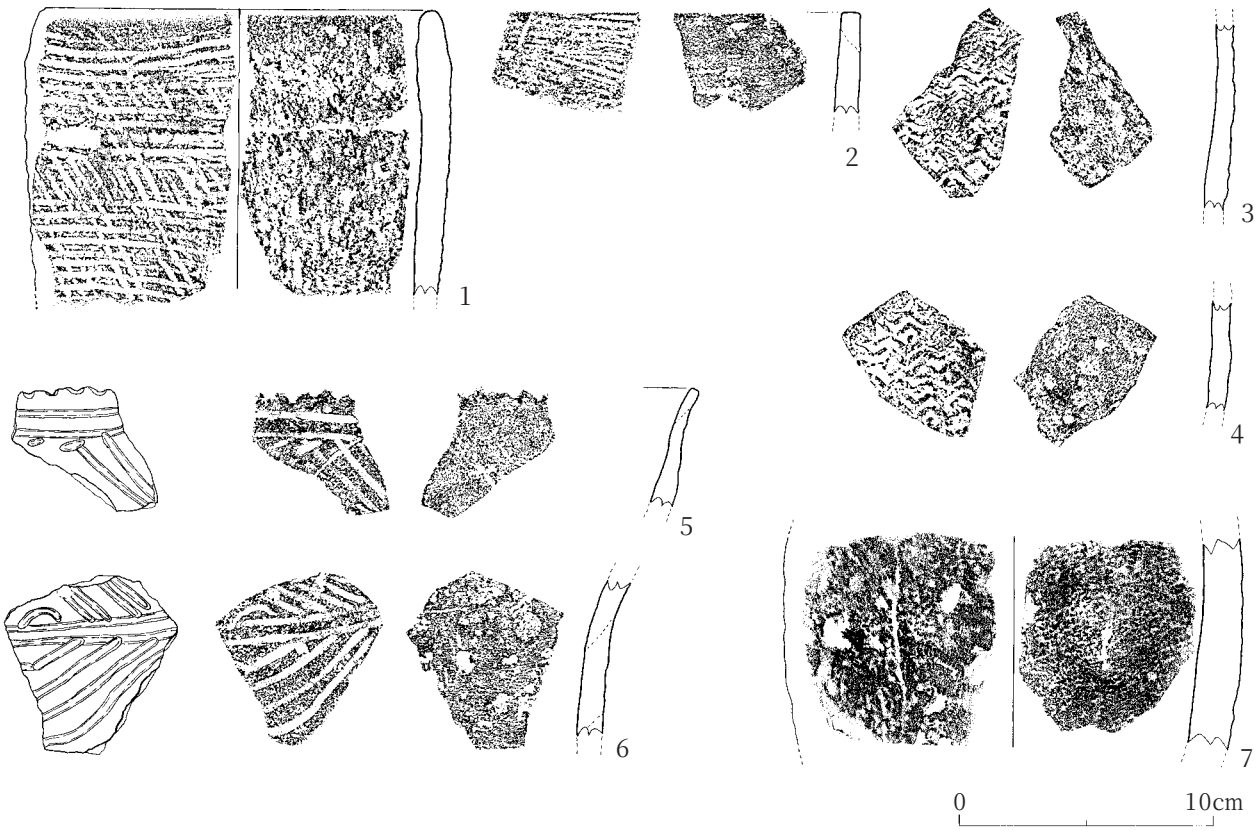
礫の多さに比べて、集石に帰属する遺物は少ない。いずれも調査区北西側の散礫に混じって出土した。

１は直立する円筒系の土器で、推定口径約16cmを測る。外面は斜位の条痕ののちに横位の条痕を施す。内面はナデ調整。２も直立する円筒系土器の口縁部で、口縁端部を平坦におさめる。外面には斜位および横位の細かい条痕を施し、内面は丁寧なナデを施す。３と４は山形押型文土器の胴部片。内外面とも摩滅が激しい。内面はナデか。７は無文土器の胴部片。器壁が厚くわずかにふくらみをもつ。摩滅が激しいが内外面ともナデ調整だろう。５と６はともに、へら状の工具による斜位および横位の凹線をもつもので同一個体の可能性がある。５は口縁部で、外反しながら立ち上がり、先端は鋸歯縁状を呈す。凹線はまず横方向に施したのち、斜めの凹線を施す。内面は丁寧なナデ調整。６は胴部片でわずかだが外反する屈曲が認められる。５と同じく横方向の凹線のち、斜めの凹線が施され、内面は丁寧なナデ調整。

石類は、チャートや黒曜石のチップ、フレークが少量出土しているのみで、石器とよべるものは出土しなかった。



図版４　縄文時代早期の集石遺構



図版５　縄文時代早期の遺物

第２節　縄文時代晩期の調査

１．調査の概要

縄文時代晩期の遺構・遺物は、地山の残存状態が比較的良好な調査区中央から南寄りで多く出土した。遺構は土坑２基（SCK0801　SCK0802）を検出し、SCK0801からは土器片とともに、粘土塊が出土した。また、調査区南西側では廃棄場としての使用が考えられる土器溜りを検出した。

２．出土土器の分類

各遺構や包含層から遺物を検出している。これらは縄文時代晩期後半に比定されるものである。

出土遺物の分類については以下のとおりとする。本来は器形を基本に分類すべきであるが、今回の調査において口縁部から底部まで復元できる個体がなかったことから、部位ごとに特徴のあるものを基準に分類を行った。

【Ⅰ類：口縁部】

ａ：刻目突帯を施すもの。

ｂ：無刻目突帯を施すもの。

ｃ：口縁端部に薄い粘土紐を張りつけて肥厚させるもの。

ｄ：突帯をもたないもの。

ｅ：強く屈曲する頸部をもつ小型精製浅鉢になるもの。

【Ⅱ類：胴部】

ａ：刻目突帯を施すもの。
ｂ：無刻目突帯を施すもの。
ｃ：突帯をもたないもの。
【Ⅲ類：底部】
ａ：張り出し気味になるもの。
ｂ：張り出し気味にならないもの。

３．遺構と遺物

①　SCK0801

調査区南東側で検出された。検出面は喜界アカホヤ面で、上面は既に削平を受けている。平面は径約80cmの円形プランを呈し、深さ約15～20cmを測る。土坑内から多数の土器片とともに粘土塊が出土した。粘土塊は熱を受けて一部赤化し、指の跡や竹篭らしき圧痕が残るものもあった。

出土土器はすべて甕型土器で、少なくとも４個体確認されている。口縁部から底部まで復元できる個体はなかった。８～11は口縁部片である。いずれもａ類に該当し、外反もしくは外傾しながら立ち上がる。内外面とも条痕のちナデを施すが、９や10のように内面を中心に条痕が残るものがある。12は胴部片で、底部に近い部位である。摩滅激しいが、内面は条痕のちナデで、条痕の痕跡が残る。13と14はⅢａ類の平底の底部で、13は若干上げ底となる。調整は摩滅により不明瞭だが、14は内面に条痕を残す。

②　SCK0802

調査区の南東側で検出され、肩部の一部を新しい掘り込みによって掘削されている。平面形は長軸1.6m、短軸0.85mの長楕円形プランを呈し、検出面からの深さ1.45mを測る。喜界アカホヤ層を掘り込んでいることや、周辺の状況から縄文時代後期以降に構築された可能性が高い。同様の形態のものが春日遺跡２次調査でも検出されている。SCK0802から西に約15mの位置にあり、関連性が指摘できよう。逆茂木痕は確認できないが、落とし穴の可能性が高い。

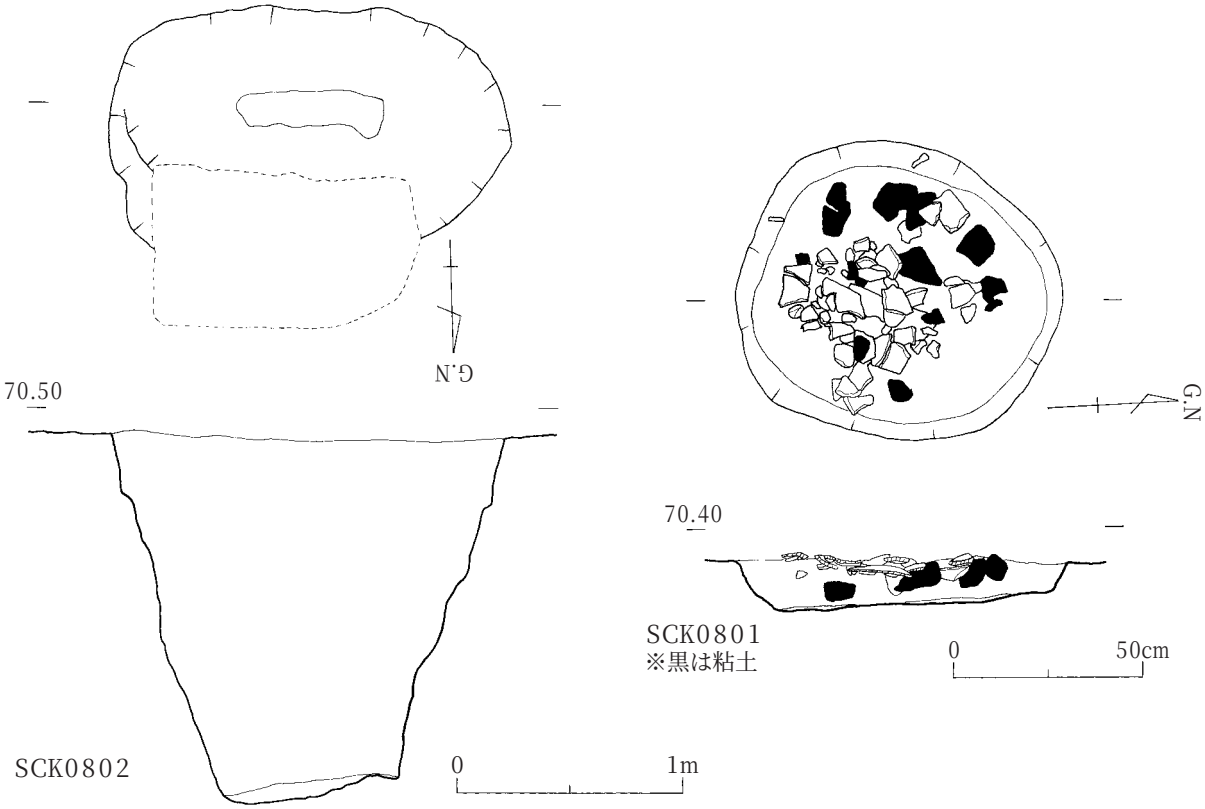
③　土器溜り

調査区南西側では、土器溜りを検出した。長径約10m、短径約3.6mの長楕円形の範囲内に遺物が集中する。平成15年度の概要報告書では、住居址の可能性を指摘しSAK0808として取り扱ったが、平面プランや床面、壁面の立ち上がりが判然としないことから、窪地を利用した廃棄場であった可能性が高い。

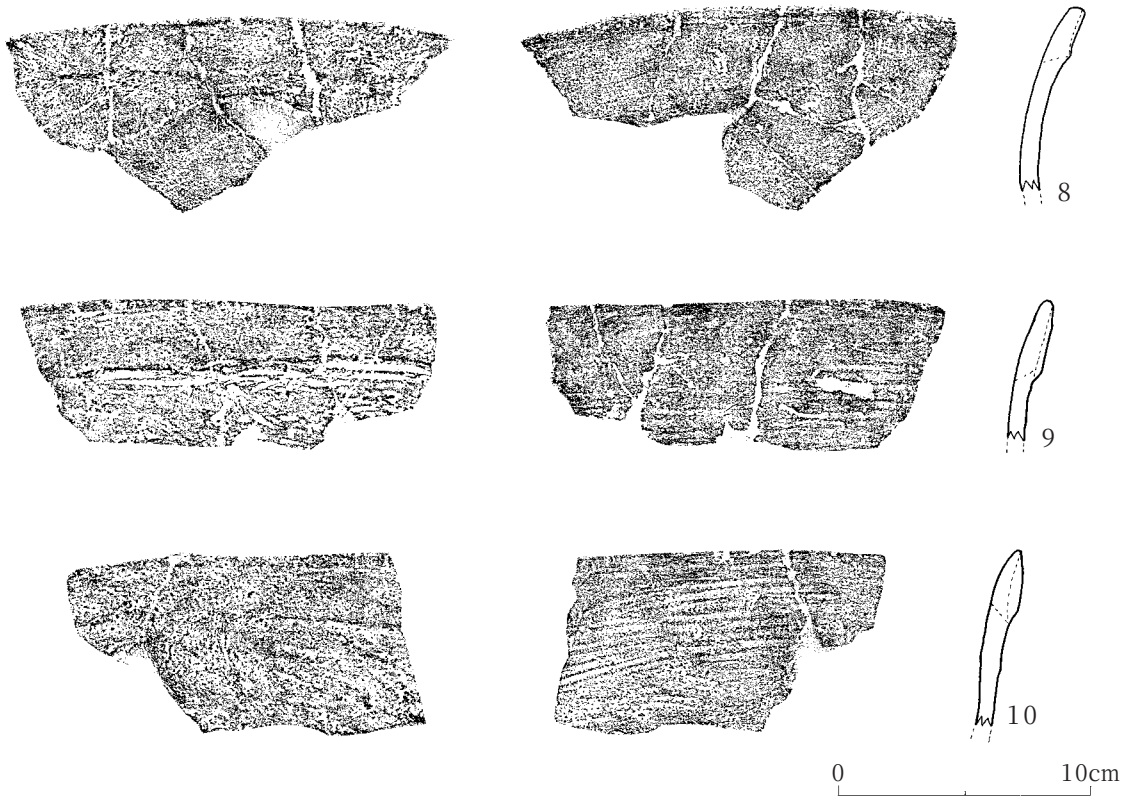
出土遺物については数量が多いため、先の分類に従い部位ごとに説明する。

【口縁部】
ａ類（15～28・30・35・37）

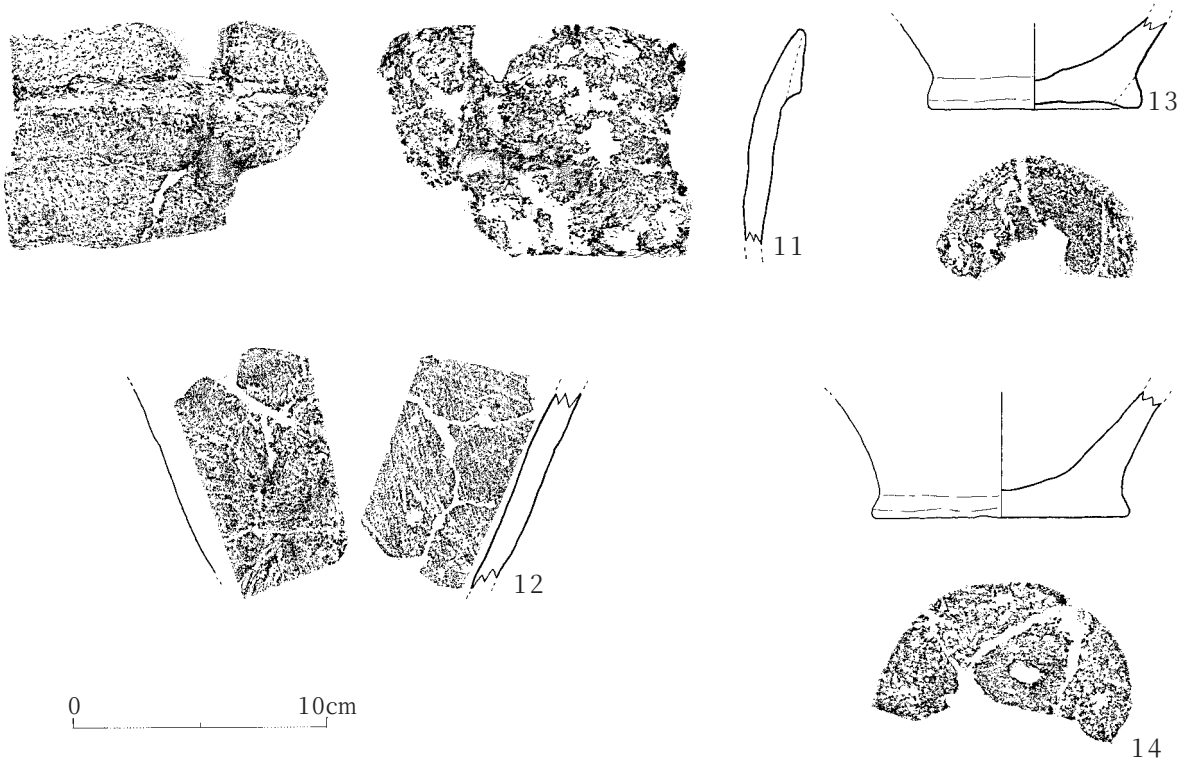
刻目突帯文土器と呼ばれる一群である。15は口縁部がほぼ直立しながら立ち上がり、口縁端部と胴部屈曲部の２ヵ所に刻目突帯が施される。16や24も胴部屈曲部に突帯が施されている。口縁部を欠いた胴部片にも突帯を施すものがあることから、多くは突帯を２条巡らす甕形土器になる可能性が高い。口縁部の突帯は、口縁端部よりの若干下に貼り付ける場合が多いが、16や27、30では口縁端部に接する位置に貼り付けている。刻目は指先および爪先でつけており工具の使用は確認できない。17と18は口縁部に



図版６　SCK0801（右１／20）とSCK0802（左１／30）



図版７　SCK0801出土遺物①



図版８　SCK0801出土遺物②

リボン状の突起をもっている。35と37は突帯下に斜位の平行沈線が施される。孔列をもつものも多く、大半は外側から未貫通の孔を施すが、18は焼成前に意図的に貫通孔を施した可能性が高い。28も貫通孔ではあるが、これは焼成後に貫通したと思われる。ナデ調整が主体であるが、内面を中心に条痕が残るものもある。

ｄ類（29・31・32）

いずれもわずかに外傾しながら立ち上がる鉢形土器になると思われる。32は口縁端部がわずかに肥厚するが、粘土紐を貼り付けたものではないためここに含めた。横および斜め方向のナデが主体で、31の内面には板状の工具ナデが施される。

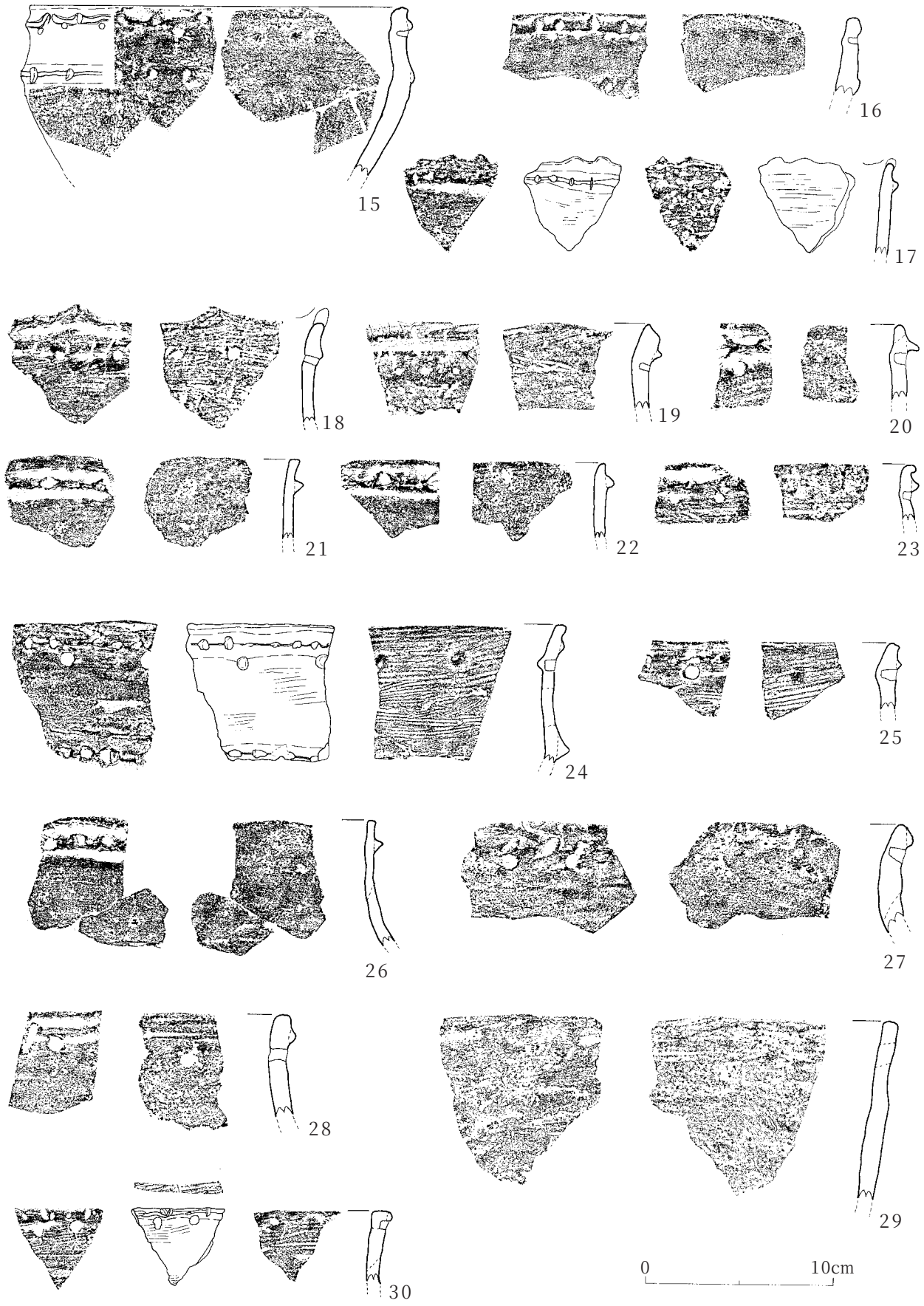
ｅ類（33・34）

33は器壁が薄くかなりの小型品だろう。口縁部は内湾しながら外開きに立ち上がり。胴部は屈曲する。内外面ともミガキを施す。34は頸部が強く屈曲し、大きく外反しながら口縁部が立ち上がる。内外面ともミガキを施す。

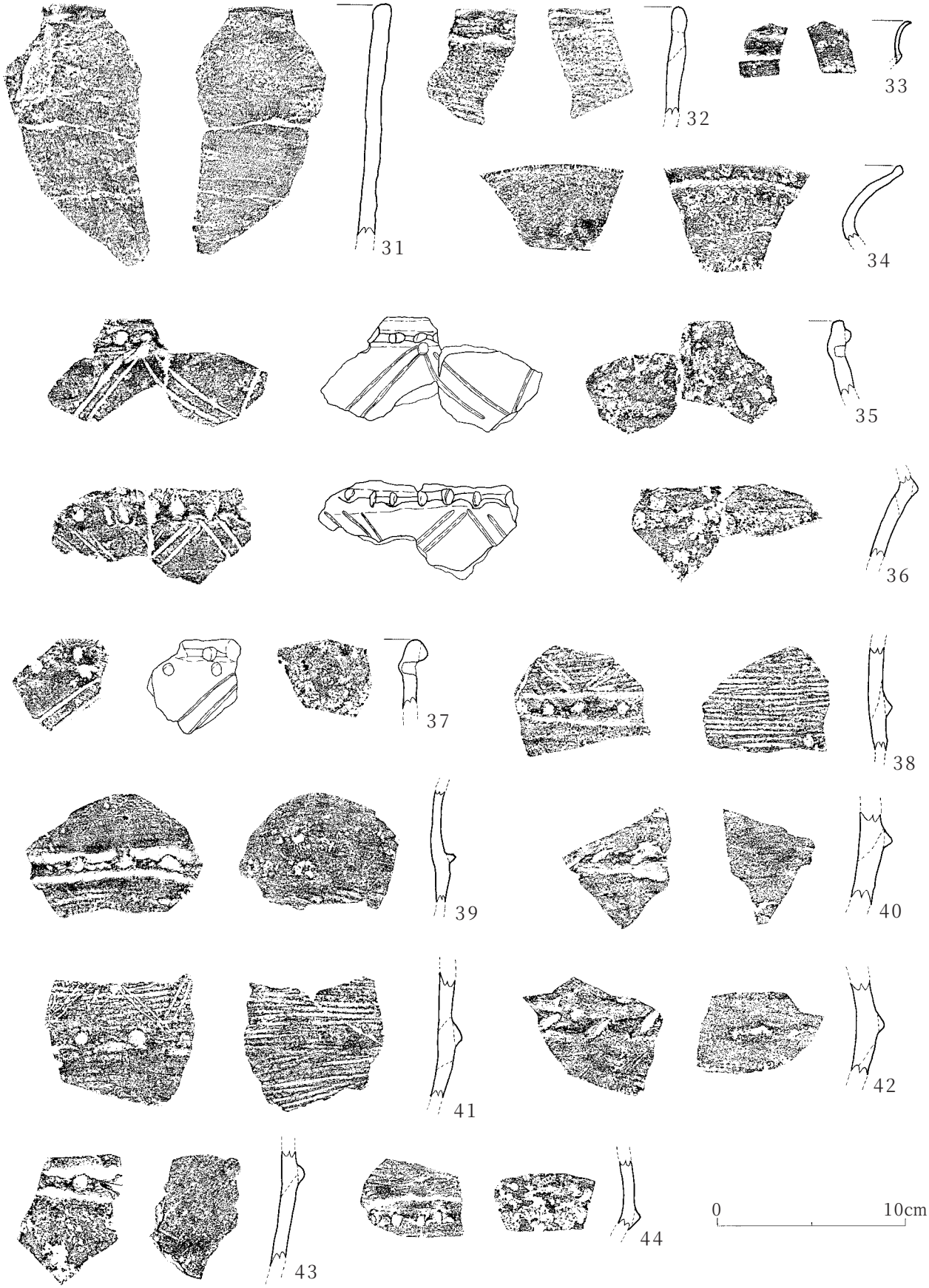
【胴部】

ａ類（36・38～45）

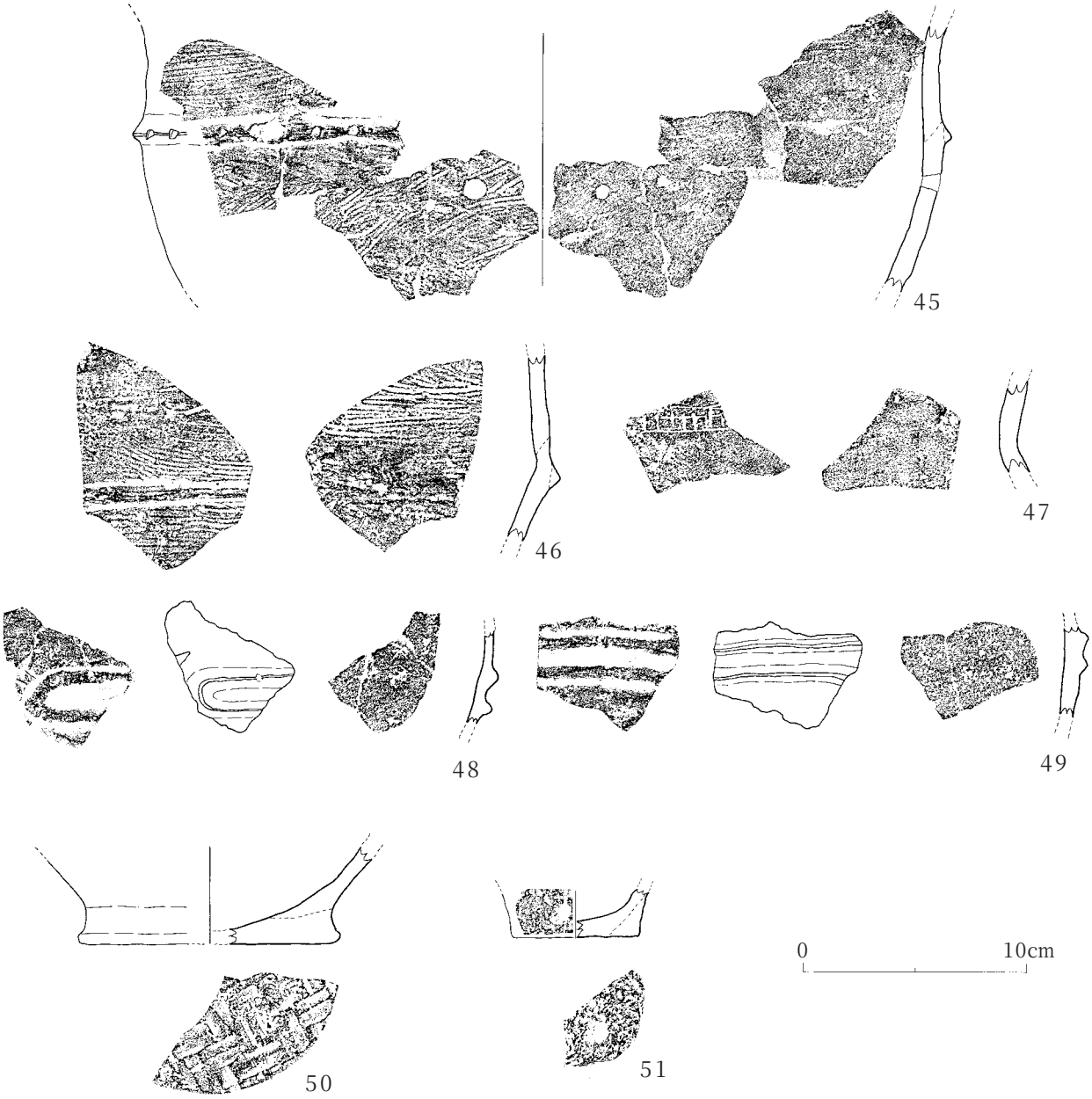
36は斜位の沈線を２本つづ平行に施される。35や37と同一個体の可能性が高い。外面は丁寧なナデが施される。38と41は同一個体と考えられる。斜位の線刻が施される。45は推定胴部径36cmを測る鉢形土器で、突帯下に補修孔がある。突帯の刻目は口縁部と同様、指先や爪先によって施されている。ナデが主体だが38や41、45は条痕をそのまま残す。



図版９　縄文時代晩期土器溜り出土遺物①



図版10　縄文時代晩期土器溜り出土遺物②



図版11　縄文時代晩期土器溜り出土遺物③

ｂ類（46・48・49）

46は胴部屈曲部に断面三角形の突帯を巡らす。内外面とも条痕がそのまま残る。48は断面三角形の突帯が途中で反転し、そのまま２段目の突帯となる。49は48と同一個体だろう。内外面とも丁寧なナデを施す。

ｃ類（47）

47は屈曲部の直上に横および縦の線刻を施す。線刻には爪先を使用した可能性が高い。内外面ともナデ調整。

【底部】（ａ類50　ｂ類51）

50は大型の甕形土器の底部である。底面には網代痕が残っている。外面は指頭によるナデ。内面は摩

滅している。51は小型品で、摩滅により調整不明瞭だが、内外面ともミガキの痕跡がある。

④　包含層出土土器

調査区南側では、喜界アカホヤ層上面のクロボクが一部残存しており、縄文時代晩期の遺物を含んでいる。ここでも先の分類に従い、部位ごとに報告する。

【口縁部】

ａ類（56・58）

56は口縁端部に突帯を巡らせ、直下に孔列を施す。58は口縁端部から下がったところに突帯を巡らせ、突帯下に孔列を施す。ともに内外面ともナデ調整。

ｂ類（53～55・57・60）

53は口縁端部に接する位置に断面三角の突帯を貼り付ける。胴部には突帯を巡らさず、砲弾型の器形を呈す。内外面ともへら状工具と指頭によるナデを併用している。54は口縁部から下がったところと、胴部の屈曲部に突帯を巡らせ、孔列を伴う。外面はやや粗いミガキ、内面は摩滅により不明瞭。55は54と同様の器形と考えられる。口縁部から下がったところに突帯を巡らせ、その下に孔列を施す。内外面とも条痕が残る。57は口縁部から下がったところに低い突帯を巡らせ、その下に孔列を施す。内外面とも板状工具による条痕が残る。60は、口縁部の若干下に無刻目の突帯と孔列を、胴部屈曲部には刻目突帯を施す。器形は浅鉢で、内外面ともナデ調整。

ｃ類（62・63）

62は明確な肥厚ではないが、断面観察で薄い粘土紐の貼り付けが確認できたのでここに含めた。貼り付けた粘土紐の下に孔列を施す。内外面とも粗い条痕が残る。63は口縁部に粘土紐を貼り付け肥厚させる。内外面ともナデ調整。

ｄ類（52）

52は短く外反する口縁部をもち、頸部は強く屈曲する。肩部は張ってそのまますぼみながら底部にいたる。内外面ともミガキを施す精製土器である。

ｅ類（59）

薄い器壁で、口縁部の内側が若干肥厚する。内外面ともミガキを施す。

【胴部】

ａ類（61）

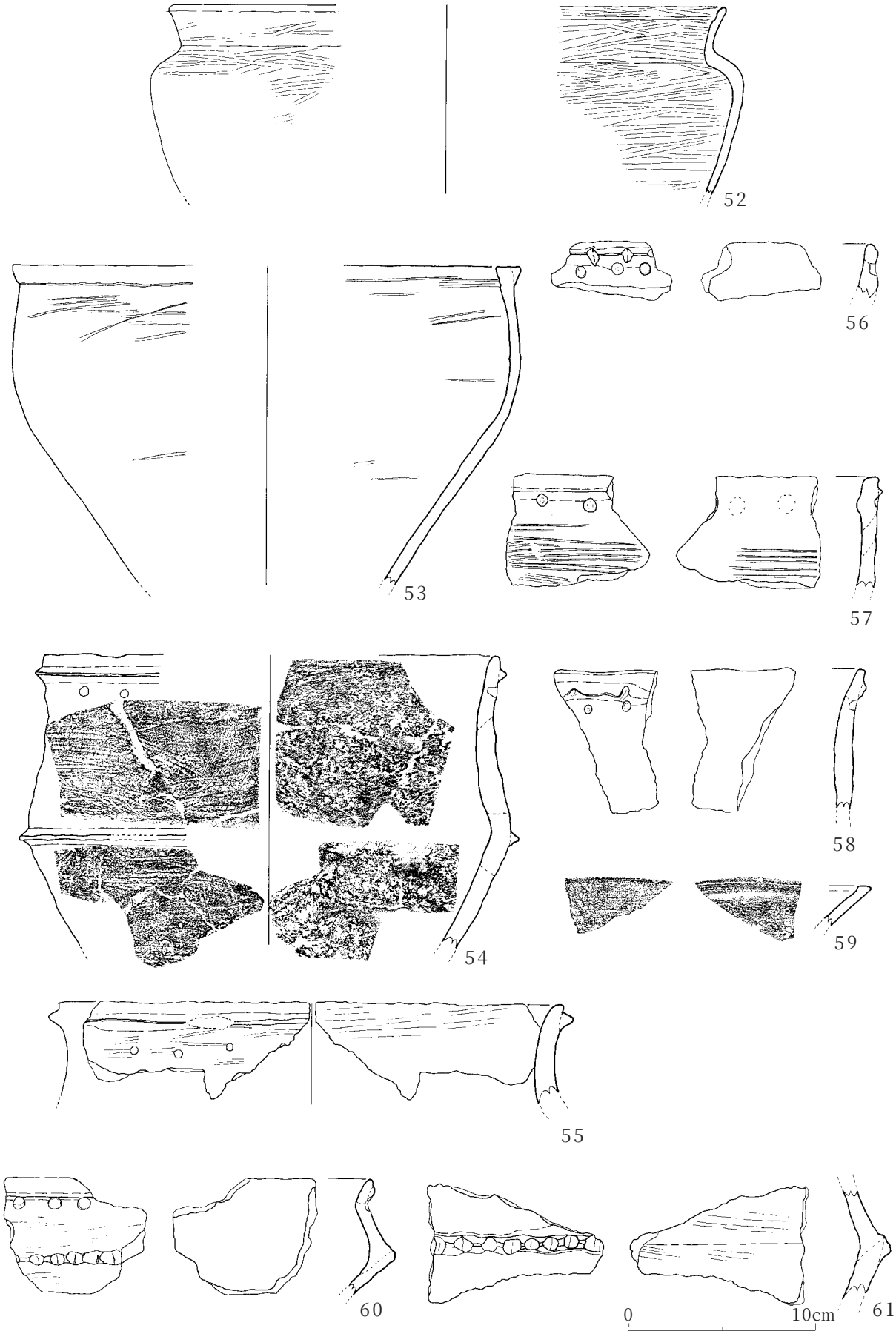
61は胴部屈曲部に突帯を巡らす。内外面ともナデだが、内面はわずかに条痕が残る。

ｃ類（64～67）

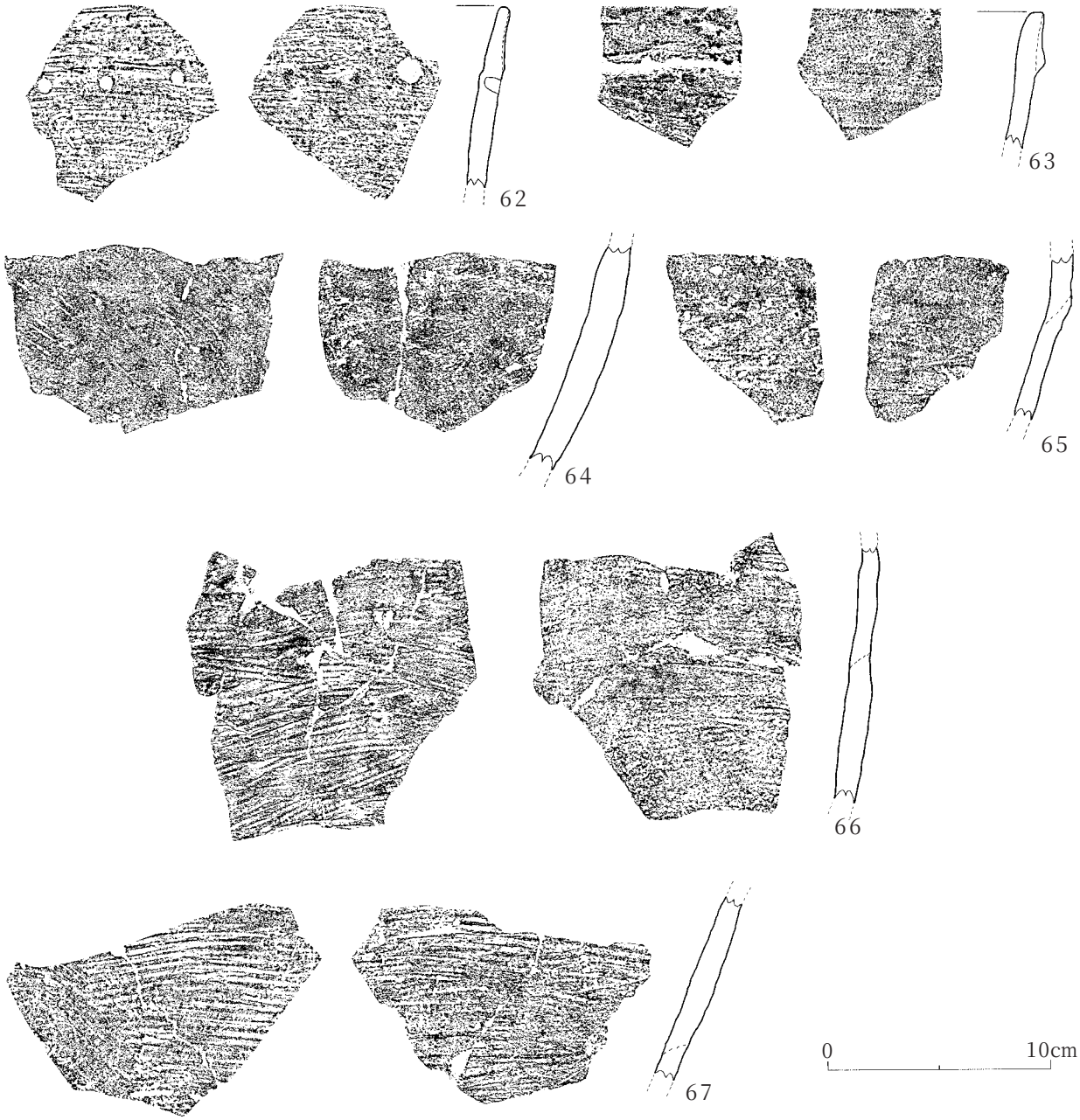
64は底部近くの破片で、器壁が厚い。外面は粗いミガキで、内面はナデ調整。65はわずかに屈曲が認められる。外面は条痕のちナデ、内面はナデ調整。66と67は粗い条痕がそのまま残る。

⑤　出土石器

石器は包含層や土器溜り、住居址の埋土から出土しているが、土器に比べると少ない。早期ではなくすべて晩期に該当すると思われる。



図版12　縄文時代晩期包含層出土遺物①

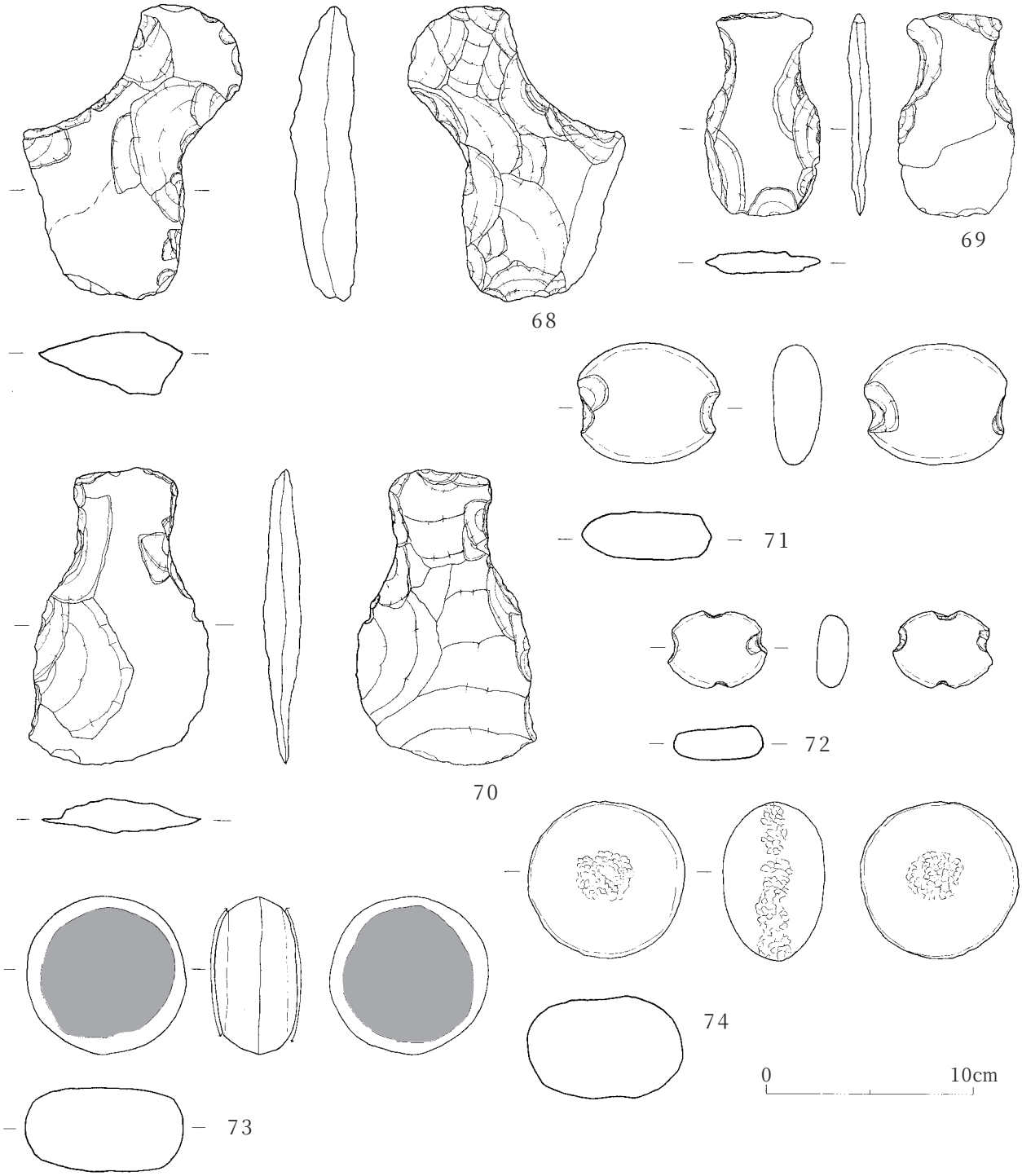


図版13　縄文時代晩期包含層出土土器②

68～70は打製石斧である。いずれもホルンフェルスを素材とした扁平なもので、土掘り具と考えられるものである。頸部には、柄を緊縛するための抉りが施される。68はやや厚みがあり、抉りのある頸部から屈曲して刃部へと至る。69や70とは使用方法が異なる可能性がある。

71と72は砂岩を素材とした石錘である。71は長軸側の両側を加工し抉りを施している。72は小型品で、長軸と短軸の両側に抉りを施している。

73は尾鈴酸性岩性製の磨石で、平坦面の両面に磨面をもつ。74は砂岩製の敲石で、平坦面の中央付近と縁辺部に敲打痕が認められる。



図版14　縄文時代晩期出土石器

第３節　古墳時代の調査

１．調査の概要

調査区の東側半分から竪穴住居址７を検出できた。SAK0803、SAK0804、SAK0807がそれぞれ切り合っている状態で検出できた。

２．遺構と遺物

①　SAK0801

長辺約6.8m、短辺約5.8mの長方形プランを呈する。新しい掘り込みによって一部掘削されていた。床面積は約39㎡で、今回のなかでは最大規模を測る。検出面からの深さ約36cmで、軟質な貼り床が施されている。壁帯溝は確認できていない。SHK0807に伴うピットが絡んでいたが、４本の主柱穴が確認できた。埋土および床面から炭化材が多量に確認でき、焼失住居であった可能性が高い。

出土遺物は北側隅角付近に集中していた。土師器が中心で、須恵器や熱を帯びた石も出土している。

75と76は中型の長胴甕である。75は丸底の底部をもち、最大径が胴部のほぼ中心にある。口縁部付け根付近の稜は内外面ともやや薄くなり、直線的に開く。口縁部の外面にはヨコナデが、胴部には斜めのナデが施される。76は口縁部から胴部下半部片で、肩部がやや張る。口縁部付け根付近の稜はやや不鮮明となり、口縁端部が内湾しながら立ち上がる。器壁は全体的に厚い。内外面ともヨコないし斜めのナデが施されるが、外面には幅１cm程度のヘラ状工具によるナデが施される。79は中型の球胴甕で胴部最大径が口縁部径を上回る。口縁部付け根付近の稜はやや不鮮明で、口縁部の開きが弱くなる。内外面とも板ナデを施し一部にその単位が残る。78から81は杯である。78と80は内湾口縁をもち、80はとくに顕著である。79と81は直立口縁をもつ。78は摩滅のため調整不明瞭。79はヘラミガキか。80と81は内外とも丁寧なナデを施す。82は脚台をもつ杯で、脚台部分は欠損している。内外面ともヨコナデを施す。83と85は鉢で、83は内湾口縁をもつ。わずかに平底を呈す。内外面ともヘラミガキで、内面には一部ナデ。85は平底の底部に木の葉痕が残る。摩滅により調整不明瞭。86は中型の甕ないし壷の底部で平底を呈し、木の葉痕が残る。内外面ともナデ。84は須恵器の器台で、床面からかなり浮いた位置からの出土である。低い断面M字形のタガを施し、タガの間には櫛描波状文と台形の透かし孔を設ける。

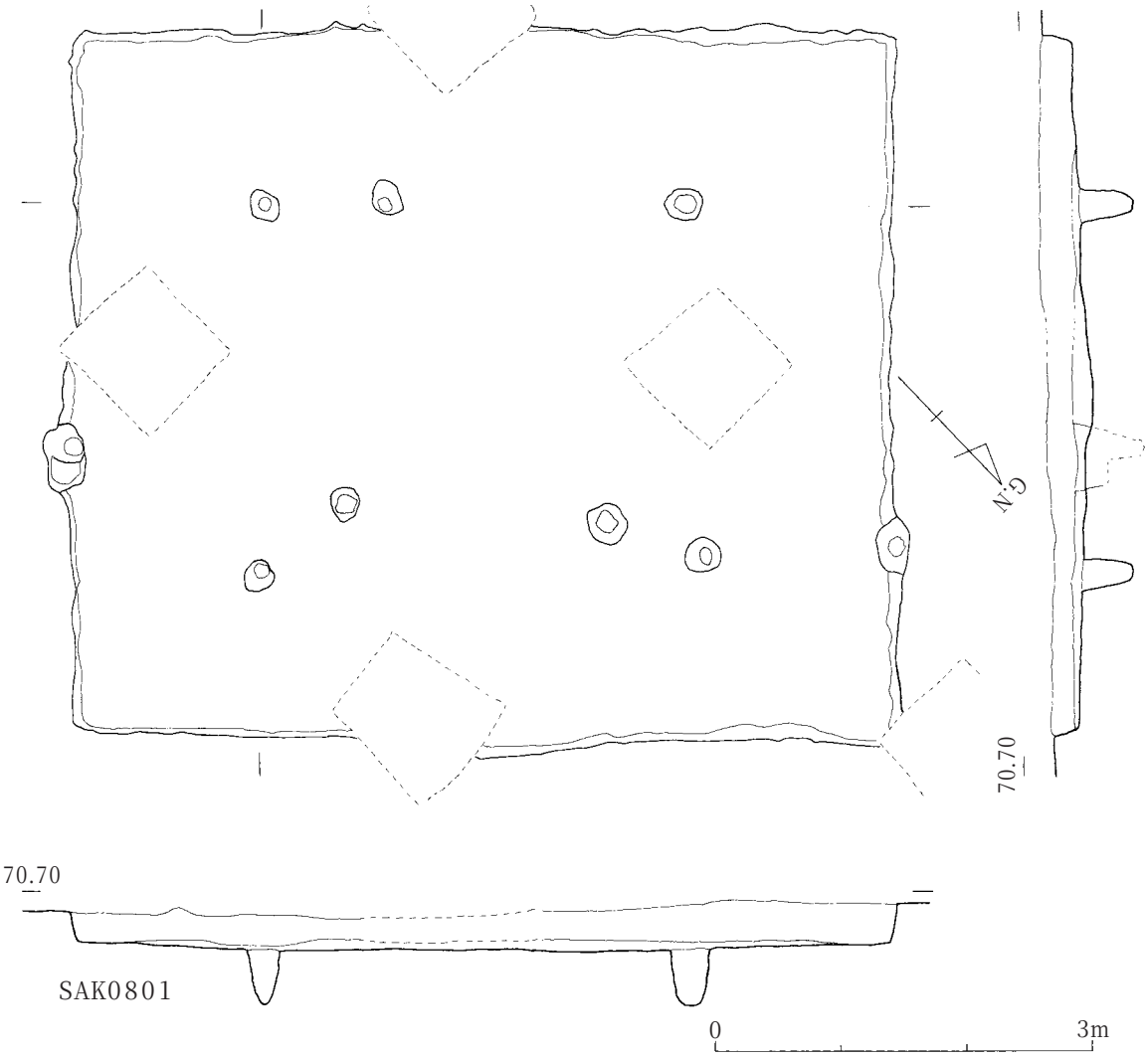
②　SAK0802

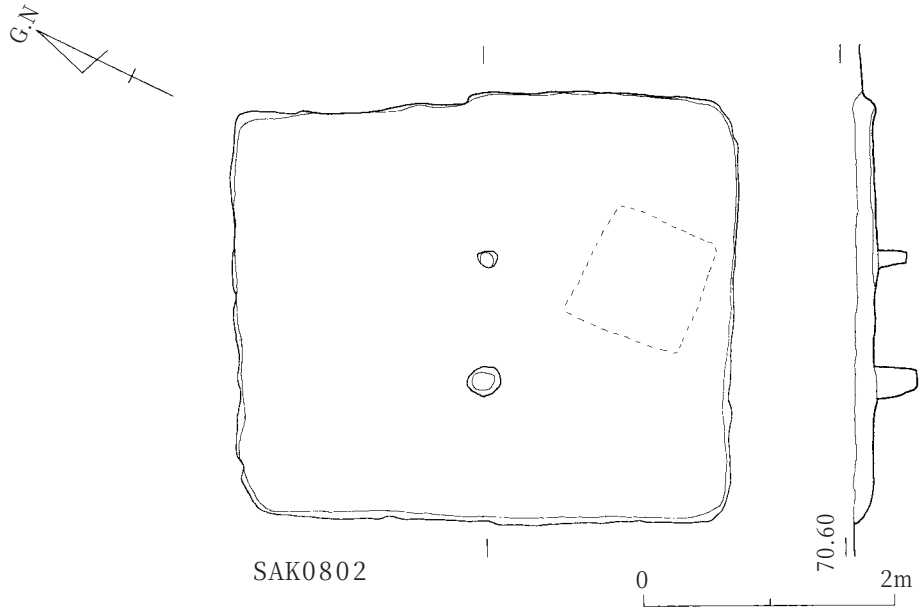
SAK0801の南東側で検出された。長辺約3.9m、短辺約3.4mの方形に近いプランを呈する。検出面からの深さ約15cmで、主柱穴は２本である。軟質な貼り床が施されていた。壁帯溝は確認されていない。

出土遺物は少なく土師器甕１を住居址のほぼ中央で検出したが埋甕ではない。87は長胴甕で底部はわずかに平底を残す。口縁部付け根の稜は明瞭で、ほぼ直線的に開く。外面はほぼ全面にタタキが施される。内面はやや不鮮明だがナデだろう。

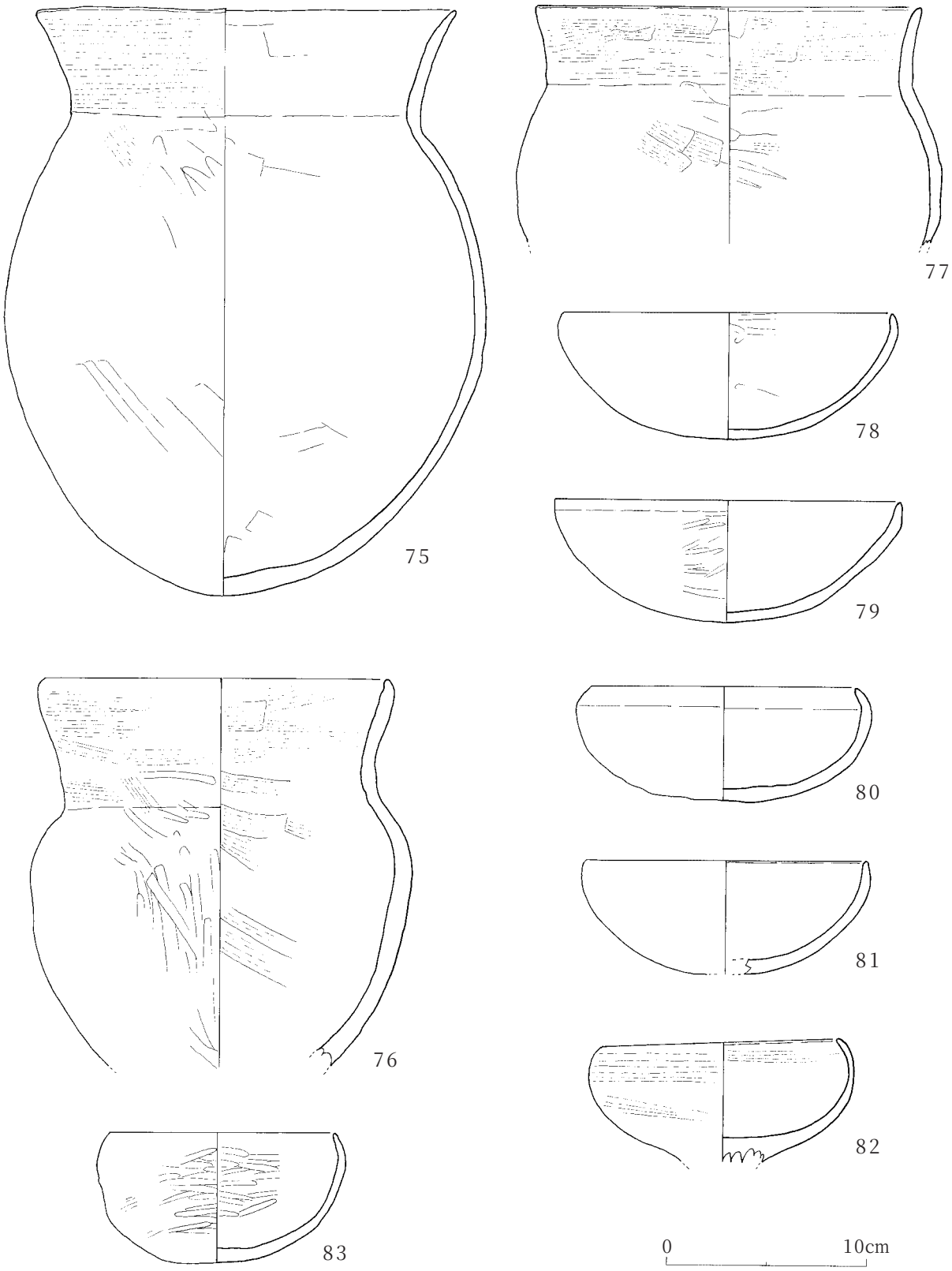
③　SAK0803

SAK0807によって北側を掘削されているが、長辺3.7m、短辺3.2mと推測される。検出面からの深さ約18cm。この住居に伴う主柱穴は確認できなかった。全体的に軟質な貼り床が施され、中央には焼土塊を確認した。

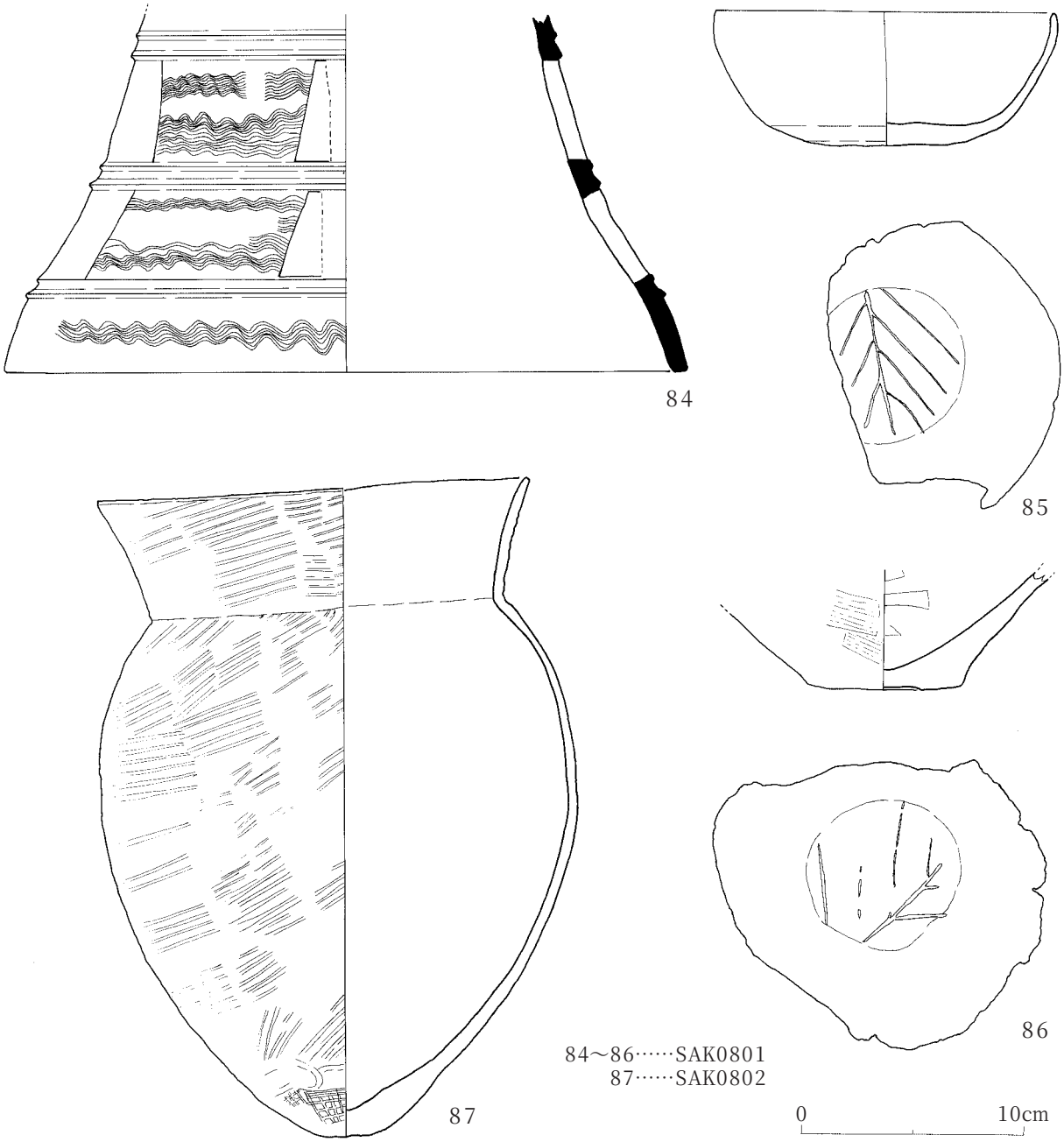




図版15　SAK0801・SAK0802



図版16　SAK0801出土遺物



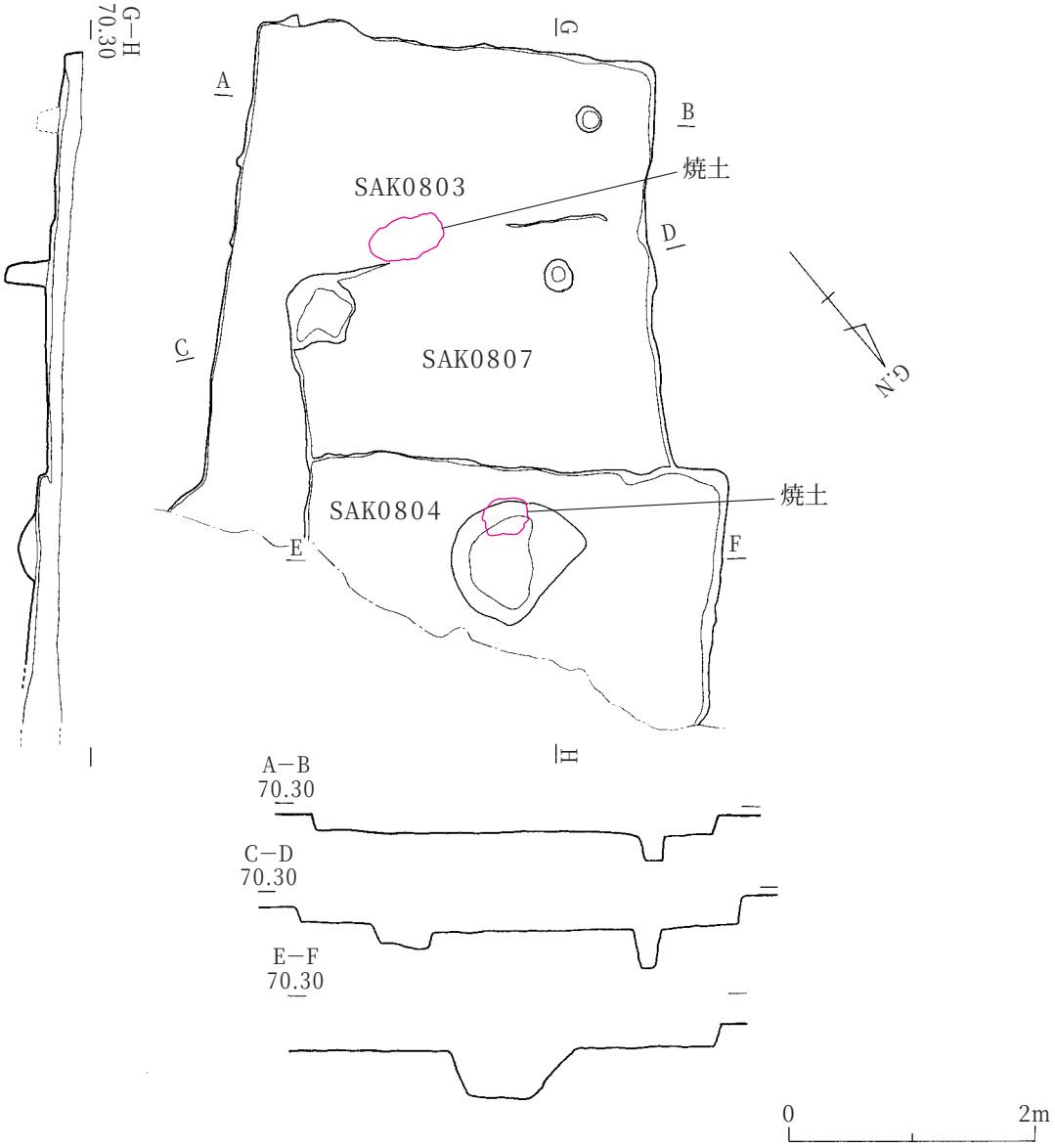
図版17　SAK0801①・SAK0802出土遺物

土師器や須恵器が出土している。88は大型の長胴壷で丸底を呈す。胴部中央に最大径が存在する。口縁部付け根の稜は内外面とも明瞭で、短く外開きになりながら直線的に立ち上がる。89は中型の球胴甕で丸底を呈す。口縁部付け根の稜はやや不明瞭で、口縁部は短くほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともナデ。90は中型の長胴甕で、口縁部が長く、直線的に立ち上がりながら端部はやや外反する。口縁部付け根の稜はやや不明瞭。内外面ともナデ。91は鉢の胴部から底部片で、安定した平底を呈し、胴部は下半分がやや外反しながら立ち上がり、その後直線的に立ち上がる。92は椀で平底を呈し、木の葉痕が残る。内外面ともナデ。93は須恵器の杯身で、底部から１／２の範囲で回転ヘラケズリを施す。口縁部はやや内傾しながら立ち上がり口縁端部は鋭くおさめる。

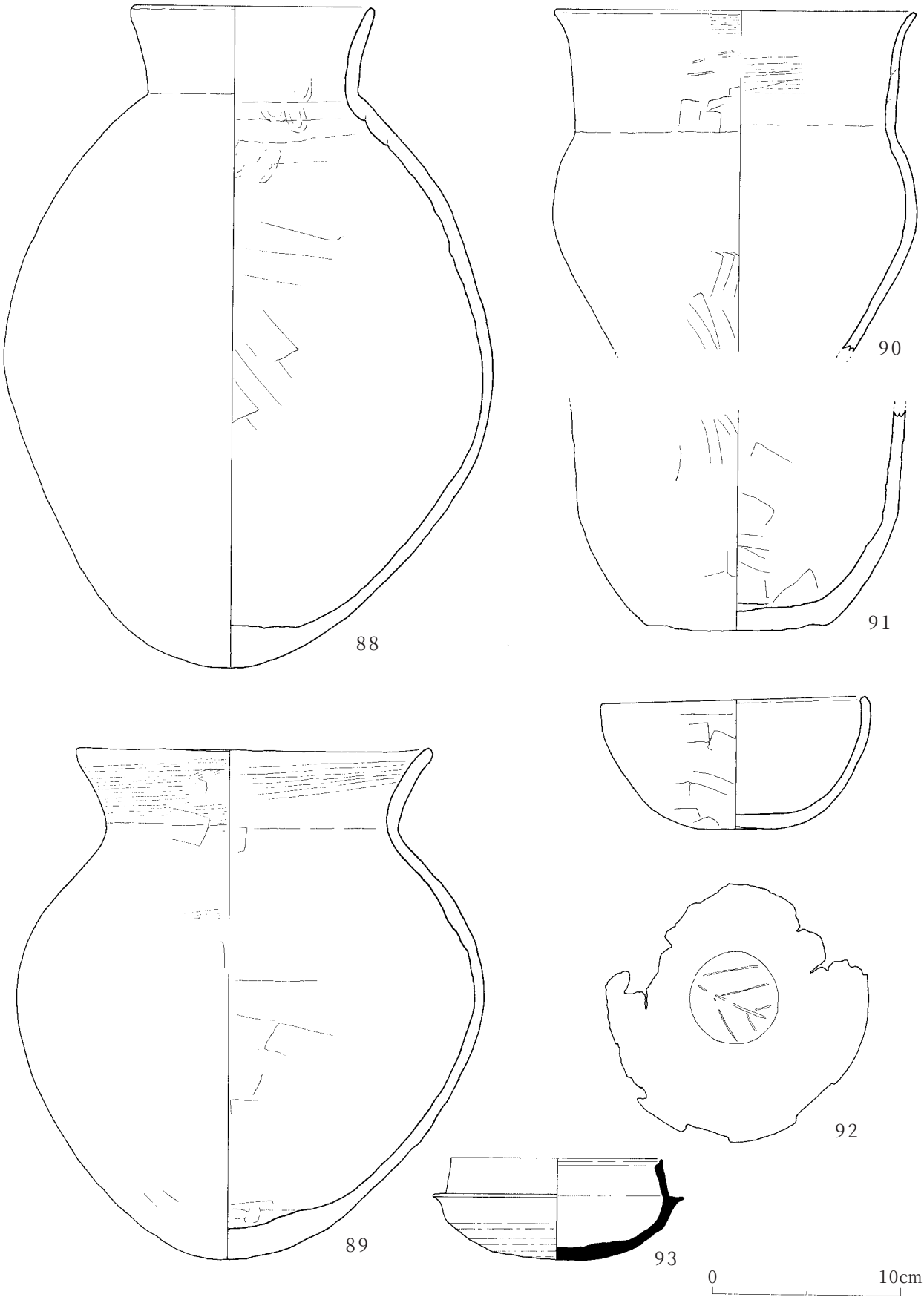
④　SAK0804

調査区の制約により検出できたのは全体の50%程度である。１辺約3.4m程度になると推測される。主柱穴は確認できなかったが、埋土に焼土を含んだ土坑を検出した。土坑は長軸約１m、短軸約0.85mの不定形プランで、床面からの深さ約50cmである。埋土の上面を中心に焼土が混じっている。

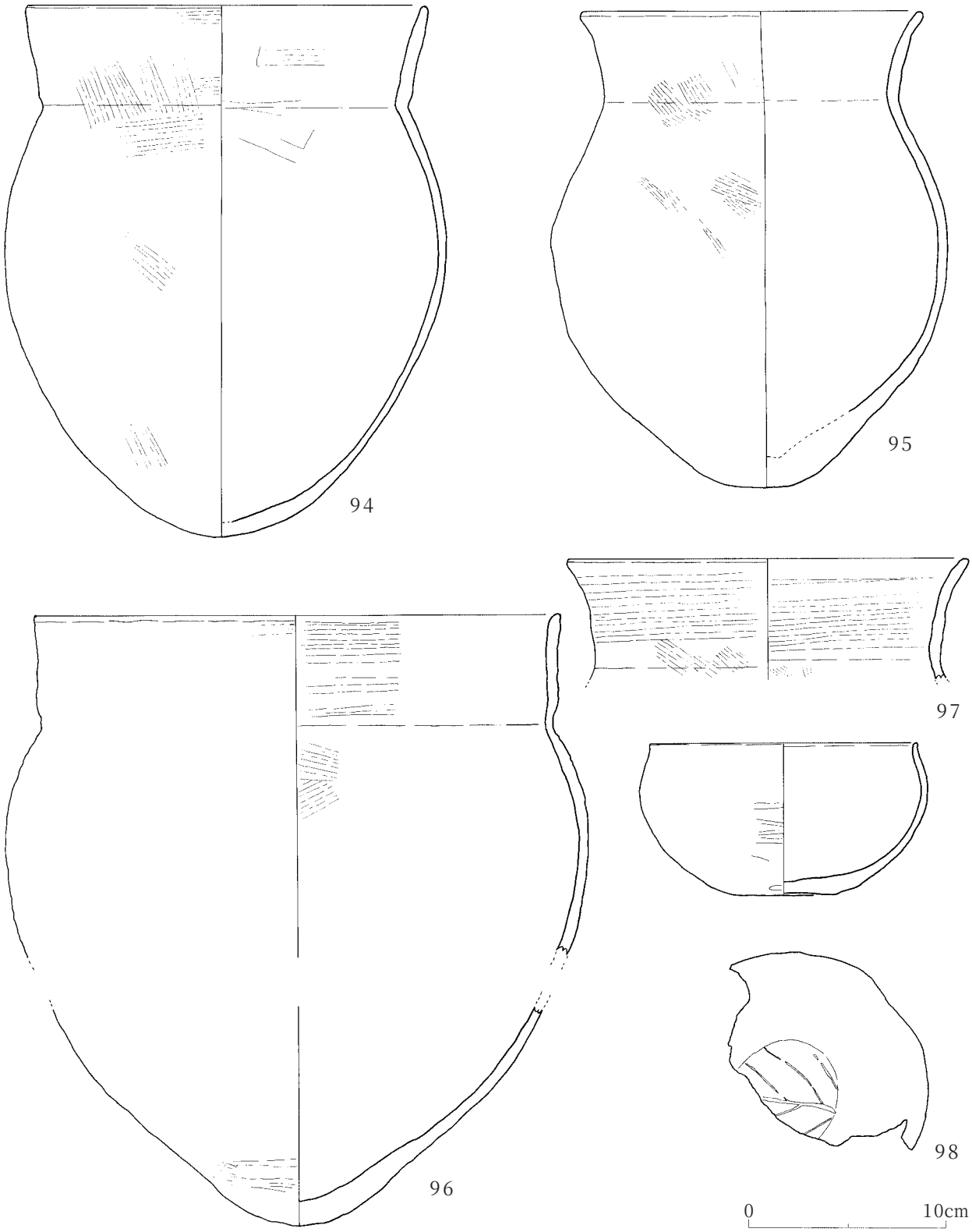
土師器が出土している。94と95は中型の長胴甕である。94は丸底を呈し、口縁部付け根の稜が明瞭で、そのまま直線的に開く。95はわずかに平底が残り、口縁部付け根の稜はやや不明瞭。口縁部はやや外反しながら立ち上がる。ともに内外面ともナデ調整。96は球胴甕。丸底を呈し、口縁部付け根の稜はやや不明瞭。口縁部は直線的に立ち上がる。内外面ともナデ。97は甕の口縁部で、外反しながら立ち上がる。98は椀で、平底を呈し、木の葉痕が残る。摩滅が激しい。99は布留系の中型高坏である。杯部と受部と



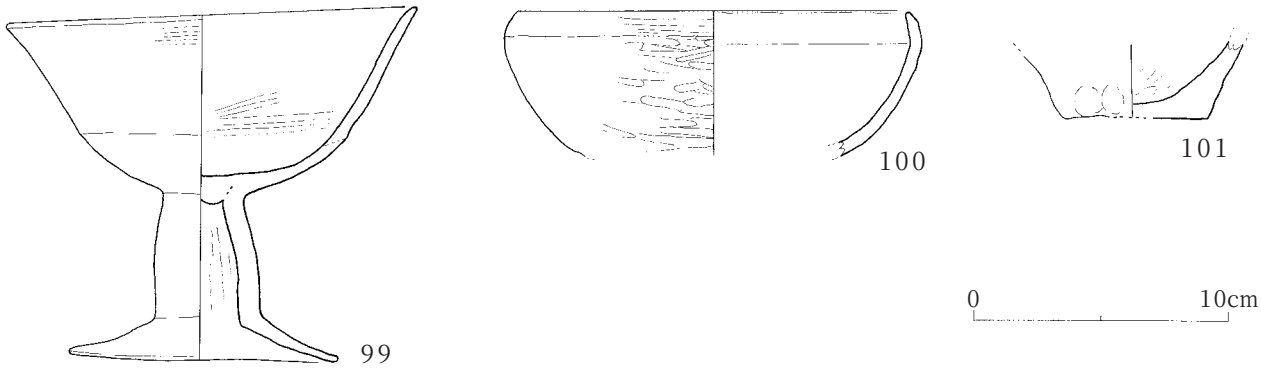
図版18　SAK0803・SAK0804・SAK0807（1／60）



図版19　SAK0803出土遺物



図版20　SAK0804出土遺物①



図版21　SAK0804出土遺物②

の段が内外面とも不明瞭となる。摩滅激しいがナデだろう。100は杯で底部を欠いている。口縁部は内湾する。外面はミガキ、内面はナデ。101は中型の甕ないし壷の底部で、安定した平底を呈す。内外面ともナデ、一部に指オサエ。

⑤　SAK0805

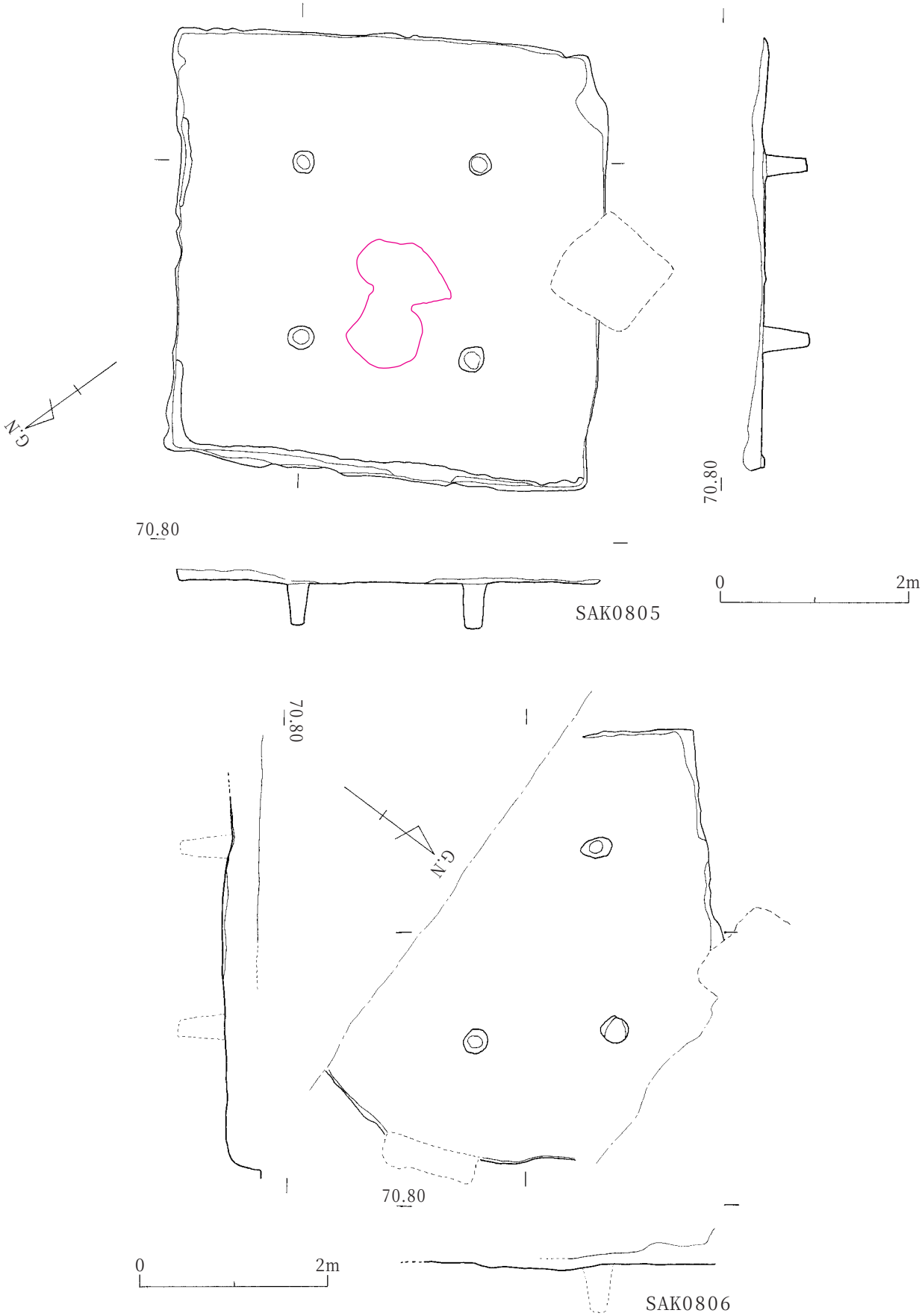
１辺約4.5mの方形プランを呈する。上面が大きく掘削されており、検出面からの深さは最深部で15cm程度を測るにすぎない。主柱穴は４本で、中央部から焼土堆積箇所を、北西側隅角では粘土の集積箇所を検出しているが、粘土には熱を帯びた痕跡は認められない。また、北西側の一部と南西側では壁帯溝を確認した。

102は甕の口縁部で、口縁部付け根の稜はやや不明瞭。ほぼ直線状に立ち上がる。内外面ともナデ調整。103は中型の長胴壷。底部はわずかに平底を残す。ナデ調整。104は土師器椀で丸底を呈し、口縁部は直立する。内外面ともナデ調整で、口縁部付近はヨコナデ。

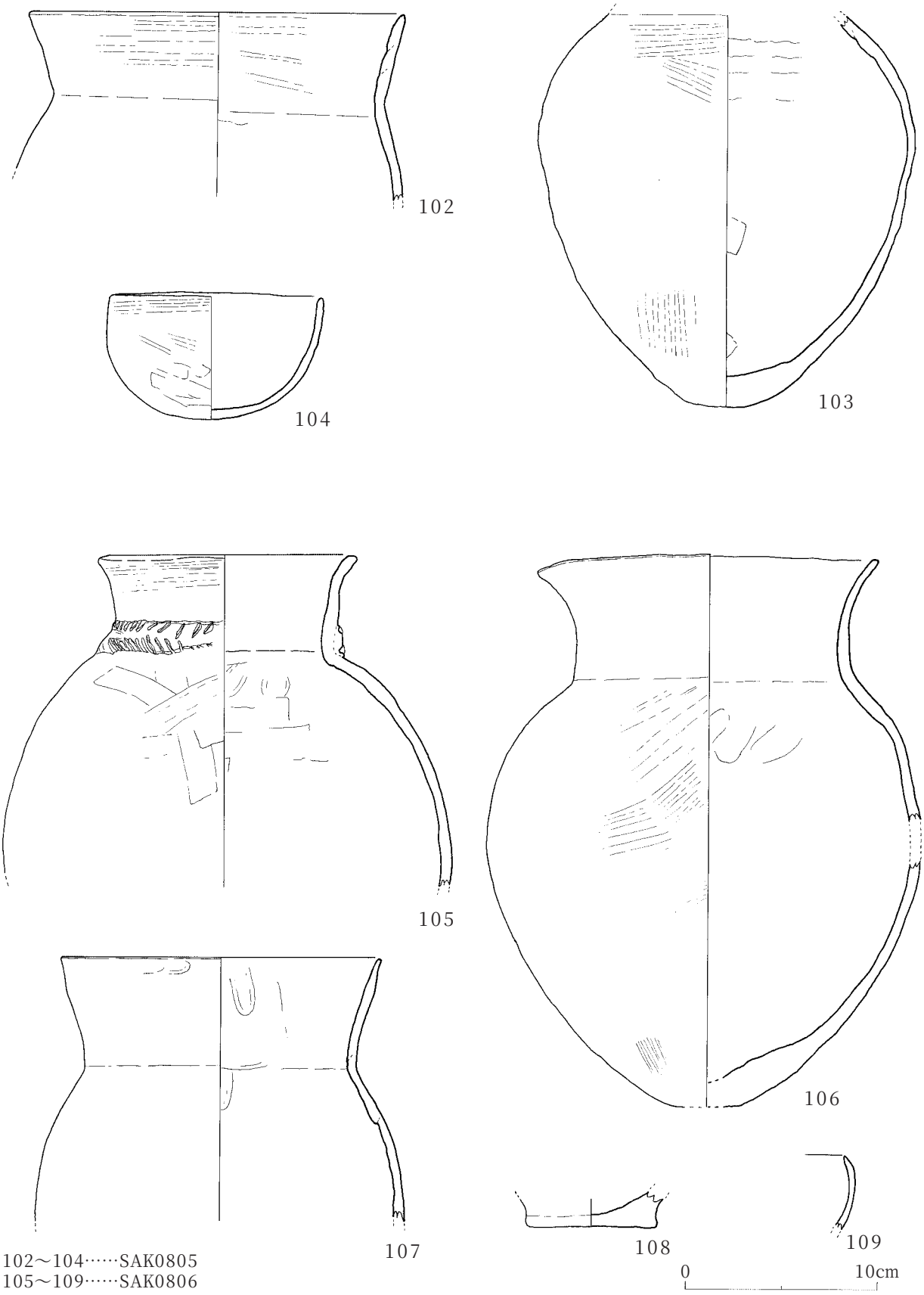
⑥　SAK0806

調査範囲の制約と、新しい溝によって一部掘削されていたため、検出できたのは全体の約60%である。長辺約4.6m、短辺約４mの長方形プランになると推測される。検出面からの深さ約45cmで、埋土中から高原スコリヤに近似したオレンジパミスを確認した。主柱穴は３本確認され、全体のバランスから４本柱になると思われる。

出土遺物はすべて土師器である。105は中型の長胴壷である。口縁部の付け根に刻目の突帯を貼り付ける。口縁部は先端がやや外反しながら立ち上がる。内外面とも板ナデが施される。106と107は中型の長胴甕。106は口縁部の付け根の稜が内面でとくに不明瞭になる。口縁部は外反しながら立ち上がる。内外面ともナデおよび一部に指オサエ。107も口縁部の付け根の稜が内外面とも不明瞭。屈曲も弱い。口縁部は直線的に立ち上がる。内外面とも板ナデ。110は球胴壷の胴部だろう。内外面とも板ナデが施される。111は長胴の壷ないし甕の底部でわずかに平底を残す。内外面ともナデ。112は鉢ないし長胴甕だろう。底部は安定した平底でやや張り出す。内外面とも板ナデ、底部付近に指オサエ。113は高坏の脚柱部。脚部はハの字状に開き、柱状部はほぼ直線状になる。外面にはミガキ、内面はナデ。114と118は小型壷の胴部～底部片で、平底を呈す。114は内外面ともミガキ。118は外面はミガキ。内面はナデ。117は小型壷の口縁部。口縁部は短く直立しながら立ち上がる。115は鉢である。平底の底部を呈し木の

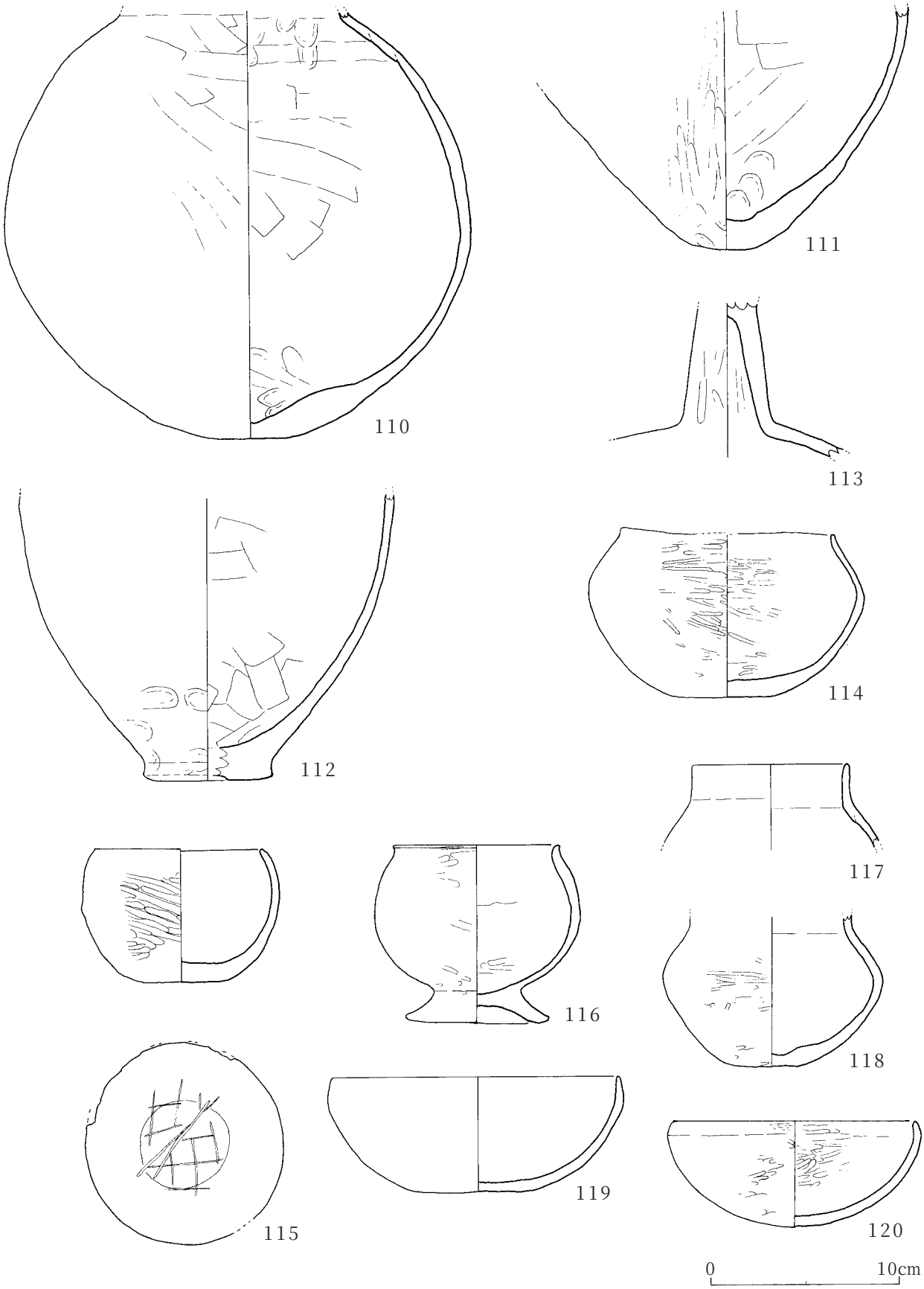


図版22　SAK0805・SAK0806（1／60）



102～104……SAK0805
105～109……SAK0806

図版23　SAK0805（上）・SAK0806出土遺物①



図版24　SAK0806出土遺物②

葉痕が残る。口縁部は内湾しながら立ち上がる。外面はミガキ、内面はナデ。116は脚台付の鉢で、胴部は丸みを帯び、口縁端部がわずかに外反する。脚台はハの字状に開く。摩滅激しいが外面はミガキ、内面はナデだろう。119と120は杯である。119は口縁部が直線的に、120はやや内湾しながら立ち上がる。119は摩滅激しく調整不明。120は内外面ともミガキ。

⑦　**SAK0807**

SAK0803とSAK0804と切り合った状態で検出された。埋土の関係からSAK0803→SAK0804→SAK0807の順で構築されたと考えられる。１辺約2.7mと推定されるが、主柱穴や、帰属する遺物は確認できなかった。

第４節　中世および時期不明の遺構の調査

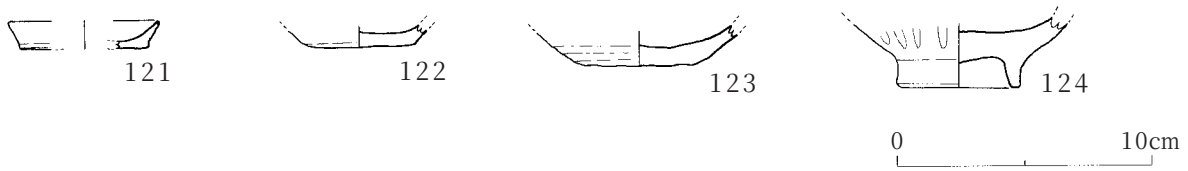
１．中世の遺構と遺物

①　**SEK0801**

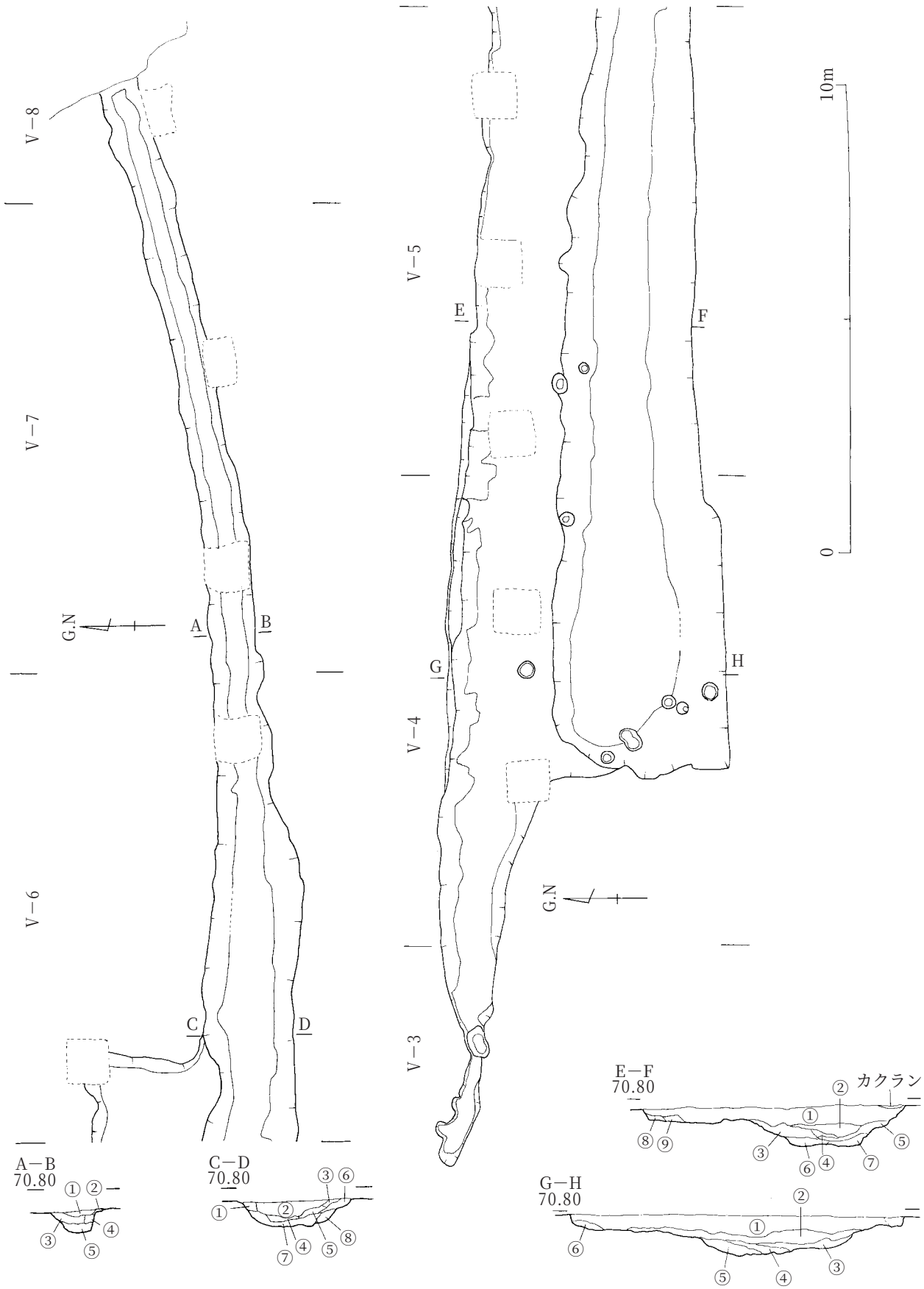
調査区の東側から東西に走り、西側は浅くなり終結する。東側では幅約45cm、深さ約40cmだが、途中で幅が一気に拡がり、最大幅約６m、深さ約70cmを測る。幅が広くなった箇所では北側肩部に焼土混じりの粘土を貼り付けている。調査区東側は谷地形となっており、溝はその谷に向って延びていることから排水施設の可能性がある。

埋土から多数の遺物が出土したが、ほとんどは縄文土器や古墳時代の土師器であった。ここでは少量出土した中世の遺物を報告する。

121は土師器皿で体部には回転ナデを施し、ヘラ切り底となっている。122と123は土師器椀の底部で、ともに体部は回転ナデ、底部はヘラ切りとなっている。124は高台付きの青磁椀で龍泉窯系と考えられる。おそらく蓮弁文をもつと思われ、施釉は高台内の中心以外の全面に認められる。16世紀代に位置付けられ、他の土師器もこれに矛盾しない。



図版25　SEK0801出土遺物



図版26　SEK0801（1／120）

【SEK0801土層注記】

A－B

①暗褐色土　やわい径１～３cm程度のオレンジパミスを含む

②暗褐色土　ややしまっている。径１～３cm程度の地山ブロックをわずかに含む。

③黒褐色土　ややしまっている。径５cm程度のアカホヤブロックをわずかに含む。

④黒褐色土　③よりやや明るく粘質があり、径１cm程度の地山ブロックをわずかに含む。

⑤暗褐色土　よくしまっている。地山ブロックを多く含み、粘質のある褐色土が混ざっている。

C－D

①暗褐色土　しまっている。細かい地山ブロックが多く混じる。

②暗褐色土　しまっている。細かい地山ブロックや径５cm程度のアカホヤブロックが混じる。

③暗褐色土　非常にしまっている。細かい地山ブロックが多く混じる。

④暗褐色土　やわい。細かい地山ブロック多く含む。

⑤暗褐色土　しまっている。細かい地山ブロック多く混じる。

⑥黒褐色土　非常にしまっている。径１～２cm程度の地山ブロック多く含む。

⑦暗褐色土　やわい。径１～10cm程度の地山ブロックを多く含む。

⑧黒褐色土　よくしまっている。径１～５cm程度の地山ブロックを多く含む。

E－F

①暗褐色土　しまっている。細かい地山ブロック多く含む。

②黒褐色土　よくしまっている。径１～５cm程度の地山・アカホヤブロックを多く含む。

③明褐色土　やわい。径１～５cm程度の地山ブロックを多く含む。

④褐色土　　やわい。径１～５cm程度の地山ブロック多く含む。

⑤黒褐色土　②に近いがややわい。

⑥明褐色土　やわいが、非常にしまった地山ブロックが多く混じる。

⑦明褐色土　⑥に近いが、地山ブロックが細かい。

⑧粘土質の焼土

⑨暗褐色土　しまっている。焼土ブロックが混じる。

G－H

①暗褐色土　しまっている。細かい地山ブロック多く含む。

②暗褐色土　しまっている。細かい地山、焼土ブロック、炭化物を含む。

③暗褐色土　②に近いが地山ブロックをより多く含む。

④暗褐色土　やわい。細かい地山ブロックを少量含む。

⑤明褐色土　やわい。径１～５cm程度の地山ブロックを多く含む。

⑥粘土質の焼土。

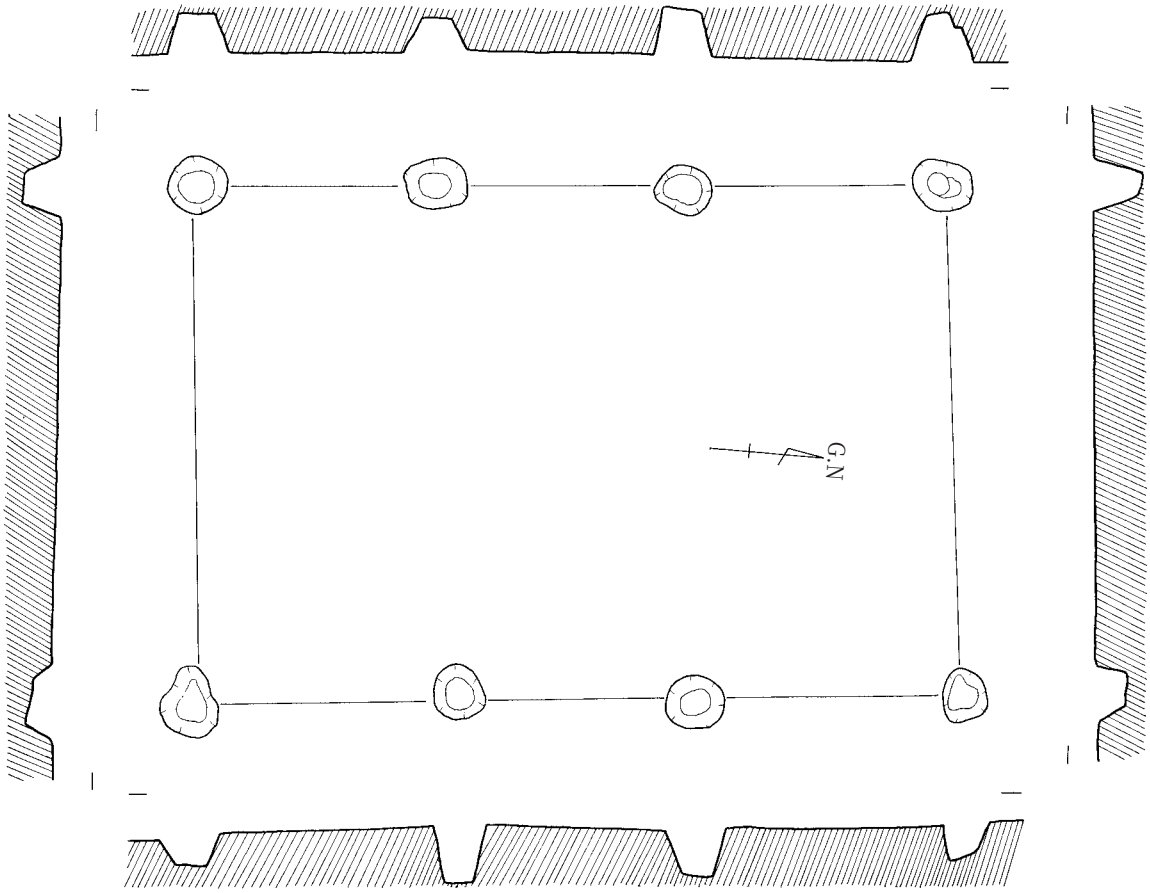
図版27　掘立柱建物群配置図

2．掘立柱建物群

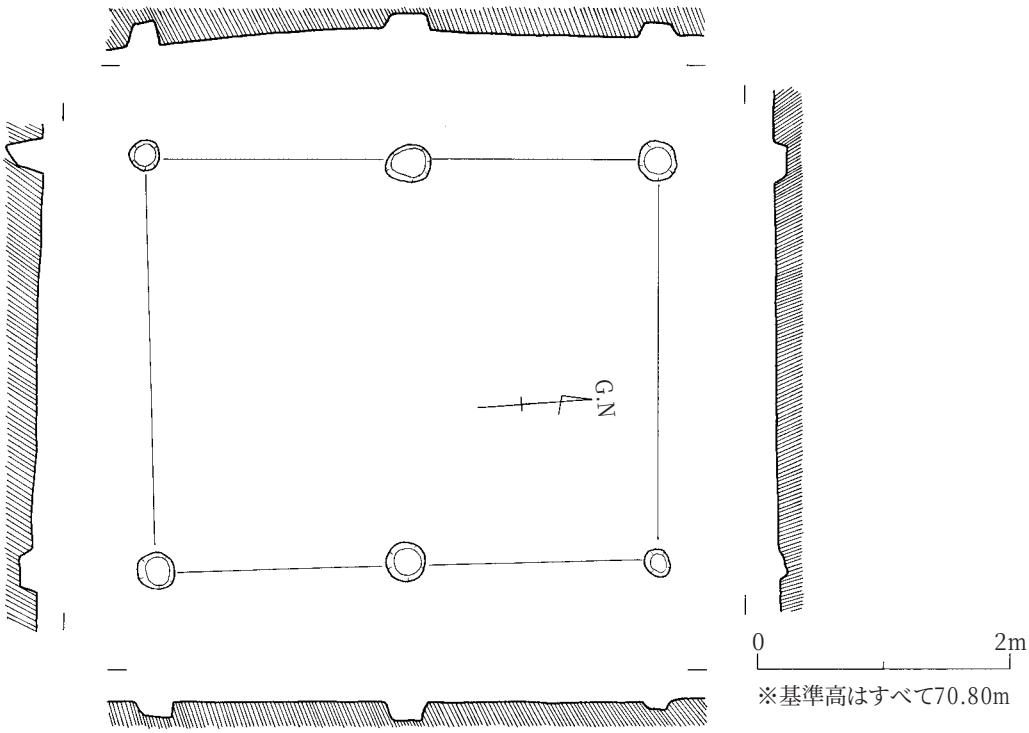
調査区の西側で６棟（SHK0801～SHK0806）、中央でSAK0801と切りあった状態で１棟（SHK0807）検出している。SHK0801～SHK0806は切り合いもなく規則的な配置となっていることから同時期に存在した可能性が高い。いずれも庇は確認できない。出土遺物に乏しく時期の特定には至らなかったが、SEK0801と同時期の可能性がある。

①　SHK0801

１間×３間で、建物群のなかでは最も規模が大きい。ピットの径は27～30cmで、検出面からの深さは15～30cmである。

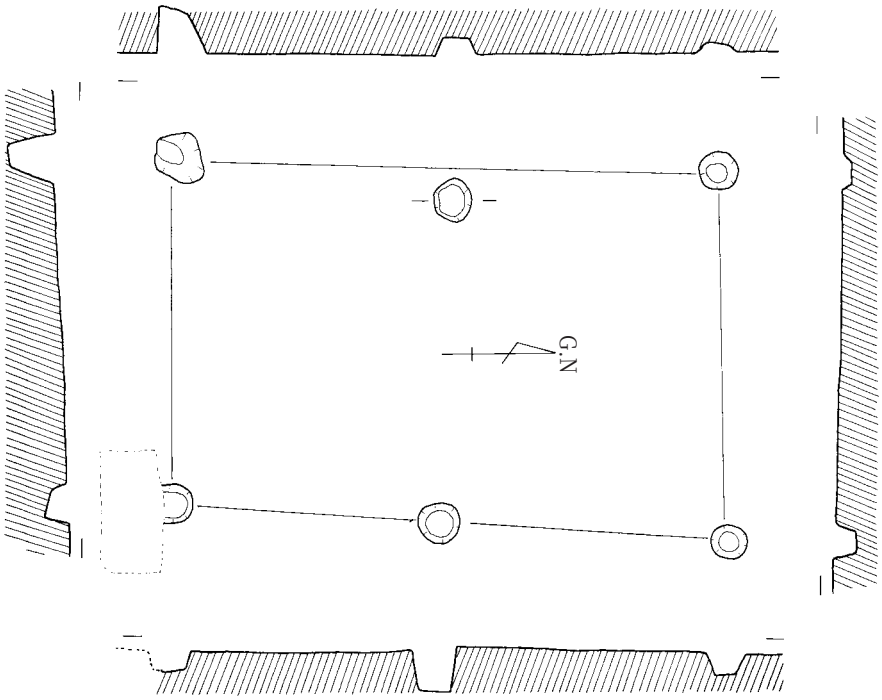


SHK0801

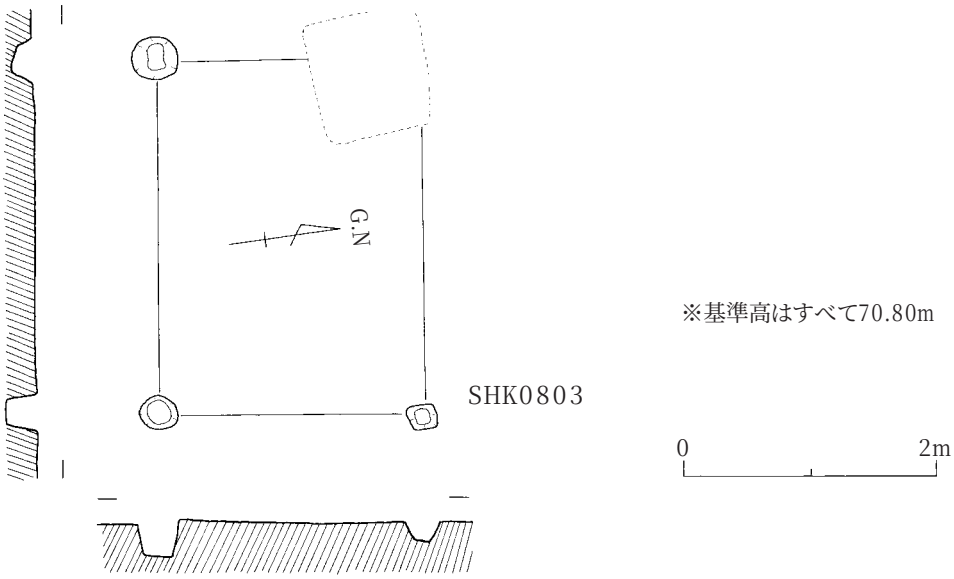


SHK0802

図版28　SHK0801（上）・SHK0802（下）（1／60）



SHK0804



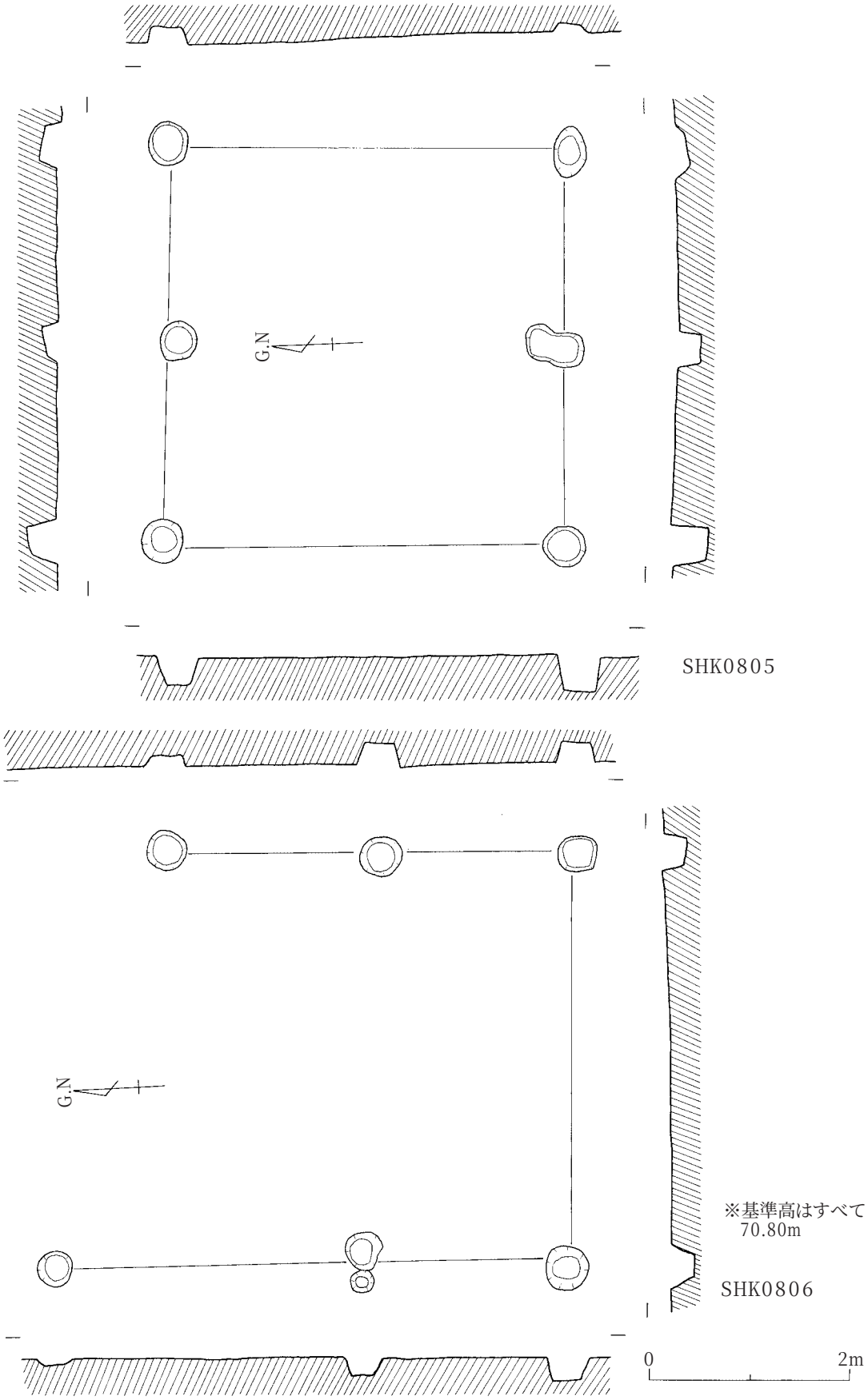
図版29　SHK0803（下）・SHK0804（上）（1／60）

②　SHK0802

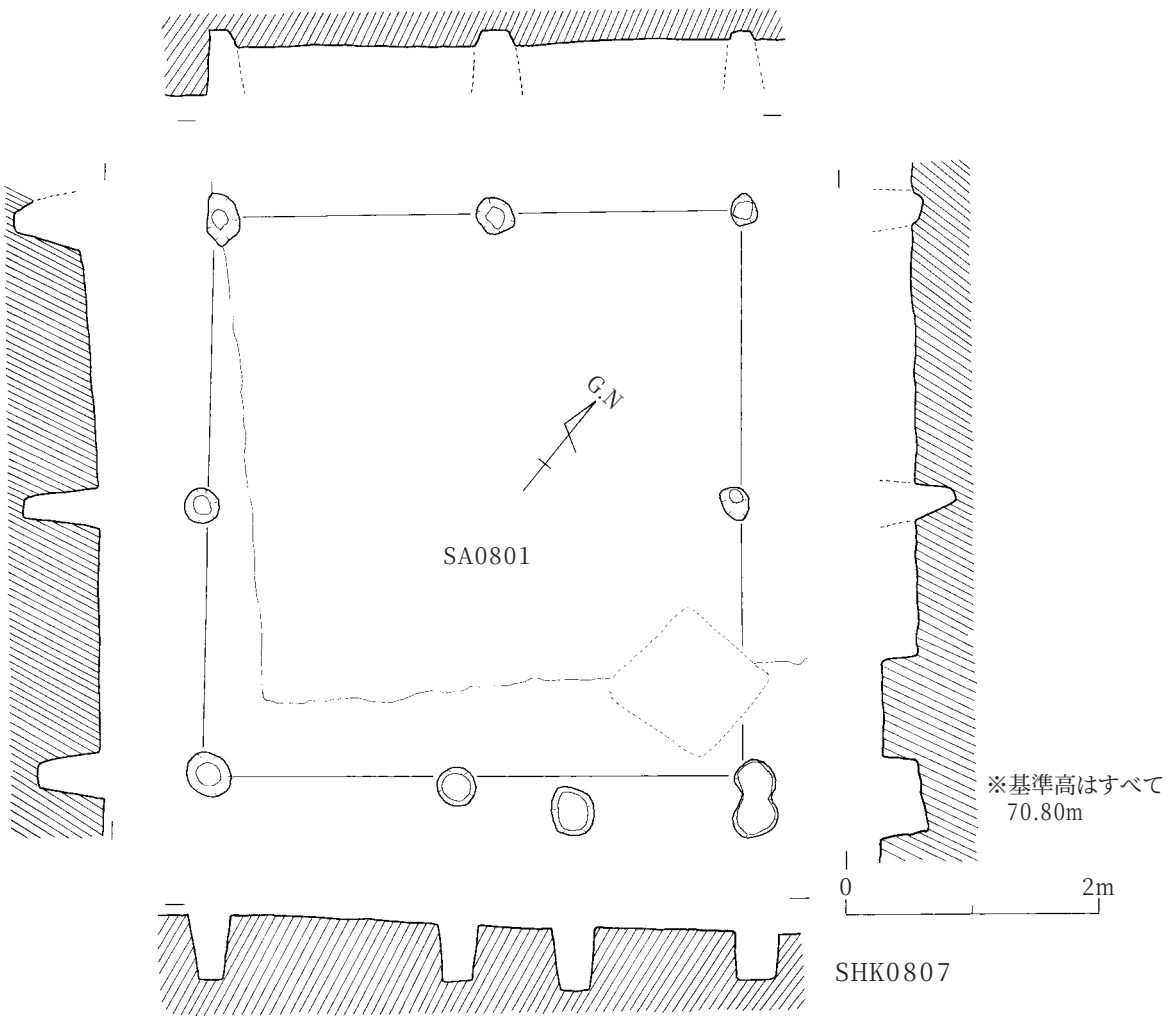
１間×２間で、ピットの径は14～20cm。検出面の深さは６～20cmと上面が大きく掘削されているために浅い。

③　SHK0803

新しい掘り込みによって掘削され、３個のピットしか検出されていないが、１間×１間の小規模な建物になると思われる。ピットの径は16～21cm。上面を大きく掘削されているために検出面からの深さ12～20cmを測るにすぎない。



図版30　SHK0805（上）・SHK0806（下）（1／60）



図版31　SHK0807（1／60）

④　**SHK0804**

１間×２間の建物である。新しい掘り込みによって一部掘削されている。全体的にバランスが悪く、北側の梁行が広く、南側が狭くなっている。ピットの径は18～24cmで、検出面からの深さ６～26cmで、北側で浅くなる傾向にある。

⑤　**SHK0805**

１間×３間の建物で、ピットの径は26～30cm。検出面からの深さ８～24cmを測る。

⑥　**SHK0806**

上面が大きく掘削され、６個のピットしか検出されていないが、１間×３間になると思われる。ピットの径は23～30cmで、検出面からの深さ５～16cmと浅い。

⑦　**SHK0807**

他の建物群と離れた位置にあり、SAK0801と切りあっている。２間×３間の可能性もあるが、おそらく２間×２間だろう。ピットの径は18～24cmである。ピット内から遺物は出土していないが、他の建物群とは異なる時期である可能性が高い。

表２　掘立柱建物計測表

遺構番号	位　置	主　軸	規　模	桁　行	梁　行	床面積
SEK0801	Ⅳ－2	南北	１間×３間	5.94～6.24m	4.05m	24.6㎡
SEK0802	Ⅳ－2・3	南北	１間×２間	3.99～4.05m	3.21～3.3m	13.1㎡
SEK0803	Ⅳ－3	東西	１間×１間	2.79m	2.13m	5.9㎡
SEK0804	Ⅳ－3・4	南北	１間×２間	4.35～4.47m	2.79×2.94m	12.6㎡
SEK0805	Ⅲ－2	東西	１間×２間	3.90m	3.90m	15.2㎡
SEK0806	Ⅲ－3	南北	１間×３間？	5.1m	4.11m	20.9㎡
SEK0807	Ⅳ・Ⅴ－5	北東～南西	２間×２間	4.44～4.50m	4.20～4.26m	18.9㎡

３．焼土遺構

調査区の南西側で焼土遺構を検出した。不定形な掘り込みに、焼土や灰を投げ入れたものと思われる。遺物は縄文土器や古墳時代の土師器が混入した状況にあり時期の特定には至らなかった。

表３　春日８次縄文土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	部位	法　量	調整・文様		色　調		胎土・焼成	備考
					形態の特徴	技法の特徴	外　面	内　面		
1	包含層一括	円筒系深鉢	口縁部（反転復元）	口径（16cm）	直立する口縁部	外面は斜位の条痕のち横位の条痕を施す。内面はナデか	にぶい黄橙10YR6/4 黄灰2.5YR5/1	にぶい黄褐10YR5/3	粗。焼成普通	早期
2	包含層一括	深鉢	口縁部		口縁部先端は平坦	外面は斜位および横位の条痕。内面は丁寧なナデ。	明黄褐10YR7/6	橙7.5YR6/6	やや密。焼成普通。	早期
3	包含層一括		胴部			外面は山形押型文。内面は指頭によるナデ。	橙7.5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4	やや粗。焼成良好。	早期の押型文土器
4	包含層一括		胴部			外面は山形押型文。内面は不明瞭。	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4	やや粗。焼成良好。	早期の押型文土器
5	包含層一括	鉢	口縁部		鋸歯縁状の口縁	３～４mm幅のへら状工具による横、斜めの凹線。内面はナデ	にぶい黄橙10YR7/3	明黄褐10YR7/6	やや密。焼成良好。	
6	包含層一括	鉢	胴部			３～４mm幅のへら状工具による横、斜めの凹線。内面はナデ	にぶい黄橙10YR7/3	灰黄2.5Y7/2	やや密。焼成良好。	５と同一個体か
7	包含層一括	鉢	胴部	胴径（18cm）		内外面とも摩滅により不明瞭。ナデと思われる。	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR6/4	密。焼成やや不良	早期の円筒系土器か
8	ＳＤ１	甕	口縁部		口縁部を肥厚させる	内外面とも横方向のナデ	浅黄5Y7/3 明黄褐10YR7/6	浅黄橙10YR8/3	やや粗。焼成普通。	松添式。
9	ＳＤ１	甕	口縁部		口縁部を肥厚させる	内外面ともに条痕のちナデ。一部に条痕が残る。	灰白5Y8/2	淡黄2.5Y8/4	やや密。焼成普通。	松添式。
10	ＳＤ１	甕	口縁部		口縁部を肥厚させる	外面は横方向のナデ。内面は貝殻による条痕	灰白5Y7/2 灰白10YR8/2	淡黄2.5Y8/4	普通。焼成普通。	松添式。
11	ＳＤ１	甕	口縁部		口縁部を肥厚させ、断面が三角。	外面は横方向のナデ。内面は摩滅のため不明瞭。	浅黄橙7.5YR8/4	黄橙10YR8/6	粗。焼成普通	松添式。
12	ＳＤ１	甕	胴部			摩滅激しい。内面は条痕のちナデ。	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄2.5Y6/4	粗。焼成普通	
13	ＳＤ１	甕	底部	底径（８cm）	張り出し気味の底部をもつ。やや上げ底	摩滅により不明瞭。	にぶい黄橙10YR7/4	橙5YR7/6	粗。焼成普通	
14	ＳＤ１	甕	底部	底径（10cm）	張り出し気味の底部をもつ。	外面は摩滅により不明瞭。内面には条痕は残る。	淡黄2.5YR8/3	灰白2.5Y8/2	粗。焼成良好	
15	土器溜り	甕	口縁～胴部	口径（20cm） 胴部径（21cm）	孔列および口縁直下に刻目突帯	内外面ともに条痕のち横方向のナデ。	灰黄褐10YR5/2	灰オリーブ5Y4/2	やや粗。焼成普通。	孔列をもつ刻目突帯文土器
16	土器溜り	甕	口縁～胴部		口縁端部と胴部に刻目突帯。	外面は条痕のち丁寧なナデ。内面は丁寧なナデ。	にぶい黄橙10YR7/2 灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	やや粗。焼成普通。	刻目突帯文土器。
17	土器溜り	甕	口縁部		口縁直下に刻目突帯。口縁端部にリボン状突起。	内外面とも工具によるナデ。	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄橙10YR7/4	やや粗。焼成普通。	刻目突帯文土器。
18	土器溜り	甕	口縁部		口縁直下に刻目突帯その下に貫通孔列。口縁端部一部突起。	内外面とも条痕。	褐灰10YR4/1	にぶい橙7.5YR6/4	やや粗。焼成普通。	孔列をもつ刻目突帯文土器。貫通孔。
19	土器溜り	甕	口縁部		口縁直下に刻目突帯。突帯下に孔列。口縁端部も若干肥厚する。	外面は条痕のち粗い指ナデ。内面は条痕のちナデ	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR6/4	やや粗。焼成良好。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
20	土器溜り	甕	口縁部		口縁直下に突帯。突帯下に孔列。	外面はヘラ状の工具ナデ。内面はナデ。	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4	やや密。焼成普通。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
21	土器溜り	鉢	口縁部		口縁直下に断面三角の刻目突帯。	外面はヘラ状の工具ナデ。内面はナデ。	橙5YR6/6	にぶい黄橙10YR6/4	やや粗。焼成普通。	刻目突帯文土器。
22	土器溜り	鉢	口縁部		口縁直下に断面三角の刻目突帯。	内外面ともナデ。	橙7.5YR7/6	にぶい橙7.5YR6/4	やや粗。焼成良好。	刻目突帯文土器。
23	土器溜り	甕	口縁部		口縁直下に刻目突帯。突帯下に孔列。口縁端部も若干肥厚する。	摩滅により不明瞭だが、外面には条痕が残る。	灰黄褐10YR6/3	浅黄橙10YR8/4	やや密。焼成良好。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
24	土器溜り	甕	口縁～胴部		口縁直下と胴部に刻目突帯。孔列。	外面は条痕のちヘラ状工具ナデ。内面は条痕。	灰黄褐10YR5/2 黒10YR2/1	にぶい橙7.5YR6/4 褐灰7.5YR4/1	やや密。焼成良好。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
25	土器溜り	甕	口縁部		口縁直下に刻目突帯その下に孔列。	内外面とも横方向の条痕	褐灰10YR4/1	にぶい橙7.5YR6/4	やや密。焼成良好。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
26	土器溜り	甕	口縁～胴部		口縁直下に刻目突帯。突帯の断面三角。	内外面とも横方向のナデ。	にぶい橙5YR6/4 にぶい褐7.5YR6/3	にぶい黄橙10YR6/4	やや粗。焼成良好。	刻目突帯文土器。
27	土器溜り	甕	口縁部		口縁端部を肥厚させ刻目を施す。	内外面とも横方向のナデ。	にぶい黄橙10YR7/4 浅黄橙7.5YR8/6	にぶい黄橙10YR6/4	やや粗。焼成良好。	刻目突帯文土器。
28	土器溜り	甕	口縁部		口縁直下に刻目突帯。孔は貫通しており補修孔か	内外面ともナデ。	にぶい橙7.5YR6/4	浅黄橙10YR8/3	やや粗。焼成良好。	刻目突帯文土器。
29	土器溜り	甕	口縁部		直立する口縁	内外面ともナデ。	にぶい黄褐10YR5/3 褐灰10YR5/1	にぶい黄橙10YR7/4	やや粗。焼成普通。	

挿図番号	出土地点	器種	部位	法　量	調整・文様		色　調		胎土・焼成	備考
					形態の特徴	技法の特徴	外　面	内　面		
30	土器溜り	鉢	口縁部		口縁端部を肥厚させ、刻目を施す。孔列。	内外面とも条痕。	黒褐10YR 3/2	にぶい黄褐10YR 5/3	普通。焼成良好。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
31	土器溜り	甕	口縁部		直立する口縁部	内外面ともにナデ。	にぶい黄褐10YR 7/3 灰黄褐10YR 4/2	にぶい黄橙10YR 7/3	普通。焼成普通。	
32	土器溜り	深鉢	口縁部		直立する口縁部。口縁端部をわずかに肥厚させる。	内外面ともにナデ。	にぶい黄褐10YR 7/4	灰黄褐10YR 5/2 にぶい橙7.5YR 6/4	やや密。焼成良好。	
33	土器溜り	小型精製浅鉢	口縁部		薄手。口縁部を肥厚させる。	内外面ともミガキ。	灰黄褐10YR 4/2	暗褐10YR 3/3	やや密。焼成普通。	
34	土器溜り	精製浅鉢	口縁部		口縁から頸部にかけて屈曲する。	内外面ともミガキ。	黄橙10YR 7/4	浅黄橙10YR 8/4	密。焼成良好。	
35	土器溜り	甕	口縁部		口縁直下に刻目突帯。突帯下に孔列と２条の斜位の沈線。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙10YR 7/3	にぶい黄橙10YR 7/3	普通。焼成普通。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
36	土器溜り	甕	胴部		胴部に刻目突帯。突帯上に２条の斜位の平行沈線	内外面ともナデ。	褐灰10YR 4/1	灰黄褐10YR 5/2	普通。焼成良好。	刻目突帯文土器。
37	土器溜り	甕	口縁部		口縁端部を肥厚させ刻目突帯を施す。突帯下に孔列と斜位の沈線。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙10YR 7/3	褐灰10YR 4/1	普通。焼成良好。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
38	土器溜り	甕	胴部		胴部に刻目突帯。突帯上に２条の斜位の平行沈線	外面は条痕およびナデ。内面は条痕。	黒褐10YR 3/1 にぶい黄橙10YR 7/2	灰黄褐10YR 6/2 褐灰10YR 5/1	やや粗。焼成やや不良。	
39	土器溜り	甕	胴部		胴部に刻目突帯を施す。	内外面ともナデ。	橙7.5YR 7/6	橙7.5YR 6/8	やや密。焼成良好。	刻目突帯文土器。
40	土器溜り	甕	胴部		胴部に刻目突帯を施す。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙10YR 6/4 にぶい橙7.5YR 6/4	にぶい黄橙10YR 7/3	粗。焼成良好。	刻目突帯文土器。
41	土器溜り	甕	胴部		刻目をもつ突帯。突帯の上には斜位の沈線。	外面は突帯上は条痕、下はヘラ状工具ナデ。内面は条痕。	黒褐10YR 3/1	褐灰10YR 4/1	やや粗。焼成やや不良。	刻目突帯文土器。
42	土器溜り	甕	胴部		胴部に刻目突帯を施す。	内外面ともナデ。	にぶい橙５YR 7/4 にぶい黄橙10YR 7/3	黄灰2.5Y 5/1	粗。焼成普通。	刻目突帯文土器。
43	土器溜り	甕	胴部		胴部に刻目突帯を施す。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙10YR 7/3	にぶい黄橙10YR 7/4	粗。焼成普通。	刻目突帯文土器。
44	土器溜り	甕	胴部		胴部に刻目突帯を施す。	外面はヘラ状工具ナデ。内面はナデ。	灰黄褐10YR 6/2	にぶい黄橙10YR 6/4	やや密。焼成良好。	刻目突帯文土器。
45	土器溜り	甕	胴部	胴径（36cm）	胴部に刻目突帯。補修孔あり。	外面は条痕。内面は条痕のちナデ。	にぶい橙7.5YR 7/3 黒7.5YR 2/1	にぶい橙7.5YR 6/3 褐灰7.5YR 4/1	やや密。焼成良好。	刻目突帯文土器。
46	土器溜り	甕	胴部		胴部に突帯。	内外面とも条痕。	灰黄褐10YR 6/2 にぶい黄橙10YR 7/4	浅黄橙10YR 8/3 にぶい黄橙10YR 6/3	やや密。焼成良好。	突帯文土器。
47	土器溜り	甕	胴部		屈曲部に線刻。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙10YR 7/4	浅黄橙7.5YR 8/4	やや粗。焼成普通。	線刻あり。
48	土器溜り	鉢	胴部		二条の断面Ｍ字突帯。途中で反転。	内外面ともナデ。	明黄褐7.5YR 5/8	橙7.5YR 6/8	やや密。焼成良好。	49と同一個体か。
49	土器溜り	鉢	胴部		二条の断面M字突帯。	内外面ともナデ。	明黄褐10YR 7/6	黄橙10YR 7/8	やや密。焼成良好。	48と同一個体か。
50	土器溜り	甕	底部	底径（11cm）	張り出した底部。底面には網代痕。	外面は指頭によるナデ。内面は不明瞭。	にぶい黄橙10YR 7/3	明黄褐10YR 7/6	密。焼成良好。	
51	土器溜り	鉢	底部	底径（5.6cm）		摩滅により不明瞭だが、内外面ともミガキか。	褐灰10YR 4/1	黒褐10YR 3/2	やや粗。焼成普通。	
52	Ⅲ－５	精製深鉢	口縁～胴部	口径（29.5cm） 胴部径（32cm）	肩部が張る。口縁部内面に浅い凹線。	内外面ともミガキ。	にぶい黄褐10YR 4/5	にぶい黄橙10YR 6/3	密。焼成良好。	精製土器
53	Ⅲ－４	甕	口縁～胴部	口径（27cm） 胴部径（27cm）	口縁端部に断面三角形の突帯。	内外面ともヘラ状工具によるナデ。一部に指ナデ	浅黄橙10YR 8/4	褐灰10YR 5/1 灰黄褐10YR 5/2	密。焼成良好。	
54	Ⅴ－２	甕	口縁～胴部	口径（24cm） 胴部径（26cm）	口縁直下と胴部に突帯。孔列。	外面はやや粗いミガキ。内面は摩滅のため不明瞭	黒10YR 2/1 黒褐10YR 3/2	にぶい黄橙10YR 6/3 褐灰10YR 4/1	やや粗。焼成普通。	孔列をもつ突帯文土器。
55	Ⅴ－２	甕	口縁部	口径（27cm）	口縁直下に無刻目の突帯。その下に孔列。	内外面とも条痕。	褐灰10YR 5/1 黒褐10YR 3/1	黒褐10YR 3/1	密。焼成良好。	孔列をもつ突帯文土器。
56	Ⅶ－３	鉢	口縁部		口縁端部を肥厚させ刻目を施す。その下に孔列。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙10YR 7/2	にぶい黄橙10YR 7/4	やや密。焼成良好。	孔列をもつ刻目突帯文土器。
57	包含層一括	甕	口縁部		口縁直下に低い突帯。突帯下に孔列。	内外面とも板状工具による条痕。口縁部付近はナデ。	黒褐10YR 3/1	にぶい橙５YR 6/4	やや密。焼成良好。	孔列をもつ突帯文土器。
58	包含層一括	甕	口縁部		口縁直下に刻目突帯。突帯下に孔列。	内外面ともナデ。	黒褐10YR 3/1 灰黄褐10YR 5/2	褐灰10YR 5/1	やや密。焼成良好。	孔列をもつ刻目突帯文土器。

挿図番号	出土地点	器種	部位	法　量	調整・文様		色　調		胎土・焼成	備考
					形態の特徴	技法の特徴	外　面	内　面		
59	包含層一括	精製浅鉢	口縁部		口縁部内側が肥厚する。	内外面ともミガキ。	黄橙10YR 8/6 黒10YR 2/1	にぶい黄橙10YR 7/4	密。焼成良好。	精製土器。
60	Ⅶ－５	鉢	口縁～胴部		口縁直下には無刻目の突帯。その下に孔列。胴部屈曲部には刻目突帯。	内外面ともナデ。	浅黄橙10YR 8/3 灰白10YR 7/1	浅黄橙10YR 8/4	やや粗。焼成良好。	口縁部は無刻目、胴部には刻目突帯。孔列。
61	Ⅶ－５		胴部		胴部は「く」の字状に屈曲し刻目突帯を施す。	内外面ともナデ。内面には条痕がわずかに残る。	灰白10YR 8/2	灰白7.5Y 2/1	やや粗。焼成良好。	刻目突帯文土器。60と同一個体の可能性がある。
62	包含層一括	甕	口縁部		口縁部に薄い粘土を貼り付けてわずかに肥厚させる。孔列。	内外面とも粗い条痕。	橙10YR 8/6	にぶい黄橙10YR 6/4	粗。焼成普通。	松添式。孔列。
63	Ⅵ－５	甕	口縁部		口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させる。	内外面ともナデ。	黄橙10YR 8/6 黒10YR 2/1	にぶい黄橙10YR 7/4	密。焼成良好。	松添式。
64	Ⅵ－２	甕	胴部			外面は粗いミガキ。内面はナデ。	にぶい黄橙10YR 3/4	灰オリーブ5Y 6/2	やや粗。焼成良好。	
65	Ⅵ－２	甕	胴部		胴部中央で屈曲し底部へ至る	外面は条痕のちナデ。内面はナデ。	にぶい黄橙10YR 6/4	浅黄2.5Y 7/3	やや密。焼成良好。	
66	Ⅴ－４	甕	胴部			内外面とも条痕。	橙5YR 7/6 にぶい橙7.5YR 6/4	褐灰10YR 4/1	普通。焼成良好。	
67	Ⅶ－２	甕	胴部			内外面とも条痕。	にぶい黄橙10YR 6/4 ～4/3	浅黄橙10YR 8/3	やや粗。焼成良好。	

表４　石器計測表

挿図番号	出土地点	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量(g)	石材
68	SA2埋土	打製石斧	15.3	9.0	3.1	475	ホルンフェルス
69	縄文集	打製石斧	10.7	6.0	1.1	100	ホルンフェルス
70	Ⅵ－８	打製石斧	15.3	9.1	1.9	270	ホルンフェルス
71	Ⅵ－５	石錐	7.3	6.3	2.5	160	砂岩
72	縄文集	石錐	5.2	4.0	1.8	50	砂岩
73	縄文集	磨石	8.3	8.3	4.3	420	尾鈴酸性岩
74	包含層	敲石	8.3	8.1	5.3	450	砂岩

表５　春日遺跡土師器・須恵器観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外側	内面		
75	SA1	土師器	甕	全形	70%	口径20.9cm 胴部径24cm 器高29.4cm	口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	内外ともナデ。口縁部はヨコ。胴部は斜め	橙 2.5YR6/6 にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4 灰オリーブ 5Y5/3	やや粗 普通	
76	SA1	土師器	甕	口縁から胴部	45%	口径（17cm） 胴部径（19cm）	口縁部端部がやや内湾。底肩部がやや張る	内外ともナデ。口縁部はヨコ。胴部は斜めにヘラ状工具ナデ	にぶい黄橙 10Y R6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	精良 良好	反転復元
77	SA1	土師器	甕	口縁から胴部	10%	口径（19.2cm） 胴部径（21.5cm）	口縁部付け根の稜が不鮮明。	内外ともナデ。指頭か	にぶい黄橙 10Y R7/4	にぶい橙7.5Y R7/4	やや粗 良好	反転復元
78	SA1	土師器	杯	全形	70%	口径（16.3cm） 器高6.4cm	口縁端部がほぼ直立して立ち上がる	摩滅により不明瞭	橙 5Y R6/6	橙 5Y R6/8	精良 やや不良	
79	SA1	土師器	杯	全形	50%	口径17.1cm 器高6.2cm	口縁端部がほぼ直立して立ち上がる	摩滅激しい。へらミガキか	橙 5Y R7/8	橙 5Y R7/8	精良 良好	
80	SA1	土師器	杯	全形	60%	口径（13.2cm） 底径4.9cm 器高5.9cm	口縁端部が内傾する。わずかに平底	内外とも口縁部は丁寧なヨコナデ。胴部は不規則なナデ	黄橙 7.5Y R7/8	黄橙 7.5Y R7/8	やや良 良好	一部反転復元
81	SA1	土師器	杯	口縁から胴部	20%	口径（12.9cm） 器高（5.7cm）	口縁部はほぼ直立	内外とも口縁部はヨコナデ。胴部は不規則なナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	精良 良好	反転復元
82	SA1	土師器	脚台付杯	口縁から胴部	50%	口径（11.6cm）	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる	内外ともヨコナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗 良好	
83	SA1	土師器	椀	全形	70%	口径10.9cm 器高6.5cm	口縁部は内湾底部がわずかに平底を呈す	内外ともヨコ方向にミガキ。内面底部はナデ	赤灰 2.5YR4/1	にぶい黄橙 10YR7/3	精良 良好	
84	SA1	須恵器	器台	胴部から底部	10%	底径（31cm）	外面に櫛描波状文とM字突帯	内面は回転ナデ	灰 5Y5/1 灰オリーブ 5Y5/2	暗灰黄 2.5Y4/2	精良 普通	反転復元
85	SA1	土師器	椀	全形	30%	口径（15.4cm） 器高6.1cm 底径（7.2cm）	平底を呈し、木の葉痕が残る	摩滅により不明瞭内面はナデか	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	精良 普通	反転復元
86	SA1	土師器	甕か壷	底部	10%	底径（７cm）	平底を呈し、木の葉痕が残る	内外ともナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/3	普通 良好	
87	SA2	土師器	甕	全形	60%	口径19.4cm 底径2.2cm 器高29.8cm	口縁部は直線状に開く。底部はわずかに平底	外面はタタキ内面は縦、斜め方向のナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	やや粗 普通	
88	SA3	土師器	壷	全形	70%	口径12.6cm 器高35.3cm	口縁部は外傾しながら立ち上がる。丸底	外面摩滅により不明。内面ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR7/6	やや粗 普通	
89	SA3	土師器	甕	全形		口径18.7cm 胴部径24.7 器高27.4cm	口縁部は外傾しながら立ち上がる	内外とも口縁部ヨコナデ。胴部はタテナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 橙5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	やや良 普通	
90	SA3	土師器	甕	口縁から胴部	20%	口径（18.7cm）	口縁部の付け根の稜不鮮明口縁部は端部のみ外傾	内外とも口縁部ヨコナデ。胴部はタテ、斜めのナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	やや良 普通	
91	SA3	土師器	甕	胴部から底部	30%	底径（9.7cm）	平底を呈す。	外面はタテナデ内面はヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	やや良 普通	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外側	内面		
92	SA3	土師器	椀	全形	50%	口径（14cm） 底径4.7cm 器高7.1cm	平底を呈し、木の葉痕が残る	内外ともナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6 橙 5YR6/6	普通 普通	
93	SA3	須恵器	杯身	全形	80%	口径11.2cm 胴部径13.5cm 器高7.4cm	口縁端部はするどくおさめる	外面は回転ナデのちヘラケズリ。内面は回転ナデ	灰白 5Y7/2	浅黄 5Y７/3	精良 不良	
94	SA4	土師器	甕	全形	75%	口径（20.6cm） 胴部径22.3cm 器高27cm	口縁部直線状に立ち上がる丸底	内外ともナデ	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良普通	
95	SA4	土師器	甕	全形	70%	口径（17.3cm） 底径3.5cm 器高24.7cm	口縁部は直線状に立ち上がる底部はわずかに平底	内外ともナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄褐 10YR5/3	良普通	
96	SA4	土師器	甕	全形	50%	口径（30.5cm） 胴部径（29.5cm）	口縁部は直立気味に立ち上がる。丸底	内外ともナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4～8/3	やや粗 普通	反転復元
97	SA4	土師器	甕	口縁部	10%	口径（20.2cm）	口縁部は直線状に立ち上がる	内外ともナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4	良普通	
98	SA4	土師器	椀	全形	40%	口径（13.4cm） 器高7.7cm 底径（5.3cm）	胴部は丸みを帯び、口縁端部はやや直立	摩滅のため不明瞭。ミガキか	暗灰 N3/	暗灰 N３/	良良好	反転復元
99	SA4	土師器	高坏	全形	40%	口径（16.2cm） 裾部径（10.5cm） 器高10.5cm	受部との境が不明瞭	摩滅している。全体にナデか	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	精良 普通	
100	SA4	土師器	椀	口縁から胴部	20%	口径（15.2cm）	口縁端部が内湾する	外面はミガキ内面はナデ	橙 2.5YR6/8	橙 7.5YR7/6	普通 良好	反転復元
101	SA4	土師器	甕か壷	底部	10%以下	底径６cm	平底の底部	外面はナデ、指オサエ。内面はナデ	淡橙 5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	
102	SA5	土師器	甕	口縁部	20%	口径19.4cm	口縁部は直線状に開く	内外ともナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	良普通	
103	SA5	土師器	壷	頸部から底部	40%	頸部径（12.5cm） 胴部径20cm 底径4.8cm	わずかに平底を呈す	内外ともナデ	浅黄橙 7.5YR8/4 にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	やや粗 普通	
104	SA5	土師器	椀	全形	60%	口径（10.9cm） 器高6.7cm	口縁部は直立気味に立ち上がる。丸底	内外とも板ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	精良 普通	反転復元
105	SA6	土師器	壷	口縁から胴部	40%	口径13.5cm 胴部径23.5cm	口縁端部が外反する	内外ともナデのち頸部に刻目突帯を貼り付け	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR	良良好	
106	SA6	土師器	甕	全形	60%	口径17.8cm 胴部径22.5cm 器高29cm	口縁部は外反しながら立ち上がる	内外ともナデ	橙 5YR7/8 橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/8	良 やや不良	
107	SA6	土師器	甕	全形	30%	口径（16.8cm） 胴部径（19.2cm）	口縁部は直線状に立ち上がる	内外とも工具ナデ	浅黄橙 7.5YR6/6 橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR7/6 橙2.5YR6/6	良 やや不良	
108	SA6	土師器	甕か壷	底部	10%以下	底径6.9cm	平底	内外ともナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	精良 良好	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外側	内面		
109	SA6	土師器	杯	口縁部	10%以下		口縁部は内湾しながら立ち上がる	外面へら状の工具ナデ。内面はナデ	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	やや粗 普通	
110	SA6	土師器	壷	頸部から底部	70%	胴部径24.7cm 底径4cm	胴部は丸みを帯び、わずかに平底を呈す	内外ともナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	やや粗 良好	
111	SA6	土師器	甕か壷	胴部から底部	30%	底径3.7cm	わずかに平底を呈す	内外ともナデ。外面は下からナデあげている	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 良好	
112	SA6	土師器	甕か壷	胴部から底部	30%	底径（7cm）	平底を呈し、若干外側に張る	内外ともナデ。一部に指頭痕	にぶ黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	粗良好	
113	SA6	土師器	高坏	柱状部から脚部	30%		柱状部はほぼ直線状	外面はミガキ。内面はナデ	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/8	精良 良好	
114	SA6	土師器	壷	全形	80%	口径11.2cm 底径5.2cm 器高9.5cm	胴部が算盤状に張る。口縁部と胴部との境不明瞭	内外面ともミガキ	暗灰 N3/	灰 10Y4/1	精良 良好	
115	SA6	土師器	鉢	全形	80%	口径9cm 底径4.5cm 器高7.2cm	胴部は丸みを帯びながら口縁に至る	外面はミガキ。内面はナデ	橙 7.5YR6/7 暗灰 N3/	橙 7.5YR7/6	良良好	
116	SA6	土師器	脚台付鉢	全形	50%	口径（9cm） 器高9.5cm 底径7.6cm	ハの字状に開く脚部をもつ	外面はナデのちミガキ。内面ナデ	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良良好	
117	SA6	土師器	小型甕	口縁から頸部	10%以下	口径（8.4cm）	口縁部は直立	外面はナデのちミガキ。内面ナデ	黄灰 2.5Y6/1	黄橙 2.5Y6/1	良良好	
118	SA6	土師器	小型壷	胴部から底部	60%	底径3.9cm	胴部が算盤状に張る。底部は平底	外面はナデのちミガキ。内面ナデ	黒褐 2.5Y3/1	灰黄 2.5Y4/1	良良好	
119	SA6	土師器	椀	全形	60%	口径（15.4cm） 底径6.1cm 器高6.2cm	平底の底部口縁部はほぼ直線的に立ち上がる	摩滅により不明瞭	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	粗普通	反転復元
120	SA6	土師器	椀	全形	40%	口径（12.9cm） 器高5.7cm	口縁端部が若干内湾	内外ともミガキ	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/8	良普通	反転復元
121	SE1	土師器	皿	全形	30%	口径（6.5cm） 底径（5.4cm） 器高（1.3cm）		内外とも回転ナデ。底部はヘラオコシ	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4	精良 良好	
122	SE1	土師器	椀	底部	20%	底径4.8cm		内外とも回転ナデ。底部はヘラオコシ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	精良 良好	
123	SE1	土師器	椀	底部	20%	底径5cm		内外とも回転ナデ。底部はヘラオコシ	褐灰 7.5YR4/1	浅黄橙 7.5YR8/6	精良 良好	
124	SE1	青磁	高台付椀	底部	10%	底径5.3cm			緑灰 7.5GY6/1	緑灰 7.5GY6/1	精良 良好	龍泉窯系か

第Ⅴ章　考察とまとめ

第１節　縄文時代晩期の土器

今回の調査では縄文時代晩期の遺物を確認することができた。この時期の遺物は隣接する２次調査では確認されず、やや離れた５次調査で確認されている。

土器溜りでは、刻目突帯文土器を中心とした遺物を確認することができた。全形が判明する資料には恵まれなかったため、突帯の位置や刻目の形態と施文法について検討していきたい。土器溜りから出土した刻目突帯文土器はほとんどが、口縁部突帯を口縁端部からやや下がった位置に貼り付けている。刻目の施文方法は指頭や爪先を利用しており、工具を使用した押し引き刻目は確認できない。南九州の突帯文土器についてまとめた藤尾慎一郎氏によると、口縁部の突帯は口縁端部から下がった位置に貼り付けるものが一般的に古く（山ノ寺・夜臼Ⅰ）、口縁端部に接する位置に貼り付けるものが新しい（夜臼Ⅱ）とし、刻目の施文方法についても指頭刻みが古く、押し引き刻目が新しいとしている[(1)]。よって春日遺跡８次の土器溜りから出土した刻目突帯文土器は夜臼Ⅰ期に相当し、刻目突帯文土器の出現期段階に比定される。このことは出土土器のなかに、黒川式に特徴的なリボン状突起が認められることからも首肯できる。

SCK0801では、口縁部に幅広で薄い粘土紐を貼り付けて肥厚させる土器が出土した。いわゆる松添式と呼ばれるもので、時期的には突帯文土器の前段階と考えられている。今回は口縁部から底部まで復元することができなかったが、口縁部の形状や色調など、土器溜り出土の突帯文土器とは大きなギャップを感じざるを得ない。土器溜りのなかから松添式の特徴を有する土器が出土していないため両者の間に時期差があるのは明白だが、松添式土器の位置付けや、前後関係にある土器群については不明な点が多い。

孔列文土器の出土も多い。土器溜り出土の土器にはほとんど孔列が施されている。穿孔方法はほとんどが、土器の外面から未貫通の孔を施すもので、これは南九州の孔列文土器の特徴といえる。ただし17では貫通孔が施されている。孔列文土器は黒川式期後半に出現し、板付Ⅰ式成立後の刻目突帯文土器にも認められることが指摘されている[(2)]。本県でも、黒川式後半期に併行するとされる松添式土器に孔列が認められる。また、本遺跡の資料同様刻目突帯文土器にもかなりの割合で孔列が施されるが、下限については判然としない。これは本県の縄文時代晩期後半から刻目突帯文期にかけての土器の編年が不十分であることに起因している。良好な一括資料の増加に期待したい。

第２節　古墳時代の住居と遺物

春日遺跡ではこれまで２次および５次調査で、古墳時代の住居址を確認している。これらはいずれも遺跡南端部に位置し、古墳群と分布域が重ならない。墓域と生活空間とが明確に区別されていたことを示している。今回の調査区では７棟の竪穴住居址を検出し、集落の広がりを確認することができた。

７棟の住居址のうちSAK0803、SAK0804、SAK0807がそれぞれ切りあっていたものの、ほかは一定の空間をもって配置されている。また、SAK0801とSAK0803で須恵器が出土しているが、このうちSAK0803で出土した須恵器坏身はTK23型式に相当し、２次および５次調査の時期とほぼ同時期である。

次に土師器についてみてみよう。SAK0807を除く６棟から、甕、壷、高坏、鉢、椀、杯などが出土している。甕は同じ住居址内においてもある程度の個体差が認められるが、おおむね口縁部付け根の屈曲が弱く、底部はわずかに平底を呈するものの安定せず、丸みをもつ尖底であることが多い。調整は板や指、布などを使用したナデが中心で、破片を含めてハケメ調整は確認されていない。ただしSAK0802では器壁が薄く、外面にタタキを施す個体が出土している。

壷はSAK0806で頸部に刻目突帯を施すものが出土し、SAK0603では短くやや外傾しながら立ち上がり、レンズ状の底部をもつものが出土している。

高坏は出土数が少ない。SAK0804では、杯部と受部との境が不明瞭な布留系の中型品が出土している。

供膳具である椀と杯については、口縁径が器高を上回る杯の出土が目立つ。杯には口縁部が直立するものと内径するもの、底部は平底とレンズ状の両方がみられる。

以上、出土土師器の特徴についておおまかにまとめてみた。古墳時代の土師器については、今塩屋毅行・松永幸寿が全10期に区分する編年案を提示している[3]。それによると今回の出土土師器はおおむね両氏の４期に相当し、須恵器との対応ではTK216からTK23型式併行期に該当することから、SAK0803出土の須恵器とも矛盾しない。また、春日遺跡２次・５次で確認された住居址とも同時期の集落である可能性が高い。今回の調査で古墳時代中期後半のきわめて短期間に営まれた集落が、春日遺跡南部の広範囲に分布することが判明した。

第３節　まとめ

今回の調査では、縄文時代早期から中世にいたる遺構・遺物を確認することができた。縄文時代早期の集石は、春日遺跡２次調査区よりさらに台地縁辺部に広がることが分かった。周辺遺跡でも台地縁辺部の傾斜地に大規模な集石を確認している。今後の課題としては住居址や各遺跡間の遺物の比較などが挙げられよう。

縄文時代晩期は、黒川式期から刻目突帯文期にかけての土器を確認した。晩期の遺物は隣接する春日遺跡２次調査では確認されず、100m程離れた５次調査で確認されている。５次調査では今回の調査と同じように、遺物の出土のあり方が土器溜りの様相を示しており、晩期の人々の生活の空間が広範囲かつ長期的であったことを伺わせる。また、２次調査において大量に出土した後期の遺物が全く出土しなかった。

古墳時代の住居址は今回７軒確認することができた。２次および５次調査区と合わせると16軒確認されたことになる。いずれも古墳時代中期中～後半にかけて短期間に営まれたものであり、周辺地形を考慮すると数十～100軒程度の集落であった可能性が高い。この時期、祇園原古墳群の北部では、本格的に前方後円墳の築造が始まっていたと考えられ、古墳と集落の関係を考える際に重要な事例である。また、後期群集墳の築造が開始され、春日遺跡北部でも古墳が築造されるようになると、集落も台地下の河岸段丘に移動する。集落と墓域との間には一定の空間を保つ必要があったのだろうか。

中世では溝状遺構を検出した。出土した青磁や土師器は16世紀代と考えられる。

春日および祇園原遺跡では近年、開発行為に伴う発掘調査に伴い、旧石器から中世にいたる遺構・遺物の存在が明らかとなった。さらに祇園原古墳群に関連する発見も相次いだ。今後も資料の蓄積に努めたい。

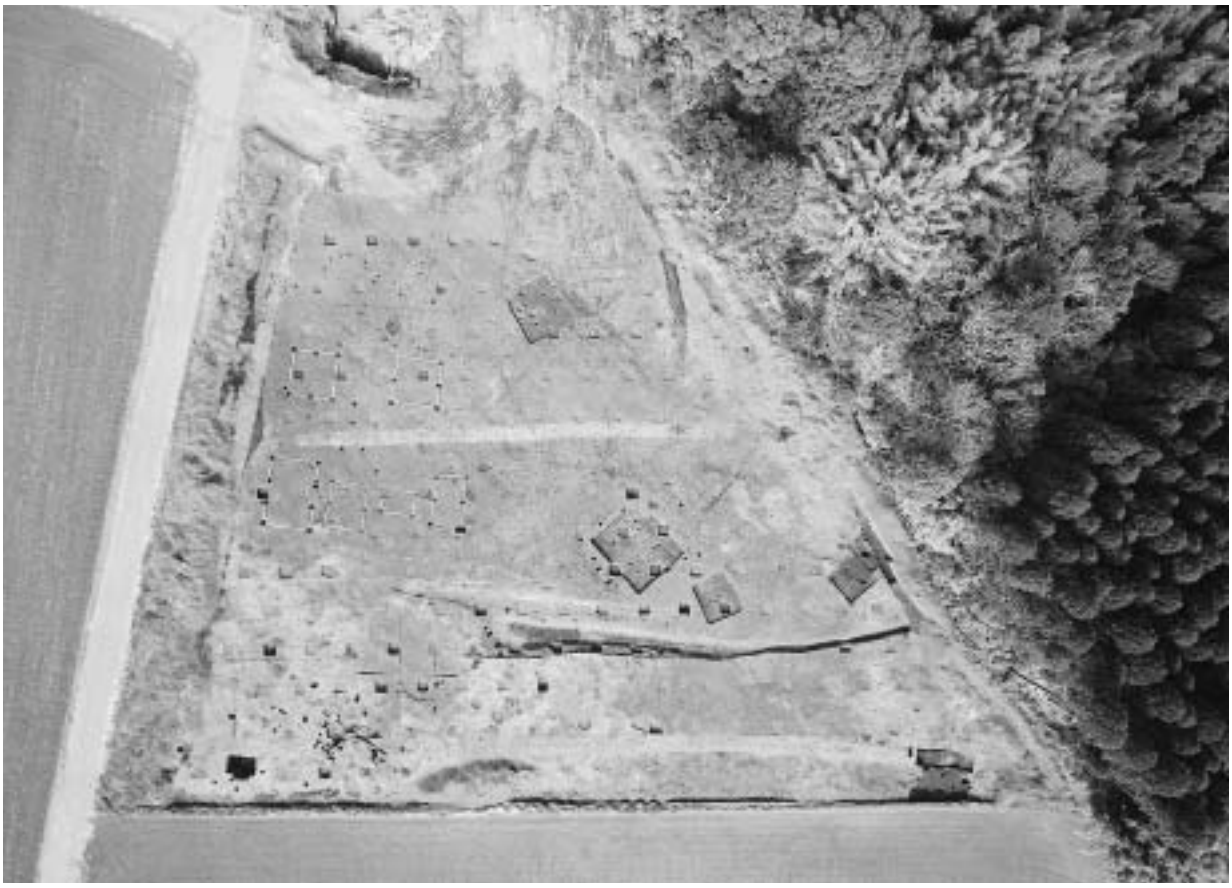
【註】

（1）藤尾慎一郎「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第27集鹿児島考古学会　1993

（2）片岡宏ニ「日本出土の孔列土器」『渡来人と土器・青銅器』雄山閣1999

（3）今塩屋毅行・松永幸寿「日向における古墳時代中期～後期の土師器－宮崎平野を中心として」『古墳時代中期・後期の土師器－その編年と地域性』第５回吸収前方後円墳研究会実行委員会2002

１．春日遺跡８次（北から）



２．春日遺跡８次（真上から）

図版２

1．SIK0801

2．SIK0802

3．SIK0803

１．SCK0802

２．SCK0801

３．縄文晩期土器溜り

図版４

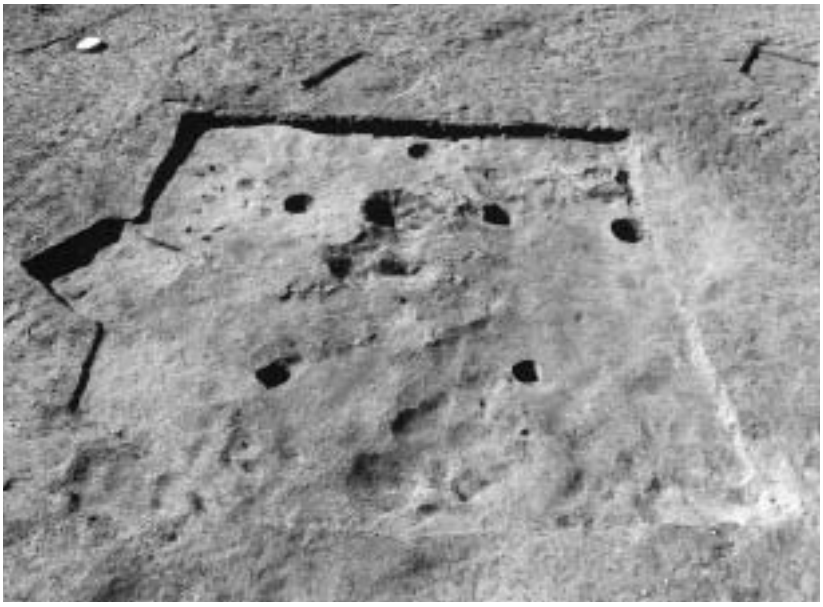
１．SAK0801遺物出土状況

２．SAK0801土層断面

３．SAK0801

１．SAK0802

２．SAK0803・0804・0807

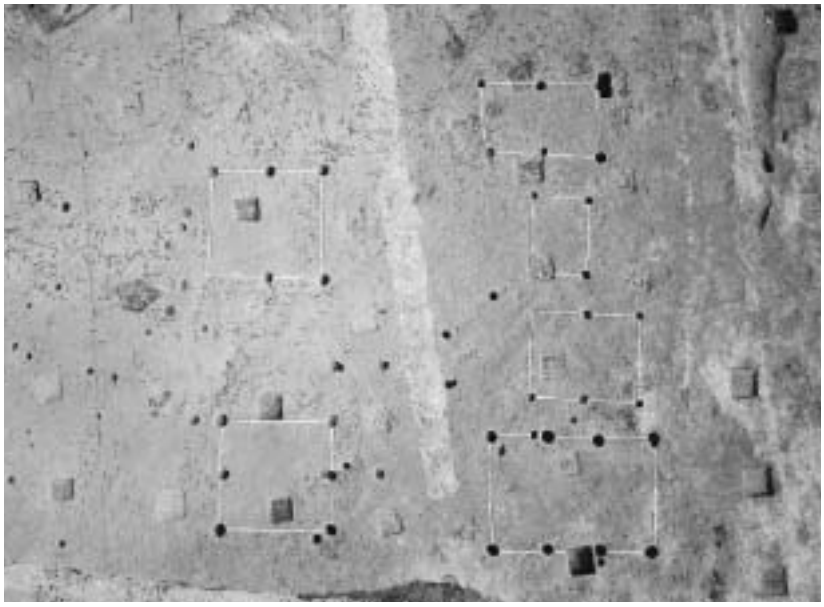


３．SAK0805

図版６

１．SAK0806土層断面

２．SAK0806



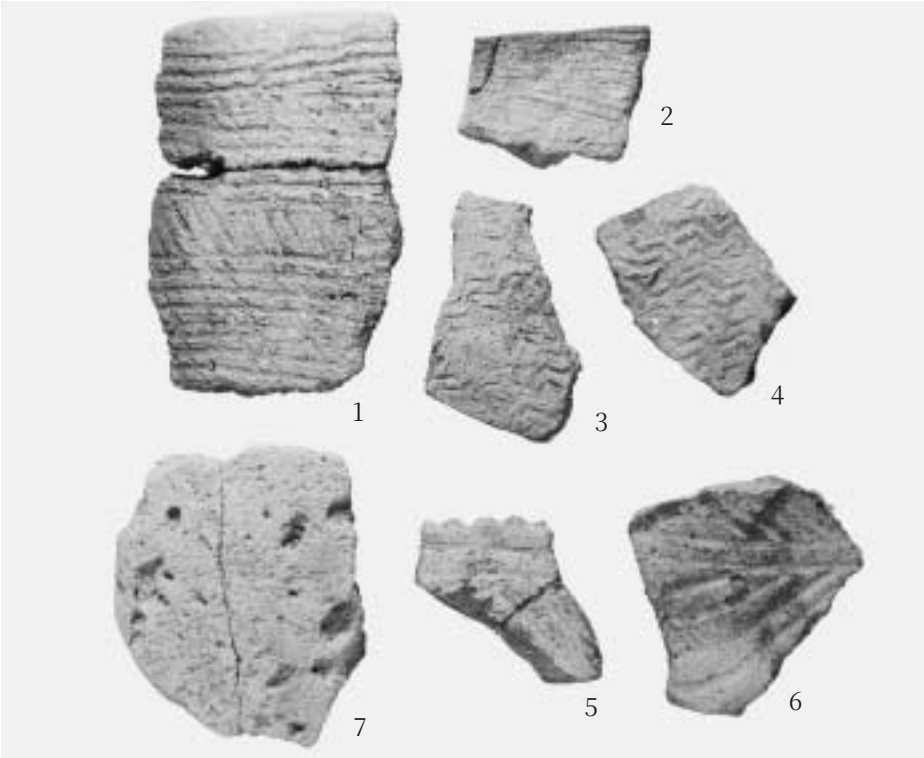
３．掘立柱建物群

１．SHK0807

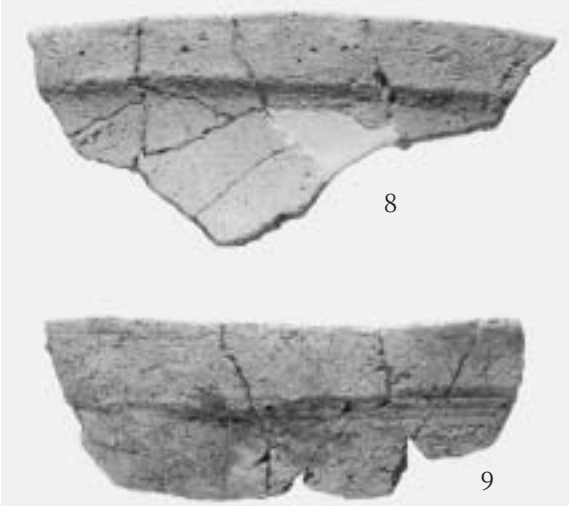
２．SEK0801土層断面①

３．SEK0801土層断面②

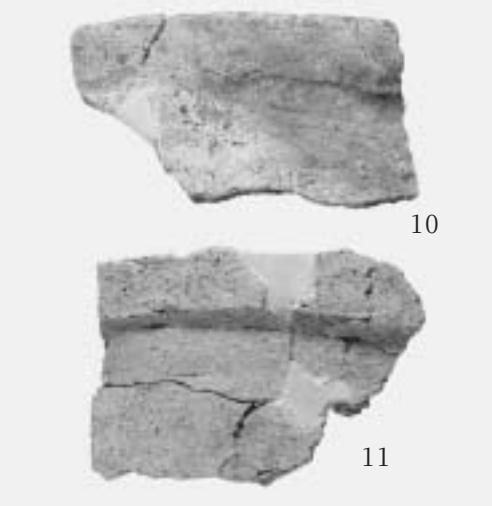
図版８



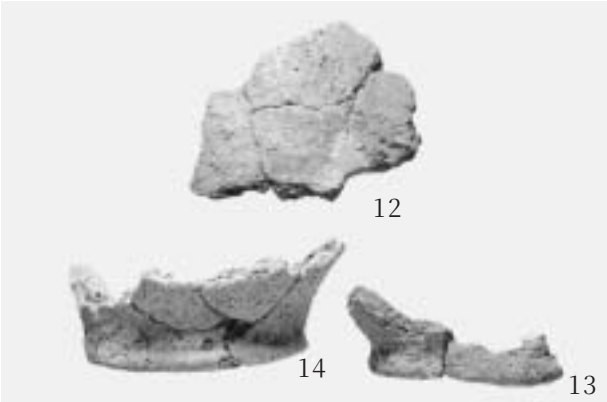
1．縄文時代早期の遺物



2．SCK0801出土遺物①

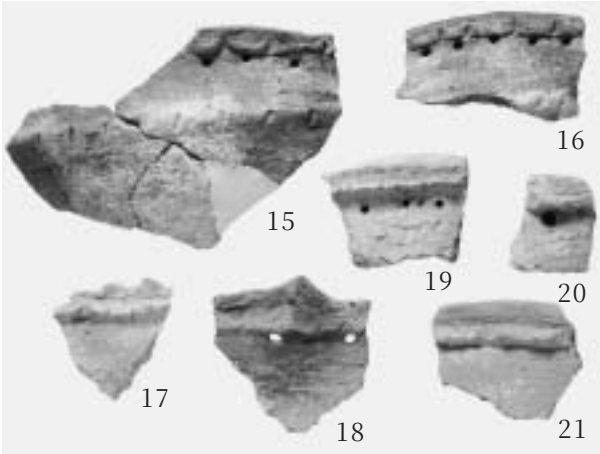


3．SCK0801出土遺物②

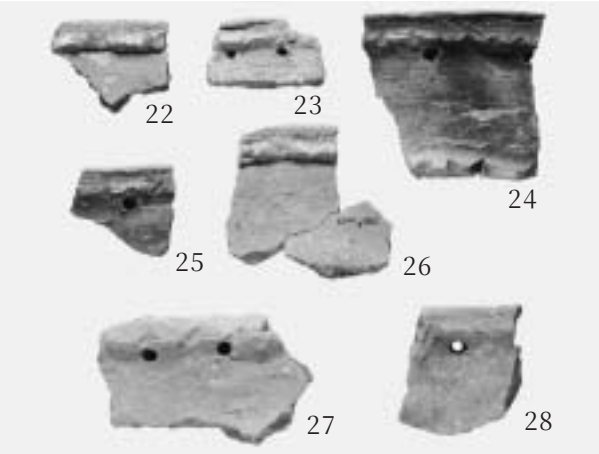


4．SCK0801出土遺物③

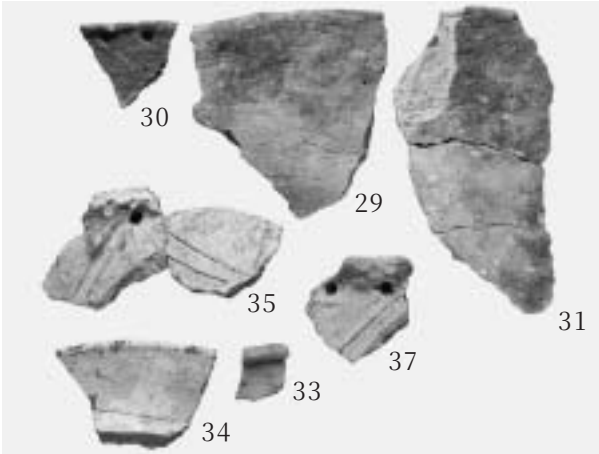
5．SCK0801出土粘土塊



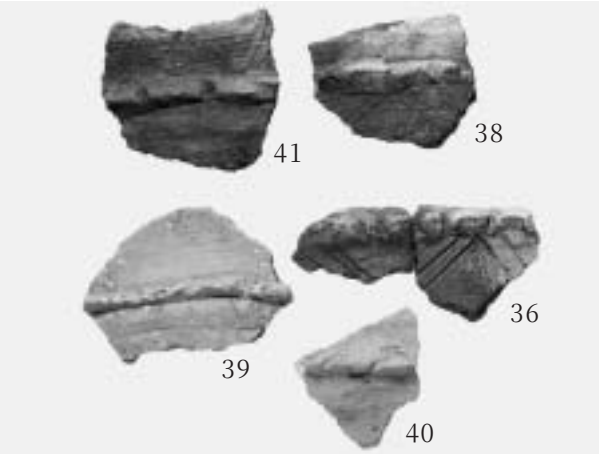
１．縄文晩期土器溜り出土遺物①



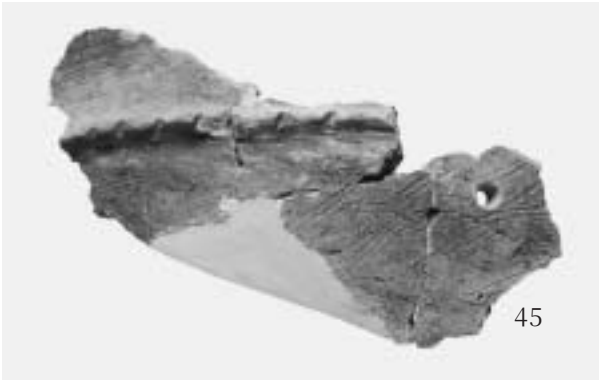
２．縄文晩期土器溜り出土遺物②



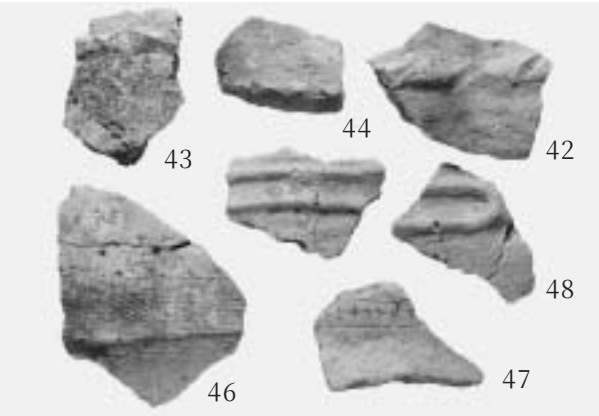
３．縄文晩期土器溜り出土遺物③



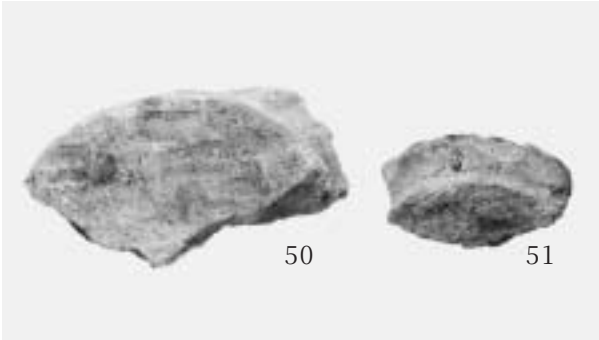
４．縄文晩期土器溜り出土遺物④



５．縄文晩期土器溜り出土遺物⑤



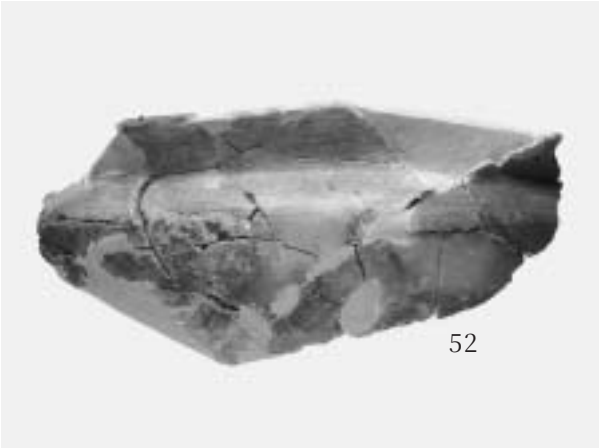
６．縄文晩期土器溜り出土遺物⑥



７．縄文晩期土器溜り出土遺物⑦

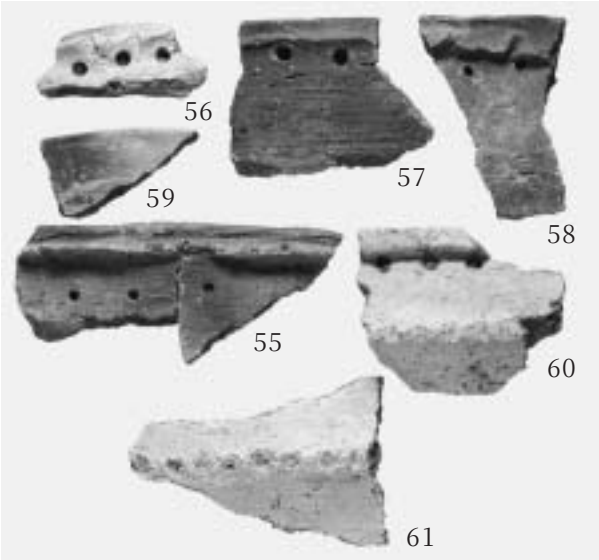
図版10

1．縄文晩期包含層出土土器①

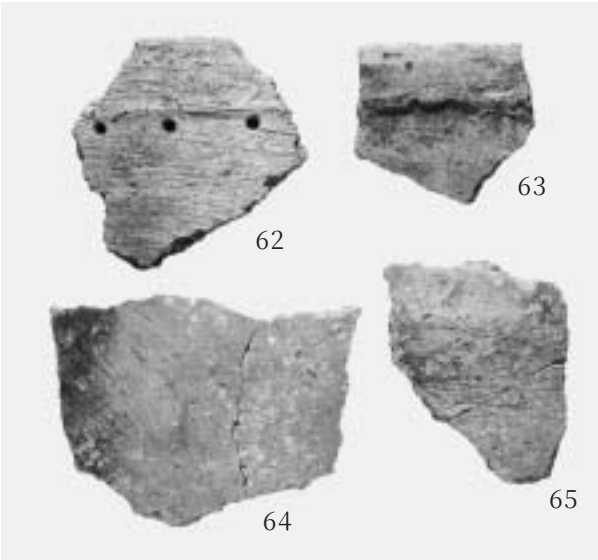


2．縄文晩期包含層出土土器②

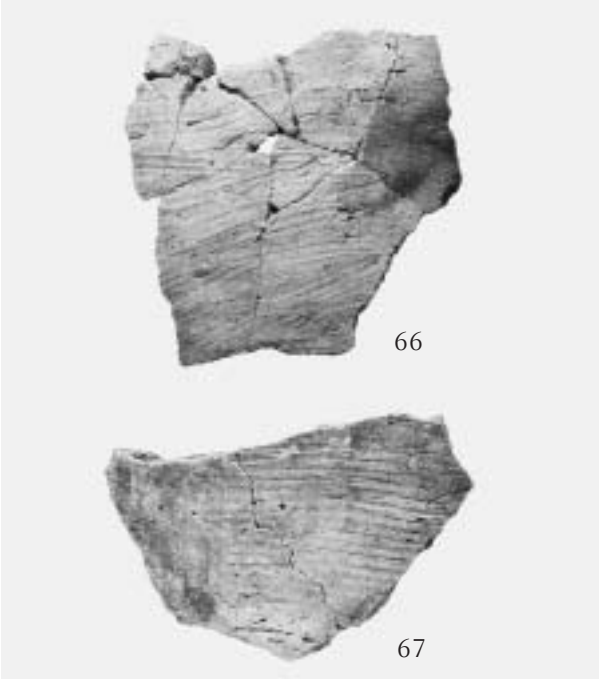
3．縄文晩期包含層出土土器③



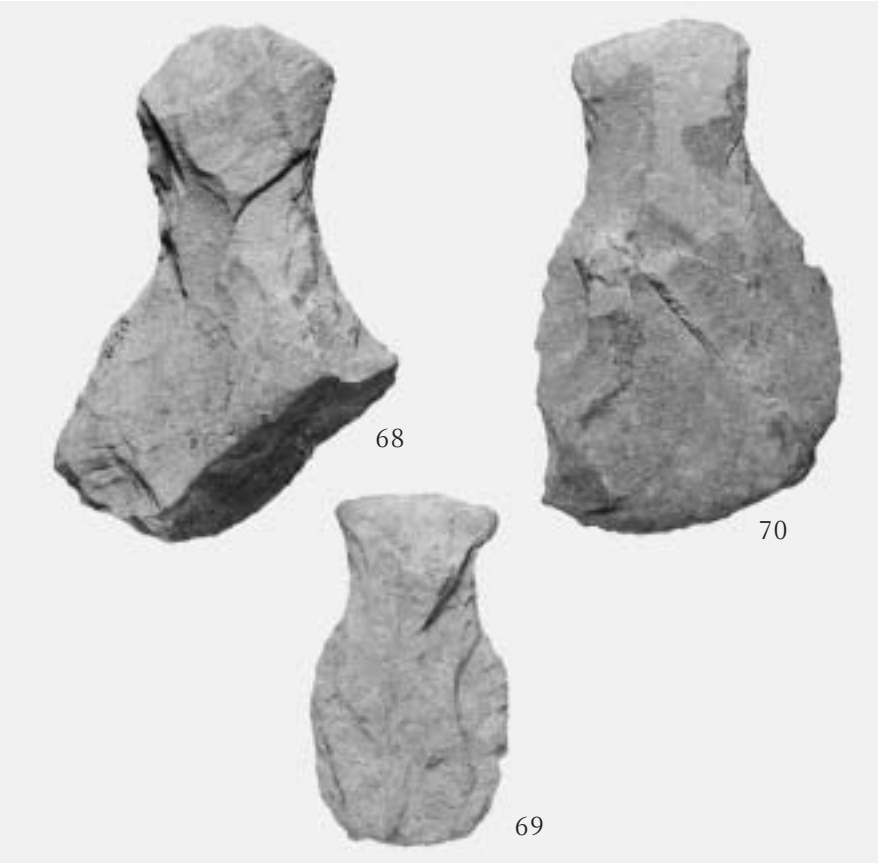
4．縄文晩期包含層出土土器④



5．縄文晩期包含層出土土器⑤



6．縄文晩期包含層出土土器⑥



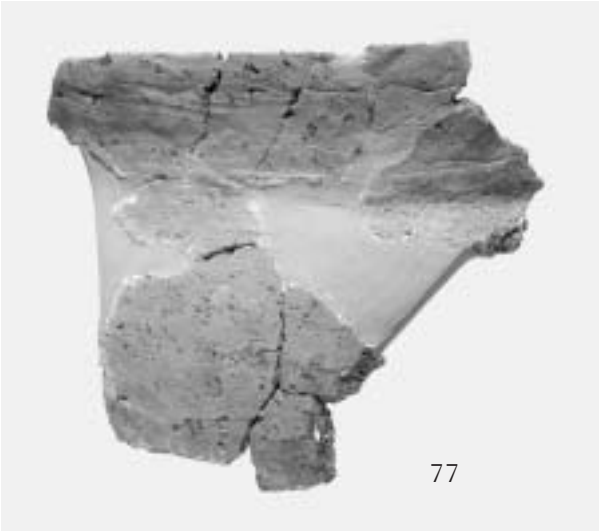
1．縄文晩期出土石器①

2．縄文晩期出土石器②

図版12

1．SAK0801出土遺物①

2．SAK0801出土遺物②



3．SAK0801出土遺物③

4．SAK0801出土遺物④

5．SAK0801出土遺物⑤

6．SAK0801出土遺物⑥

7．SAK0801出土遺物⑦

8．SAK0801出土遺物⑧

1．SAK0801出土遺物⑨

2．SAK0801出土遺物⑩

3．SAK0801出土遺物⑪

4．SAK0802出土遺物

5．SAK0803出土遺物①

6．SAK0803出土遺物②

図版14

1．SAK0803出土遺物③

2．SAK0803出土遺物④

3．SAK0803出土遺物⑤

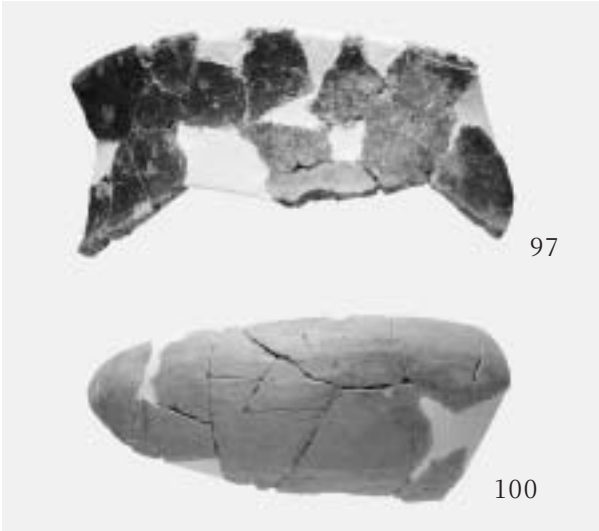
4．SAK0803出土遺物⑥

5．SAK0804出土遺物①

6．SAK0804出土遺物②

7．SAK0804出土遺物③

1．SAK0804出土遺物④

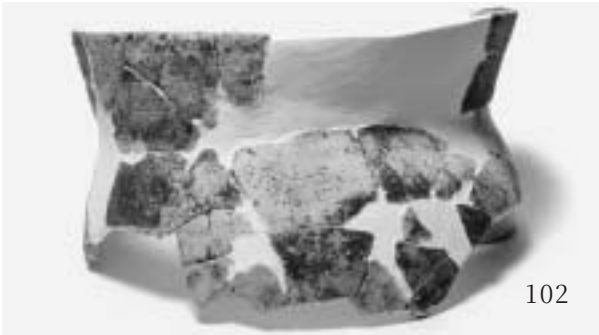


3．SA0804出土遺物⑤

3．SAK0804出土遺物⑥

4．SAK0805出土遺物①

5．SAK0805出土遺物②



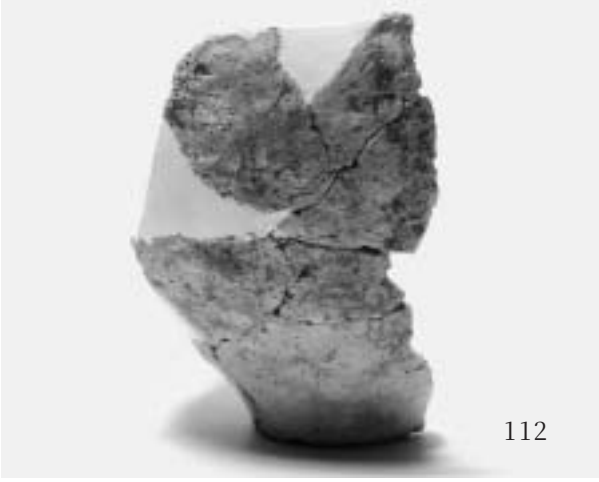
6．SAK0805出土遺物③

7．SAK0806出土遺物①

図版16

1．SAK0806出土遺物②

2．SAK0806出土遺物③



3．SAK0806出土遺物④

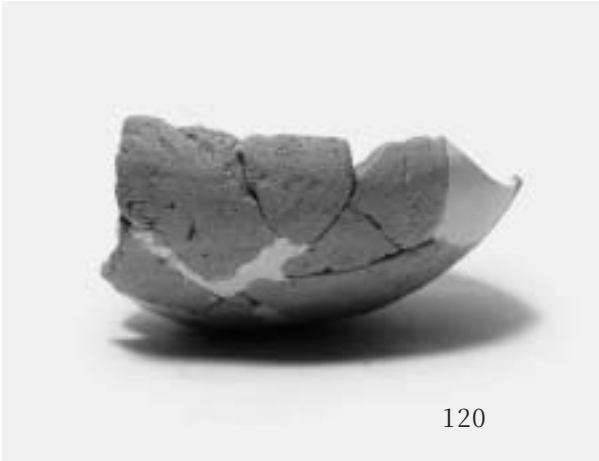
4．SAK0806出土遺物⑤

5．SAK0806出土遺物⑥

6．SAK0806出土遺物⑦

7．SAK0806出土遺物⑧

1．SAK0806出土遺物⑨



2．SAK0806出土遺物⑩

3．SEK0801出土遺物①

4．SEK0801出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	かすがいせきはちじ
書名	春日遺跡８次
副書名	個人農地土壌改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	１
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第49集
編著者名	樋渡　将太郎
編集機関	新富町教育委員会
所在地	〒889-1403　宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行機関	新富町教育委員会
発行年月日	２００８年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かすがいせきはちじ 春日遺跡８次	みやざきけんこゆぐんしんとみちょうおおあざにゅうたあざかすが 宮崎県児湯郡新富町 大字新田字春日	45202	1004			2003.09.25 ～ 2004.01.31	4,638m²	農地改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
春日遺跡８次	散布地 集落	縄文時代早期 縄文時代晩期 古墳時代 中世	集石　陥穴状遺構 土坑　竪穴住居址 溝状遺構　柱穴 掘立柱建物	縄文土器　石器 古墳時代土師器 須恵器 中世土器	

新富町文化財調査報告書　第49集

春日８次遺跡

―個人農地土壌改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

発行年月日　２００７年１２月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　株式会社 宮崎南印刷